

御神と不破

しるういっしゅ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とらハ3の再構成物。オリキヤラ、厨二、KYOUYA要素をこれでもかというくらいにマシマシにしたSSです。ほんのちよびつとだけ加筆修正していますが、一度読んだことがある方は多分読まなくても話は繋がると思えます。※Arcadia様にも投稿しています。

目次

序章

第1話：暗殺集団北斗 | 1

第2話：不破恭也と水無月殺音

21

1章：出会い編

第3話：高町恭也と高町美由希

78

第4話：変わり行く日常1 | 128

第5話：変わり行く日常2 | 172

第6話：運命邂逅 | 215

第7話：運命交差 | 254

第8話：永全不動八門 | 300

序章

第1話：暗殺集團北斗

簡単とは言えないまでも、十分に実行可能な任務のはずだった。夜の一族と呼ばれる人外達のなかでも、その名を轟かせる数多の名家によつて選りすぐられた精鋭中の精鋭。その気になれば独力で一つの街を一夜にして壊滅させることが可能な力を持った化け物達。如何なる障害も踏破し、犠牲を払つてでも自分達の任務を完遂する戦闘者。そこまでの力を持った連中が集められ、とある仕事を任された。その数じつに四十五人。

内容は単純で彼らの主の害となる存在の抹消。彼らが普段行っている仕事となんら変わり映えのない任務であった。だが、それを受けた彼らは眉を顰めることとなった。如何なる任務も表情一つ変えることなく実行する者達が、そのような対応をとつたのは何故か。理由は簡単で、彼らが目的とする相手、それが尋常ならざる存在であったから

である。

暗殺集団、ほくと北斗。

その集団は『破軍』を筆頭として、『武曲』『廉貞』『文曲』『禄存』『巨門』『貪狼』の通り名を持つ七人が所属し、そしてその七人ともが夜の一族と呼ばれる種族で組織されていた。

夜の一族とは吸血鬼や人狼、鬼といった存在の総称であり、それぞれが人を容易く超えた身体能力を誇っている。そんな彼らではあるが、現代において人間と敵対する者達は少数となっていた。科学が進歩し、人口も増大した現在ではわざわざ敵対するメリツトなどありはしない。故に彼らは時代の闇に潜み、人間達と共存するようになっていものが多数派となっている——勿論数多くの例外はあるのだが。

そのような事情など知ったことかと好き勝手に振舞っている存在が、北斗である。重ねて言うことになるが僅か七人で構成された暗殺集団。依頼があれば、どんな相手でも暗殺する。そこには正義も悪もない。夜の一族としての事情も思惑も、人の世の理も考慮しない最悪にして最凶のチーム。ただ彼らは依頼された任務のみを実行する。

単純な話となるが、彼らはあまりにも夜の一族の世界から逸脱してしまった。彼らが本領とする世界の闇で行動するだけならまだ許されたのかもしれない。だが、北斗は夜

の一族と人との境界を越えて活動することも多く、それが他の人外達の敵意を買うこととなり……今回の掃討作戦へと至ることになるのは自明の理であった。しかしながら、北斗を抹殺するために集められた精鋭中の精鋭——荒事を専門とする彼らが二の足を踏む理由。それは単純明快で、北斗を構成する七人は人外達の中でなお——逸脱している怪物達であり、その名を闇の世界で轟かせる嘘偽りない強者という理由だ。

特に彼らが踏ん切りがつかないのにもわけがある。先に挙げた理由もだが、七人の中でも特に恐れられている存在がいた。

北斗が長『破軍』。猫又という弱小にも分類される種族でありながら、その力量は夜の一族のなかでもあまりにも飛び抜けすぎた領域に到達していた。人外の究極。化物の頂点。闇の超越者。数多の称号を戴く、最強の九人に匹敵する至高の極地。日本という島国において彼女に勝る存在を探す方が難しく、比肩する者すら片手の指でたりるほど。すくなくとも破軍とやりあって勝てると思えられる楽天家は、集められた彼らの中にもいなかった。果たして彼ら四十五人が何人生き残れるか、というレベルの結果になるのは目に見えていたからだ。

そんな不安を晴らすかのように、彼らの上役である夜の一族の上位種達がある手段を取った。単純な方法であり、もつとも厄介で凶悪な破軍に対して、とある暗殺の依頼を持ちかけ北斗の拠点としているアジトから引き離したのだ。残されたのは残りの六人。

その名を轟かせてはいるものの、破軍さえいなければ十分に任務を遂行可能と読んだ全員の意思のもと、北斗を潰すために精鋭達は動き出した。六人さえ排除すれば、残りは破軍ただ一人。如何に頂点に近いといえど、単体ならばどうにでもできると踏んだ彼らに落ち度を求めるのは些か難しい話だろう。

様々な策を立てれど、それは最初の段階から躓いていたのだ。破軍という名の巨星を長として戴く六人もまた——夜の一族の領域を容易く突破した十分すぎるほどの怪物たちであつたのだから。



音もなく、声もなく、カーペットの上に崩れ落ちるのは男達。赤いペンキをぶちまけたかのように床や壁を染め上げるのは多量の真つ赤な鮮血。目つきの悪い長身の男が右手で大振りのナイフを弄んでいる。そのナイフは血まみれで、目の前の惨劇を引き起こしたのは彼であるということを証明していた。恐怖で顔を引き攣らせているのは仲間を無残に殺された黒ずくめの男達で——既に正門から突入した人数の半分、十人が物言わぬ軀となつている。

館へと突撃した男たちを迎えたのが館の扉を開けたすぐの上り階段に腰を下ろしていた目つきの悪いこの男ただ一人。完璧な奇襲のはずが読まれていたことに疑問を覚え、驚いた一瞬の隙の出来事が目の前の殺戮であった。反応を許さぬ超絶速度。瞬きをした一瞬で座つていたはずの男は突入してきた黒ずくめの男たちの首をナイフで掻つ切つていた。

その速さ、強さに完全に腰が引けている襲撃者達を目の前にして、目つきの悪い男は一つ嘆息する。彼らが何者かわからないが、こうして奇襲を仕掛けてきた以上目的は簡単に推測することができたからだ。自分たちが夜の一族としてやりすぎていることは理解していたが、ついに他勢力から実力行使を取られてしまったことに対して面倒ごと

になるなと二度目の溜息をついた。

「面倒くせえが……まあ、しゃーねえか。破軍が帰ってくる前に……ん？ タイミングが良すぎるな。まさかあつちも罨なんか？」

全く襲撃者を警戒せず、天井を見上げぶつぶつと独りごとを呟く北斗のメンバーに、僅かとはいえ隙を見つけた男達が行動を開始する。現状ここから逃げることは不可能だろうし、逃がしてもらえぬとは思えない。逃げ出すにしても目の前の独りごとを言っている北斗の男をどうにかしなければならぬのだから、全力を持って目の前の男を殺しきる。凄絶な覚悟を胸に抱き、男たちがその場から動き出そうとした瞬間――。

「さっさと片付けて下さいよ、貪狼」

平坦ながらもどこか呆れた感情を乗せた声が、黒ずくめの男たちの背後から耳を撫で付けた。ぶわりっと押し寄せる死の予感。反射的に振り返ろうとした男たちよりなおはやく、鋭い小剣の切っ先が躊躇いなくそのうちの三人の右胸を貫いていた。認識するよりさらに速く、理解するよりも遙かに速く。遅れてやってきた激痛と口の奥からせりあがってくる血。さらには置き土産と言わんばかりに振り返った二人の喉元を小剣が貫いた。

瞬きする間に五人を屠った人物は、シヤランつと綺麗な音をたてて小剣についていた血を振り落とす。こんな場所に相応しくない神父のような服装の体格の良い男性。そ

れに対して貪狼と呼ばれたナイフを弄んでいた男性が、ああっと短く声を上げる。

「禄存か。わりいな……ちよつと考え事してよ」

「油断、はよくありませんよ？　如何に雑兵とはいえ追い詰められた鼠は猫を噛むとも言われています」

「わーてるよ。油断はしてねーけど、気は抜いていたってのはあるかもな。悪かった。まあ、ちよつと気になることがあつてな」

それぞれが属する夜の一族の名家の中でも精鋭を自他ともに認められる彼らが雑兵扱いされたことに、生き残った者達の心に怒りの炎を灯すことはできなかった。一分にも満たない時間でそう言われても仕方のないほどに力の違いを思い知らされたのだから。

「気になることですか？」

「ああ。いくらなんでもタイミングがよすぎねーか？　襲撃のよ」

「タイミングが……？　ああ、確かに。破軍がいなかったことがわかっていたかのような様子ですしね」

ぬらりつと二人の北斗の視線が黒づくめの男達を刺し貫いた。まずいつと判断した彼らは体中を束縛する不可視の圧力を引き千切り、その場から脱兎の如く遁走を開始する。その姿を目で追っていないながら全く追おうとしない二人に疑問をいなくも、その謎は

次の瞬間には水解した。

突如として館の入り口を覆うような巨大な肉壁が出現したからだ。ギョつと目を見開く彼らは愕然とそれを見た。それは巨大なスーツ姿の巨漢であった。だが、巨大と言っても精々が二メートル少し。館の入り口を覆えるほどの規格外の体格ではない。ならばなぜそう感じたのか。それは単純にその巨漢が放つ莫大な圧力故に、である。一切の油断も、緩みも、手心さえも与えない、完全完璧な強者の放つ容赦のない殺気。そのオーラとでもいうべきそれが、逃げ出そうとした男達の認識さえも歪ませた。

「ツカアッ!!」

轟、と真上から振り下ろされた巨漢の拳。普段であれば何かしらの回避行動ができたのかもしれない。それを許さぬ強者の圧力によって、避けるという思考をも放棄させ、かろうじて取れたのは腕を頭の上で交差させ防御の体勢をとることが精一杯であった。まるで隕石でも降ってきたかのような威力と圧力をそのままに、ぐしゃりつと不吉な音を残して防御ごとその男を叩き潰した。館を揺らす地響きとともに、その場に残されたのは円状にへこんだ床と奇妙にひしやげた人の形を残さぬ何か。

シツという呼吸音が巨漢の口から漏れ、放たれた裏拳が隣にいた男の横つ面を強かに打ち据えた。骨が碎ける音をその場に残し、ダンプカーに跳ねられた人間よろしく弾き飛ばされ壁に激突。次いでズンつと床を踏み砕く震脚が響き渡り、音を置き去りにする

正拳突きが前方にいた黒ずくめの男の胸を穿ち貫いた。

残された二人はようやくそこで我に返り、地面を蹴りつけ加速。巨漢の横を走り抜け地獄の門を突破し館の外へと離脱することに成功した。空を満たし輝く星々と光り輝く月光に照らし出される夜の世界。その空間へと逃げ出した男二人はなんとか追っ手をまこうとさらなる加速を試みて——ペキョつというもの悲しくも笑いを誘うような奇妙な音を聴いた瞬間、視界が暗転した。首が百八十度曲がり折られた男二人が地面を勢いよく転がっていく。やがて止まるとしばらくの間はピクピクと震えていたが、そのうちに身体の胎動は治まりを迎えた。こんな不可思議な出来事が起きたというのにこの場に残された三人の男達は眉一つとして動かさない。まるで当然のことと受け止めているかのようなのである。

「ツメがあまいネー、巨門」

ケタケタと楽しげに笑う男の声が聞こえる。どこから聞こえるかと思えば突如として館の門の上からまるで蝙蝠みたいに逆さになって細目の男が現れた。その細目の男は、門の上の隙間にも足を引っ掛けてぶら下がっていたのだろうか、軽業師もかくやと空中で一回転、地面へと降り立つ。

「お前がいたのがわかっていたからだ、廉貞」

見かけ武人を思わせる巨漢——巨門は、彼の姿に相応しい低音の声で揺れることな

くそう答えた。元々非難するつもりなどなく、からかう程度の意味合いの台詞だったの
だろう、廉貞と呼ばれた細目の男はニコニコと薄ら寒い笑みを浮かべながら、そうだつ
たネと返答する。今しがた男二人の首を捻り殺したというのに笑みを浮かべられるな
どまともでないのだろうが、ここにいる北斗四人にそういった感情を抱けというほうが
無理なからう話であつた。

「で、こいつら何ネ？ ワタシ達に何か恨みでもあつたのか？」

「随分と大所帯での襲撃だつたようだな。……正門からでも二十……五人か。誰か心当
たりはあるか？」

「ありすぎてわっかんねーつて。てか、一人くらい生かしておけよ、お前ら。情報ききだ
せねえーだろうが」

「一番殺している貴方に言われたくない台詞ですけどね、それ」

和気藹々と死体が転がり血の海となつている惨劇の現場で語り合う四人。もし仮に
この場に無関係の人間がいて、先程の殺戮の舞台を見ていなかったとしても——この
光景だけで彼らの異常性は自ずと理解できるであろう。その時、ふと貪狼が思い出した
かのようにある言葉を口に出す。

「つーか、お前ら全員こっちきてどうすんだよ？ 冥の姐さん——つて、武曲の方は大
丈夫なのか？」

平然と十人以上の同胞の首を掻つ切つたとは思えない貪狼が、どこか心配そうに語るその内容は一人の無事を確認する台詞で、違和感を拭えない。

「いや、姐さんはさつきからお風呂はいつてたからネ。護衛からワタシは外れているんだヨ」

「おい、じゃあ何か？ 姐さんは今一人つてことか？ 風呂場で？ こいつら以外の敵が攻め込んできたらどうすんだ？ てか、きてんだろ確実に。気配が滅茶苦茶するじゃねえか。ぶつころすぞテメエ」

廉貞の何でもないような返答に、貪狼の額に青筋が浮かぶ。それにしようがないな——こいつは、的ない思いでもあるのか廉貞は肩をすくめる。

「文曲が一緒に入浴してるからネ。まあ、大丈夫じゃないかな」

「それなら問題はあるまい。貪狼もあまり怒るな。流石に風呂場までこいつが護衛にはいるわけにもいくまい。それに廉貞……お前はあまり貪狼をからかうな。こいつは武曲に関する事に対しては沸点が低すぎる。わかってるだろう？」

「全くもってその通りですね。貴方は子供ですか、貪狼」

二人の間をとりなす巨門。それに続く禄存の鼻で笑う台詞に、破軍を神のように信仰するお前が言うか——と言った意味合いを含んだ生暖かくも呆れた視線を三人が向ける。その視線を理解できないのか、訝しげに眉を顰める禄存。

「まあ……文曲がついてるなら問題ねえな。そんならこっちはこっちで仕事に取り掛かるか」

「そうだね。破軍が帰ってくるまでに綺麗にしないと怒られるかもヨ」

「襲撃者よりも掃除の方が手間がかかるといいうのも皮肉な話ですね」

「……同感だ」

はあ、と深い溜息をついて、この場にいる四人は館の入り口に散らばっている死体と血の汚れを落とそうと掃除にかかるのであった。



館の正門から突入した男たちとはまた別ルート。即ち裏口からの奇襲を仕掛けようとした襲撃部隊は、館の中に踏み入ることなく裏庭にて足を止められていた。彼らが踏

みとどまつた理由、それは裏口の前に一人の女性が立っていたからだ。

体格は女性としてみれば平均を若干超えた程度。即ち身長は百六十を少し超えた程度だろうか。ウェーブのかかった茶色の肩まで伸びた濡れた長い髪が風に吹かれて揺れていた。顔立ちも整っており、こんな場所ではなく日常の道端などで通り過ぎれば反射的に振り返ってしまうほどに異性の目を惹き付ける。そんな美女が若干不満そうに眉根を寄せているのは、彼女の今の格好を見れば一目瞭然だ。何故ならば、気配を感じ急いで入浴からあがったのだろう、バスローブを裸体の上から羽織っただけの姿だったのだから。恐らくは下着すらつける間も惜しんだのか、バスローブで身体を隠しているものの、その豊かな双丘がちりつと隙間から見え隠れしていた。健康的な美というものを感させる姿ではあるものの、さらに目を引くものとして、何故か首から口元までを隠す大きなマフラーを巻いている。そんな物を巻く暇があつたら下着をつけたほうが良かったのでは、と男達は敵ながらふと思ってしまった。

眼前に広がる男たち——計二十名。その数を前にしても女性は微塵も揺るいでいる様子は見られない。この館にいる以上、間違はなく北斗の一員。それを理解している彼らは、先程一瞬とはいえ感じた緩みを引き締めなおす。如何に奇妙な格好をした女性といえど油断などしてはならない。速やかに相手を無力化する——そう決めた瞬間の出来事であった。

ボツという風を貫く音がした。その音がしてから遅れること数秒、地面に崩れ落ちる音が続く。地面に転がる男三人の肉体と血の海。胸元に風穴を開けられた、と他の者達が理解する間もなく、女性が何時の間にか手に携えていた槍の穂先がもう一度ぶれた。その踏み込みの速さ、尋常ではない。男たちの視認できる速度を遥かに超えていて、気がついたときには仲間が突殺されている。女性は何か特別なことをしているわけではない。見る人間が見れば分かるが、基本なのだ。右手で柄尻に近い側を、左手で若干離れた場所を握り、僅かに腰を落とした構え。軽く握った左掌を滑らせながら右手の力で突き出す。突き出す速度も驚異的だが、引き手のスピードもそれを超えている。連続して放たれる突きは三段突きでありながら、一度しか突いたように見えないほどであった。やがて驚きから回復し女性との距離を詰め様とした者から順に彼女の槍は容赦なく狙って落としていく。文字通り手も足も出ない。それを可能とするのは槍という長い間合いを誇る武器を完璧に使いこなした達人レベルでの空間支配とでもいうべき領域展開の結果とも言えた。

「文曲……もういいよ」

ピタリつと殺戮の嵐が突如として終わりを告げた。油断なく槍は構えているものの文曲と呼ばれたマフラーの女性は裏口の前で静止している。そして一拍してから、カチャリつと裏口のドアノブが金属音を鳴らして開かれた。

扉から出てきたのは一人の少女。こんな死地においてなお、男たちの視線はその少女に釘付けとなった。彼女はまるで人形のような少女であった。文曲とともに入浴していたのか、流石に髪をかわかす暇がなかったのだろう、背中まで伸びた若干紫がかつた黒髪が湿り気を帯びているがバスローブ姿の文曲とは異なり、キチンと服は整えている。目が僅かに釣り目がちではあるものの、そんなことなど気にはならないほどに容貌が整っていた。見える肌も侵し難い白雪のように穢れなく、上質の陶器のように滑らかだ。背は小さく、体つきも幼い。されどそれが少女の存在に神秘性を与えているかのようであった。夜の一族とは美形が多いなれど——ああ、その顔かんばせや、妖精が如き可憐端麗、絶佳の如し。

しかれども、この妖精を異端たらしめているものが左手に一つ。否、一振り。小柄で幼い身体とは対照的な、鞘におさまった刀。その長さや三尺余。それを重さを感じさせずに左手に携えて、地面を歩く音も響かせず無音で男たちへと近づいてくる。いや、文曲の側へと到達すると、ぽんつと彼女の身体を軽く叩く。

「悪かったね。でも後は僕に任せてよ」

「……」

ふるふると首を横に振った文曲に、少女は苦笑。

「お前の気持ちは分かるけどね。僕の気持ちはわかかってほしいな。娘同然のお前の身体

を有象無象に見せてなんてやりたくないんだ」

「……」

逡巡は一瞬。コクリつと今度は顔を縦に振った文曲は、構えを解くと一歩下がる。逆に少女は前へと足を踏み出してきた。それだけでユラリつと空気が奇妙に熱を帯びた錯覚を生み出す。

「ひい、ふう、みい、よお、いつ、むう……なな、か。あまり残っていないね。文曲の優秀さを褒めるべきか、キミ達の不甲斐なさを嘆くべきか」

その歩法。無音で歩み寄ってくるその姿。見かけは少女——だが、身体が、頭が、なにより夜の一族の本能が警鐘を激しく鳴らしている。この少女は、この女は駄目だ、と。男達が知っている夜の一族の名家達。一族の中でも上位種と呼ばれる男達の主を持つとしてもこれには及ばない。真正正銘——怪物のなかの怪物だ。なんだ、この女は——なんなのだ、この存在は。警戒すべきは破軍だけではなかったのか。一体この女は——。

「北斗が序列二位。武曲——それが僕の戴く称号だ。それを冥土の手向けに持つていくといいよ」

刀を抜いて紫電一閃。混乱の極みに至っている黒ずくめの男たちは、少女の一挙手す

らも見切れなかつた。その動作、その挙動、飛燕の早業。抜き打ちすらも見せずに彼女の——武曲の刀は男達の頸を撫で切つた。七人を葬るのに要した時間は僅か二秒。まるで息をするかのように、花を摘むかのような気軽さで。刀の妖精が得物を納めて踵を返した瞬間、首が落ち吹き上がる血の噴水。何の感情も浮かべずに七人を斬り殺した武曲は、やれやれと吐息を漏らした。その姿や、なんと可愛らしくも美しいことか。後ろに広がっている死山血河がさらに彼女の姿を引き立てる。

「……まづつたなあ。つい全員斬つてしまつたけど……誰の差し金か聞き出せばよかつたかな」

「……」

武曲の姿に見惚れていた文曲であつたが、そういえばそうだったかもしれない、と首肯した。とはいつても既に全員が皆殺しなのだから、どうしようもないのだが。

「正門の方からも攻め込んできてるみたいだし、そつちに期待しようか」

こちらと違つて正門には感じられる限り、北斗のメンバー四人がいる。それならば一人くらいは生きて捕まえているだろう。そんな希望的観測をしながら、武曲は文曲を引き連れて館の外をぐるりと回つて正門側へと向かおうと足を踏み出し——止めた。

「お、何々？ 私がいない間に何かあつたの？ おしかつたなー、もうちよつと早く帰つてこればよかつた」

裏庭に広がる惨劇を気にも留めず、逆に面白そうなるのを見るかのように一人の女性がカラカラと笑いながら奥に広がる暗い森から姿を現した。

「なんだ。お早いお帰りだね、破軍」

「なんだよ、なんだよう。破軍だなんて他人行儀な。何時もどおりお姉様って呼べばいいじゃん」

「お姉様だなんて僕の生涯で一度も呼んだことはないけどね、殺音^{アヤネ}」

その返答に満足したのか、北斗が長破軍は武曲の下まで歩いてくるとワシヤワシヤと力強く彼女の頭を撫で回す。乱雑な扱いに、さしものの武曲も些か不満げな顔つきで破軍の手から逃げ出した。入浴後のためまだ髪の毛を手入れしていなかったのが幸いだ。ぐやぐやにされた髪の毛はあとでしっかりと手入れしておこうと心に決めたところであつた。破軍の機嫌がかつてないほどに良いことに。

「……何か面白いことでもあつたの？」

「おおっと。それに気づくかあー。流星は我が愛しのまいすたー。うんうん。あつたあつた」

ペアつと花咲く笑顔で両手を広げ、これ以上ないほどの上機嫌を見せ付ける。

「今度の依頼がね。面白そうなんだ。うん、間違ひなくね」

嫌な予感がする。武曲は素直にそう思った。

殺音が面白そう——そう表現するなど滅多にないことだ。そもそもが、彼女は他の北斗メンバー六人とは感覚が随分と異なっているのだ。

「御神の一族。それが次の依頼の標的だつてさあ」

まじか……顔を引き攣らせて武曲は言葉にならない呻き声をあげる。日ノ本の裏に潜みし暗殺一族。人の身でありながら夜の一族とも渡り合える正真正銘の人外の域に達した人を超えた人。これまで受けてきた依頼の中でも間違ひなく最上位となる化物集団。しかも御神の一族のだれそれではない。標的は一族だとはつきりと言い切つた。幾らの報酬を約束されたか不明だが、割に合う合わないの話ではなかった。しかしながら最高にテンションをあげてしまっている破軍を折れさせるのは不可能だろう。こういったときの彼女は絶対に自分の意志を曲げないのだから。

「うん。最高だなあ。本当に本当に本当に——楽しみだよ」

夜天に煌く月を見上げ、にへらつとだらしなく笑みを浮かべた破軍が心の底からの笑顔を浮かべて笑っていた。

第2話：不破恭也と水無月殺音

それは、背筋を粟立たせるほどにあまりにも美しく鮮やかで、魂さえも魅了する華麗でありながら無骨な死を纏った剣閃であった。恐ろしいほどに速く、鋭い、横薙ぎの一閃。空を渡り、一切の容赦も無駄も、躊躇もなく自分へと迫りくる木刀を見ながら少年は、石像のように強張っていた四肢を無理矢理動かし回避に転じようと体を捻らせる。

だが、その行動はあまりにも遅かった。少年の回避行動は決して悪かったというわけではない。むしろ見かけ小学生程度の年齢の少年が自分へと迫ってくる超速度の木刀をここまで冷静に凝視し、回避しようと動こうとすることが異常なのだ。

それでも木刀をふるってきた相手の男性の手加減抜きの一撃は——あまりにも速過ぎた。普通の人間では、何かが動いたな、程度の認識しか抱けないであろう。それほどまでに速い、一瞬の斬撃。それをあろうことか、少年は確かに木刀の切っ先までも視線のうちにさめていた。

それでも——少年の身体がそれに追いつかない。

「っ……」

コツンと少年の額を木刀が叩いた。

少年が回避しきれないと分かった瞬間、木刀を薙いでいた男性は手を止めていた。しかも、少年からミリ単位しか離れていない空間で正確に。寸止めといえはいいのだろうか。しかし、ある種の神業ともいえるその技には、少年もため息しかできない。少なくとも今の自分では真似することなど絶対に不可能な芸当。

「まだまだだなあ、恭也」

「……もう一度おねがいします」

ニヤリと面白そうに笑みを浮かべる男性。

中肉中背ではあるが、服の上からでも分かるほどに筋肉が引き締まっている。どこか肉食獣をおもわせる雰囲気と肉体だ。鍛錬の途中だというのに私服で、全身真っ黒の服装で統一している。

動きやすいとはいえないであろう恰好なのにあれほどの速度でうごけるのだから信じられない。顔は美形——というより男臭いというのだろうか。短く刈られた髪とやや伸びた無精ひげがそれをより際立たせている。その男臭さが良いと多くの女性たちが噂をしていたのを、恭也と呼ばれた少年は知っていた。

自分の父である目の前の男性——名を不破士郎という——が、女性に魅力的に映

るのは何故だろうか。それが不思議でならない。確かに外見は異性を惹き付けるに十分なものであろうが、未だ幼い息子を連れて日本行脚に出かけるその行為はあまり褒められたものではないはずだ。それが知られていないはずもないが、やはり当事者ではない者達ではその過酷さをあまり理解できていないのかもしれない。

そこで恭也は自分の呼吸が酷く乱れていることに気付いた。

長い間全力疾走したかのようなだるさを体全体に感じる。どうやら士郎のお遊びのように出していた剣気に軽くあてられていたようだ。整えるように深く呼吸を繰り返す。

二人が今手合せしていた場所はある一族の道場。古き時代から——日本の裏に潜み、生きてきた殺戮一族。二刀の小太刀を携え、あらゆる暗器を使いこなす最強の名を欲しい俣にする剣士達。人はその一族をこう呼ぶ……即ち。

——永全不動八門一派・御神の一族——。

ここはその御神流を受け継ぐ一族の宗家の敷地の一面にある道場なのだ。そして士郎は御神の分家である不破最強の剣士。いや、御神家も含め最強の剣士として噂される

ほどの男である。

学校の体育館ほどの大ききがあるだろうか……周りを見渡せば今の恭也では到底及ばぬ幾人もの剣士達が、しのぎを削りあつてゐる。誰もが十分に達人と呼ぶにふさわしい腕前であつた。

そんな恭也の視界の端に艶やかな黒髪を腰までのばした女性が心配そうに士郎と恭也を見ていた。いや、正確には恭也を凝視している。美しすぎる容姿は時に相手に冷たい印象を与えるとも言うが、彼女に限つてはそんなことは微塵もなく、大和撫子という表現があてはまる端麗な女性であつた。身長はそう高くはないが、唯一の悩みが胸が小さいということ、よく恭也にそのことをもらしていた。僅か七歳にしかならない彼にとつては、どんな反応をすればよいのか非常に困る愚痴である。

女性の名前は御神琴絵。御神宗家の長女であり——女性でありながら士郎にも勝るとも劣らぬ剣士である。心配そうに見やる琴絵の視線に耐えきれず恭也は逃げるように足元に視線を落とした。手も足もでない鍛錬の結果に、僅かな羞恥がこみ上げてくる。

「いいや、今日はお終いだ。お前に付き合つてたらきりがなしな」

ポンと士郎は恭也の頭に手を置きグシャグシャと乱暴に撫でた。それに不満そうに眉を顰める恭也。撫でる士郎の手をパチンと軽く叩き落とすと、その行為に士郎はより

笑みを深くした。本気で嫌がつてなどいないのが士郎にはわかつているからだ。

他の子どものように公園で遊ぶでもなく、ただただ剣をふるう。子供らしかぬ恭也を心配したこともある。まだ一桁の年齢のくせにどこか大人びた雰囲気をもとう恭也だったが、それは甘え方が分からないのだろう。

物心ついたところから父である士郎と日本中を旅してまわっていた恭也だったからこそ——甘えるという選択肢を無意識のうちに排除してしまった。恭也が年齢に見合わない物の考え方をするようになったのは間違いない。士郎の責任であり、それを申し訳ないと思っていた。

「それにそろそろ夕飯時だからな。美影のババアがもう少ししたら呼びに来るぞ」

士郎の言葉を確かめるように恭也は道場の入り口の方を見ると、確かに夕焼けが差し込んできていた。幾度となく士郎と手合せをしていたが思っていたより時間がたっていたようだ——たとえそれが、最初の一撃を防ぐこともできない一方的な結果の手合せだったとしても。

「……少し汗を流してくる」

募る悔しさを振り払い、恭也はそう言い残し道場を後にする。

悔しいが——これはある意味当然の結果だと己に言い聞かせて。

まだ数年しか生きていない自分程度が、その数倍以上の時間を生きた天才——不破

士郎に勝とうなど虫が良すぎる話だ。いや、勝つかどうかの話ではない。今の恭也では最初の一撃さえも避けることができない。恭也はまずは一太刀目をかわすことを目標にゆつくりと走り始めた……のだが。

「きょーやちやあぁあぁあー……ん!!」

ドゴンと音が成る程の勢いで走り出そうとした恭也の背中目掛けて体当たりしてくる琴絵。いや、体当たりというより正確には、本人的には抱きついただけなのだろうが、そのあまりの衝撃に当然幼い恭也が耐え切れるはずも無く道場の床に倒れ付す。その拍子に顎を床へと打ちつけガンつと激しい音が鳴り響く。床にうつ伏せに転がった恭也になおしがみつくと琴絵に対して道場にいた全員が、またか……というように手を止め生暖かくその光景を見守る。

「恭也ちゃん、痛いところない!? 遠慮なくいつてね!! 私が治療してあげるから!!」
「だい……じょうぶです」

倒れたときにうつた顎をさすりつつ、なんとか起き上がりながらやや涙目でこたえる恭也。まさか貴方に抱きつかれて倒れたときに打った顎が一番被害が大きいですと言う訳にもいかない。

琴絵はゆつくりと身体を離すと、恭也と視線を合わせるように腰を曲げる。

その拍子に長い髪が琴絵の背中から零れ落ちる。その髪を自然な様子で背中へとお

しやる。甘い、琴絵の香りが恭也の鼻をくすぐり、反射的に顔を赤くする恭也。

「あれ？　顔が赤いよ？　本当に大丈夫？」

「だ、大丈夫です……。走ってきますので、失礼します」

自分の額を恭也の額にあてて熱をはかつてきた琴絵から慌ててはなれ、背を向けて走り出す。その背中を残念そうに見送る琴絵。完全に恭也が見えなくなるまで見送った彼女は温和な表情を一変させ、鋭い視線を士郎にむける。険の混じったそれに、反射的に逃げ出したくなる士郎ではあったが、それを堪えて視線を受け止めた。

「士郎ちゃん。もっと手加減してあげなさいよ。恭也ちゃんはまだ七歳なのよ？」

「……手加減してあいつが喜ばば幾らでもするんですけどね」

「でも……!!」

「琴絵さんにも分かってるんじゃないですか？　あいつの今の目標は俺の初太刀をかかわすことです。手加減してそれを壊したくはないんですよ」

「むう……」

納得しきれない……。そんなふう唇を尖らせて士郎を睨む。

本人としては不満を全身で表しているようだが、全くそうは思えない。可愛らしさ満点である。しかし、普段の琴絵ならばこのようなことを言わない。誰よりも優しく、思量深い人間なのだから。その相手の考えていることを第一として、助言を行う。

だが、恭也のこととなると話は別だ。琴絵は不破恭也のことを大切に思っている。実の弟以上に可愛がっているのだ。溺愛しているといってもいい。恭也が自分に甘えてくれない、ということに不服に思う程に。士郎の子供ということもあり、御神と不破において恭也はおおいに可愛がられているが、両家においてなお彼女の熱愛ぶりは追隨を許さない。

「でもでも……士郎ちゃんの本気の一撃を避けることなんて難しいじゃない？　この場にいる何人がそれをできると思ってるの!!」

「まあ……そうなんですけどね」

初太刀をかわす。

言うだけなら簡単に聞こえるかもしれない——不破士郎が相手でなければの話だが。

士郎は強い。強すぎる。長い歴史を誇る不破の一族で歴代最強の名を冠しても可笑しくはないほどに。不破が生み出した異端の剣士。何者にも束縛されぬ……そしてそれが許されるほどの実力。

いや、士郎だけではない。

士郎が生きているこの時代は異才の集まりである。

不破家からは不破士郎。その弟である不破一臣。士郎の妹である不破美沙斗——

今では御神当主の静馬と結婚しており御神美沙斗が正しいのだが。三人の母親である不破美影。御神家からは御神静馬。ここにいる御神琴絵。

そんな彼らを凌駕するとも言われる御神最強の剣士。御神宗家長男の御神相馬。

その誰もが、もし時代が違えば御神最強の名を欲しいままに出来たであろうほどの實力の持ち主ばかりだ。それほどの剣腕を持つ土郎の一撃を避ける。幼い恭也にできるはずもない。目標というにはあまりにも高すぎる壁だ。

「私は心配なの。高すぎる壁は……何時か恭也ちゃんの心を折らないかって……」
「それは心配しなくてもいいと思いますよ？」

琴絵の心配をあっさり切り捨てて。

土郎はすでに見えなくなっている恭也の方向へと視線をやり、暖かい目で見守る。

「あいつはその程度で折れるような剣士じゃないです」

「……なんでそう思うの？」

「だってあいつは俺の息子ですよ？あいつのことは俺が一番分かっています」

「……むー」

今度は膨れっ面になり、不満ありありという感じで琴絵は土郎を睨む。

それに気づいた土郎は愛想笑いで返し、頬を指でかく。

「それにあいつはちよつと特殊なんですよ」

「え？……恭也ちゃんが特殊って？」

「あいつは、何時も俺の小太刀の軌跡を目で追ってるんですよ……信じられますか？七歳の子供が、ですよ？」

「……知ってるよ。気づいてるよ。それがどれだけ異常なことなのかも分かってる」「ははっ。琴絵さんには愚問でしたかね」

そう。士郎の言うとおり、恭也は確かに視線でおっていた。

御神最強の一角である不破士郎の一撃を——幼き子供が。

「俺はアレはあいつの一種の才能だと思っっています。俺の中で心眼と名付けてる恭也の才能です」

「そうだね。一度や二度なら偶然で済ませれると思うよ——でも、あの見切りは私達のをそれを遥かに超えている」

「初太刀は見えている。でも、かわすことはできない。それは——」

「——身体がそれに追いつかないから」

コクリと士郎が頷く。

不破恭也の最大の武器。それが見切りである。といっても普通の人間の感覚とは違う。恭也には見えるのだ。空間をはしる人間の動きが。どう動くのか。人の身体がおりなす動きの静と動。筋肉の細部までがはつきりと。それが一瞬の見極めを可能とす

る。

それなのに士郎の一撃を避けることをできないのは、琴絵の言うとおり身体がその見切りに追いつかないからだ。

「当分は無理だと思いますけどね。あいつが成長していつて、身体が出来上がってくれば——」

肉体と感覚の一致。

そして、そこに恭也の見切りが加われれば……。

「——あいつこそが御神最強の名を継げるでしょう」

自信満々にそう士郎は断言する。

己の息子こそが御神最強の座を手に入れれると。

「うん。そうだね。恭也ちゃんには……その可能性が眠っている。私達を超える可能性が——」

琴絵も士郎の台詞に同調する。

士郎の言うとおりのだ。恭也には自分達を超えることができるほどの潜在性がある。

それを嬉しいと思う。それを素晴らしいと思う。恭也だからこそ自分のこと以上に嬉しい。だが——。

分かっている。分かっているの、士郎ちゃん。

そう琴絵は心の底で深くため息をつく。

士郎は恭也を信じている。誰よりも、自分の息子を信じている。

それが——目を曇らせている。

恭也は見えているのに避けられない。

それはある意味見えていないのに避けられないということよりも苦しいのだ。自分の実力不足を痛感する日々。毎日毎日——気が狂うほどの鍛錬。どれだけの努力をしても、その努力は実を結ばない。何日も何十日も何百日も。そんな日々が続く。

士郎という名の壁は誰よりも高く……何よりも厚い。何時かは越えないといけない壁なのかもしれない。だが、今の恭也が目標とするには絶望的なほどの壁なのだ。

まだ幼い恭也の心は……何が切っ掛けで折れるか分からない。

琴絵はそれを懸念している。誰よりも恭也のことを心配しているが故に——。

「恭也ちゃん……」

琴絵の寂しさと心配をのせた呟きは——周りの喧騒にまぎれて、消えていった。

▼

御神の屋敷がある敷地から走り出た恭也は誰かに呼ばれた気がして振り返った。

巨大な山の中腹に大きな屋敷が見える。そこが御神宗家が暮らす屋敷であり——先程まで恭也が鍛錬していた道場がある場所だ。そこにいくには、長い山道を越えて、数百段もある石段を登らねばならない。その屋敷を遠くから見ると、不思議な威圧感を醸し出している。それは、巨大な屋敷に比例するかのようには、規格外に高い塀が外敵を寄せ付けない一種の要塞のような錯覚を覚えさせるからかもしれない。

御神の一族は様々な暗殺業。護衛業を取り扱っているが、勿論それだけではない。表の顔として様々な事業に手を出している。この周辺の山々を所有しているため、近隣の

住人には名家として知られていた。

しばらく経って、どうやら完全に空耳だったことを確認すると恭也は御神の屋敷に背を向け走り出す。勿論無人の荒野が続いているわけではなく、御神の一族が所有する山の麓から多くの家が建っている。御神の裏の顔を知らない普通の一般人たちであるため、小さな町に住まう皆が笑顔で暮らしていた。

恭也は町の住人とも面識があり、走っている途中で何度も横を通り過ぎる人達に声をかけられた。それに律儀に挨拶を返す恭也。まだまだ公園で遊んでいるのが似合う年頃の少年だというのに、そんな様子を一切見せない恭也はある意味有名であった。

どれくらい走ったであろうか。家が段々と少なくなり、ついには道しかなかった。その道の両側は土手となっており、大きな川が流れていた。その河川敷では週末には町の住人達がバーベキューをしているのを見かけたことがある。そういう恭也も何度も御神や不破の者達としたことがあるのだが。

足をとめ、深呼吸を何度か繰り返す。

額を流れていた汗を拭い、再度深い息をつく。

そろそろ帰らねばならない。

走りこんでいたのはせいぜい三十分程度ではあるが、夕飯が何時も通りならば今から帰っても間に合うかぎりぎりなのだから。万が一夕飯に遅れたら祖母である不破美影

の雷がおちることは間違いない。恭也にはただ甘などころがある彼女だが、そういうところには厳しく躰をしているからだ。

帰らなければならぬ恭也だったが——それに反するように土手に腰を下ろす。

夕焼けが辺りを照らす。誰が手入れを行っているかわからないが綺麗に刈られた土手の草。青臭い草の香り。

沈みつつある太陽を見ながら先程の土郎との戦いを思い出す。もうどれほど土郎に戦いを挑んだろう。土郎の太刀筋は見える。見えているが、何度ためしても避けることすらできない。勿論、土郎と己の力量差、修練の差が天と地ほど違うのははっきりわかっている。それでも、勝とうとは考えていない。ただ一太刀でいいのだ。たったの一太刀を回避することができればいいのだ。

自分の見切り。異能に気づいてそれだけを目標にやってきた。その異能に気づいてからたった一年と少しの話ではあるが。幼い恭也があらゆることを捨て、それだけを目標にやってきたのだ。だというのに僅かな進歩さえみられない。果たして自分はこのまま努力を続けて——土郎に追いつくことができるのだろうか。

そう自問自答するほどの厚き壁。

それが父——不破土郎。

恭也は傍に落ちていた小石を拾うと川に向かって投げる。

ぼちゃんと音をたてて着水する。それを暫く見ていた恭也だったが、沈む気分を無理に奮い立たせ、腰をあげようとして――。

「ねえねえ。その少年。ちよつと聞きたいことあるんだけど、いいかなー?」

――世界が暗く染まった気がした。

「……あつ!」

口から言葉にならない悲鳴が上がる。立ち上がろうとして、膝が笑っているのに気づいた。頬が引き攣る。今にもこの場から逃げ出したい。そんな気持ちで心を支配する。

心臓が跳ねる。知っている。これがなんなのか。知っている筈なのだ。だが、知らない。これほどの感覚を恭也は知らない。意識ごと持って行かれそうになるほどの、圧倒感。別に身体を押さえつけられたわけではない。だが、力以上の何かで身体を押さえつ

けられる。これは、この感覚は、この感情は――。

――恐怖。

間違いなくこれはそう呼ぶのだろう。

士郎よりも、美影よりも、静馬よりも――相馬よりも禍々しい。圧倒的、規格外という言葉でも足りないほどの、格や桁どころか次元そのものが異なっている出鱈目すぎる膨大な重圧。

逃げ出そうとする四肢を、意思の力でねじ伏せ……身体を反転させる。

声の発した主に向けるように。

「お、良いねえ。私の声を聞いて意識を手放さないかー。見込みあるよ、キミ」

そして――恐怖を忘れた。

恭也の視界に映ったのは現実離れした美貌の持ち主。恭也からすれば見上げる形となるが身長も高い。士郎ほどではないがそれに近いほどには。琴絵や美沙斗などの人

並み外れた容姿の持ち主を良く見ているが、目の前に映った女性は――。

神話の中の女神。

きつとそう表現するしかなかっただろう。髪は烏の濡れ羽色。腰近くまで伸びた艶やかな長い髪 of のなんと美しいことか。光なき夜の闇――いや、その闇と比べても女性の髪色はなお暗く深い。芙蓉の顔、柳の眉。若干釣りあがった黒曜石のような煌きを灯す眼が、恭也を鋭く見つめていた。穢れなき雪原を連想させる白い肌。少年少女から年寄りまで男女問わず魅了する、二十を迎えたかどうかという若さの肉体は、楚々としながらも魔性を匂わせる相反する美しさ。常軌を逸したその美麗端麗な容姿は、まさしく立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花。陳腐になるがそのような言葉でしか表現できない飛び抜けすぎた絶世の美貌の美女。そんな眩いまでの美しさを放っている女性だが、色気も何もない単純に動きやすさを追求した男物の黒い上下の衣服のとその上に同色の外套を羽織っている。そんな人外染みた容姿の女性がそこにいた。

「いやいや、ごめんねー。私って威圧感を無意識に結構だしてつぼくてさー。怯えちゃう人多いのよねー」

ニカリと女神様に相応しくない笑みを浮かべ、黒髪の女性はポンと恭也の肩を叩く。恐怖を忘れていた恭也だったが、それで我に返った。そんな恭也を再度襲う圧倒的な圧迫感。

怖い。逃げ出したい。今すぐにも意識を手放したい。

そんな思いが心を占領してもなお、恭也は唇を噛み締め女性を見上げる。彼女はおおつ、と本当に感心した声をあげ、恭也から離れた。その瞳には隠しようがない興味という色を浮かべていることに、余裕のない恭也が気づくことはなかった。

「あな、たは……？」

声がかすれはしたが震えなかつたことに僅かな満足感を抱き、恭也は訊ねる。

その恭也の返答に、むふーと何故か嬉しそうに鼻息荒く胸を張った。

「私？ 私あやねは殺音。水無月殺音。自分で言うのもなんだけど、結構な有名人だったりするんだよう。ちなみに知ってる？」

殺音と名乗った女性は胸を張りながらそう答えた。その質問に対して、首を横に振って答えた恭也に、ありやつと若干残念そうに肩を落とす。外見とのギャップを感じさせる姿に可愛らしさすら感じるもの——恭也の感じる悪寒は未だ治まっていない。

間違いないこの女性は……笑いながら人を殺せる化け物だ。そんな予感にも似た確信を恭也は得ていた。

「ねね。ところでさっきの質問に戻るんだけど、ちよつといい？」

「……俺にわかる、ことであれば」

「お、助かるわー。んとさ、御神って名前の人達を知らない？」

息が詰まった。この女性は、水無月殺音は一体何をしにこうなのか。

御神の一族の誰かの知り合いなのか？遊びに来たとも言うのか……。

いや、違う。そんなわけがない。

彼女は明らかに――。

「探して、何をする気ですか……？」

「んー。まあ、どうせすぐわかることだしいいかな。ちよつと皆殺しにするためにいっただけだよ」

あつさりとそう殺音は告げた。恭也にとつては衝撃の発言。それを殺音はあつさりと言いつつ放った。息を吸うかのように自然な様子で。何を馬鹿など笑い飛ばすことなど出来なかった。何故ならばこの女性は――水無月殺音は次元が違う。強すぎてもはや感覚が麻痺してくる超越存在だ。人間という枠組みではどうしようもないレベルの化け物だ。どれだけの努力をしようと辿りつけない。そんな世界に住んでいる住人だ。

士郎でも勝てない。美沙斗でも勝てない。一臣でも美影でも琴絵でも――相馬でも勝てないだろう。この女性に勝てる可能性があるとするれば……あの人だけだ。

そう恭也は瞬時に理解した。

「知らないのかな？ それならそれでいいけどね。他の人たちに聞けばいいだけだし」
黙ってしまった恭也を見て、知らない判断したのだろうか。

恭也に背を向け町のほうへと足を向けた。

「引き止めて悪かったわねー。子供はもうお家に帰りなさい」

ヒラヒラと手を振りながら去っていく殺音を見て、恭也は内心で安堵のため息をついた。殺音の威圧感からも解放されてバクバクと高鳴っていた心臓を押さえつけるように胸を手で握り締める。

——助かった。

それが恭也の本音であつた。

これ以上あの女性を前にしていたら本当に気を失っていたかもしれない。幼い恭也では限界ぎりぎりのところであつたのだが……。

——ま、て？

冷水を浴びせられたように背筋に寒気が走る。

ガチガチと歯が恐怖で鳴つた。

——今何を、考えた？

己の感じた感情に吐き気がする。

なんとという愚か者なのだろうか——不破恭也という人間は。

先ほど前に理解したはずだ。わかつていたはずだ。

水無月殺音には、御神と不破の誰であろうと勝てない、と。

その死神が御神の屋敷に向かおうとしているというのに——安堵したのだ。

自分の前からいなくなることに對して。屋敷の者達よりも、最愛の家族よりも己の保身を優先した。

そんなことを一瞬でも考えた己を——許せるものか。

「あ、あの……!!」

「うん？」

必死の思いで恭也は死神の歩みを止めるために、引き留めの言葉を発した。

まさか呼び止められるとは思っていなかったのだろう。水無月殺音は本当に驚いたように恭也へと振り返る。

「えーと。うーんと。何か用でもあった？」

「一つ、聞きたいことがあります。何故、御神の人達を、その……皆殺しにいかれるんですか？」

「……んー」

機嫌を害するかと一瞬思った恭也だったが、その心配は杞憂だったよう。殺音は言うか言うまいか悩んでいる様子で空を見上げながら口をとがらせる。両腕を組んでリズムを取るようにトントンと地面を足で叩く。暫く迷っていた殺音だったが決心がついたのか、見上げていた視線を恭也へと戻した。

「実はねー、私って暗殺業やってるのよ。それで依頼主から御神の一族の壊滅させろって依頼を受けちやつてさー」

「……」

実に気楽に言ってくれる。

御神の一族は裏の世界では有名どころの話ではない。日本最強に挙げる猛者も少なくてはない。遙か昔からそれは変わらない。永全不動八門でも頂点に立つ殺戮一族だというのに……。

「お金の、ためですか？」

金のために御神の一族と真正面からぶつかる。

それはあまりにもリスクが高く——馬鹿げている話だ。

まともな人間ならば決して受け入れることがない仕事だろう。だというのに、この死神は平然と依頼だからと言い捨てた。

「いやいやー、私自身も前々から結構御神の一族には興味があつてねー。個人的に一度殺してみたかと思つてたところだったから今回の依頼は渡りに舟だったわけなのよね」

——恭也が考えていた以上のイカレタ理由だった。

お金のためでもなく、復讐というわけでもなく——ただ、殺しあいたい。

理解できない。理解したくない。理解などできるわけもない、もはや狂人としか思えない殺音の言葉。ただ、殺しあいたいだけというだけで、御神の一族は殺されることになるのだ。

「なん、で……そんな理由で……」

「なんで、か。まあ、理解できないよねー普通は。理解してもらおうとは思ってないしね」

にへらつとその美しい表情を崩し、恭也の目の前まで歩いてきて、顔を近づけてくる。息が吹きかかるほどの近くで見つめあう二人。普段ならば羞恥ですぐに逃げただろう。この女性ならば恐怖で逃げたかもしれない。だが、この時は恭也は逃げられなかった。ふと、醸し出した殺音の寂しげな雰囲気にもまれていた。

「私の無意味無価値な人生で——生と死をかけたその瞬間だけは、意味があると思える時間だから」

ポンと恭也の頭に手を置くと優しくなでる。

「私と同族じゃ意味がない。それじゃあ、つまらない。楽しくないし面白くもない。生まれての力に頼っているだけの私とあいつら。ただの化け物同士の潰しあいにかからないもの。私と人間の戦いだからこそ——血が沸き肉が踊る。ただの人間が化け物と戦えるという事実だけが私の渴きを潤してくれるから」

一分も撫でていただろうか。殺音は撫でるのをやめ、恭也から顔を離す。夕日が差す。殺音の体を真っ赤に染めた。そのせいだろうか。

先ほどまでは黒かった殺音の瞳が……真紅に輝いて見えるのは——。

「いつの日かキミは私の渴きを——潤してくれるかな？」

「……」

はい、とはいえなかった。喉が凍ったかのように言葉を発することを拒否している。その気配、圧力に完全に恭也はこの女性に……水無月殺音にのまれていた。絶対的という言葉でもおさまりにきれない。幼き少年は今まで出会ったどの剣士達をも凌駕する究極の生命体をそこに見る。彼方と此方。その差は超絶的なまでの遠さ。自分が彼女の渴きを潤せるのだろうか……答えは出ない。出せない。出せる筈がなかった。安易な返答は返せれず、殺音もまた、そのような返答は望まないだろう。

ただ、呆然と殺音をみつめるこしかできない恭也。

殺音はそんな恭也を責めはしなかった。少しだけ寂しそうに笑っただけだった。そつか……そう呟いた殺音の言葉が風に消える。

あらゆる人間に、何度聞いてもその答えは決まり切っていた。

殺音を前にして首を縦にふれた者はいない。

あまりにも異質な存在がゆえに、相手を理解できない。そして理解して貰えない。

——水無月殺音は孤独だったのだ。

「何をしてるんだ、破軍？」

「およ？」

破軍と呼ばれた殺音は声のしたほうへと顔を向ける。それにつられるように恭也もその視線を追う。何時の間にか二人のすぐ傍に一人の少女が佇んでいた。殺音と同じような薄く紫がかかった黒く長い髪。サイドで結んでツインテールにしている。その髪型は若干子供っぽく見える印象があるが、その少女は背も低く、良いところ百四十あるかどうか程度なため非常に良くにあっていた。

「ああ、ごめんねー冥。ちよつと話し込んでたの」

「……仕事の間は武曲とよべ」

「あーそうだった。そうだった。ごめんごめん、冥」

「……もう、いい」

ハアと疲れたようにため息をつく冥と呼ばれた少女。

いつものことなのか、諦めが早い。心なし、少し疲れているようにも見て取れる。

「目的の場所はわかった。というかすぐに教えてもらえたぞ。予想外だが別に隠しているというわけではなかったな。むしろお前を探すほうが時間がかかったくらいだ」

「ありや。それは悪かったわねえ。まあ、了解了解。さっさといくとしますかねー」

「……これからのことを考えるとお前はもうちよつと緊張感を持つべきだな」
「こんくらいリラックスしてるほうが私には丁度いいのよ」

恭也を置き去りにして二人が歩いて行く。御神の一族が住む屋敷を目指して。殺戮の宴をはじめのために――。二人の歩みを止めるための方法を頭のなかで幾つも思考するが……足りない。どんな方法でも、手段でも二人をとめることは不可能だ。もはや恭也に打つ手はないかと思われた。それでも一分でも一秒でも彼女たちの足止めをしなければ、という強迫観念染みた想いに押されて二人の背中に言葉にならない何かをぶつけようとした、瞬間。ぞわりつと鳥肌をたてる冷たい風が身体全体を撫で付けた。反射的に後ろを振り返ろうとして、体が固まってしまつてそれすらできない。

「お、いたいた。破軍の姐さん。もっと目立つところにいてくれよ」

「探しましたよ、破軍」

目つきの悪い男が、神父服の男が、恭也の両横を通つて殺音と冥の背中に平然と声をかける。

「本当に困つた長ネ」

「まあ、そういうな。こういう行動こそが破軍あれかし、というものだ」

「……」

細目の男が、二メートルを超える巨漢が苦笑を浮かべながら追隨する。それに続くの

はマフラーを巻いた女性。コクコクと無言で巨漢の言葉に頷いていた。

ああ。なんだ、なんなんだ、この化け物達は。感覚が麻痺してしまった恭也が愕然と、呆然と、二人の背中を追う五人の力量に息を呑む。

強い。強すぎる。一体どれほどの力の持ち主なのか正確には理解できないが、それでもわかる。後から現れた五人でさえも、その実力はおそらく並みの御神の一族では歯が立つまい。下手をしなくてもその力は御神不破の上位陣でなくば抑えることは不可能であろう。漠然とした予感、直感。だが、恭也はそれが間違っていないことに確信を持っていた。やはり行かせられない。水無月殺音だけでもどうしようもないことというのに、さらにそれに加えて六人の怪物達。こんな連中をむぎむぎと御神の屋敷に行かすことなどできるものか。

「待つて、ください——」

それだけだ。その台詞だけを気力を引き絞ってなんとか口に出すことが出来た。だが、それを聞いた北斗のメンバーの対応は意外なものであった。足をとめた貪狼が、へえつと面白そうな玩具をみつけたかのように恭也へと近づいていく。

「すげえな、坊主。破軍を前にして、引きとめようって言葉がでるか。俺たちにしたって

そうだ。普通の神経なら関わろうって思う前に、本能が拒否するだろうによ」

「幼いながらその意気やよし。人にしておくには惜しい逸材だ」

そんなことを言いながらじろじろと恭也の身体をあますことなくねめつける。何時の間にか傍によつていた巨門もまたどこか感心したかのように顎を手で擦りながらそう評価していた。

「ちっこいネー。こんくらいの子供は男女問わずかわいいヨ」

「その発言少し危なくきこえますよ、廉貞」

ニマニマと不気味に笑う廉貞に、禄存は肩をすくめた。確かに彼の笑顔と台詞は少々危ない人のように聞こえなくもない。誤解だヨ、と否定する廉貞だが、結構あやしい雰囲気醸し出していた。そんな中、文曲は興味があるのかじつと恭也の顔を見ていたが、特に何も言うことなくふいつと体を前方へと向けなおす。

そんなガヤガヤと騒ぐ五人の部下たちを見やって、嘆息一つ。パンパンと手を叩いて自分に注意を向けなおせる武曲。

「はいはい、そこまで。そこまだよ。あんまり小さい子供を苛めないの。さつさといくよ」

武曲の呆れを乗せた呼びかけに、はーいと返事をする四人と頷く一人。今度こそ出立しようとして歩き出した北斗を再度止める言葉を発しようとして——その刹那、破軍を除

く六人が同時に勢いよく振り返った。今の今までであった日常的な緩みなど一切合財を消して視線鋭く恭也を見た。その様子に疑問を覚える恭也であったが、すぐにその疑問は氷解することとなった。

「おい、なに人様の弟子に絡んでやがる」

いや、違う。見ていたのは恭也ではない。その後ろ、北斗の圧力などなにするもので、と燃え上がるのは北斗をして警戒させるに値する千万無量の殺意であった。見渡す限りの視界を邪魔するものが全くないこの空間がまるで狭い室内に閉じ込められたと勘違いするほどの閉塞感。幻覚、錯覚、幻影——そんな言葉が相応しい現象、あまりの圧ゆえに強者たる北斗にすら世界の誤認をさせるに至った。その発生主が、まるで自分の存在をアピールするかのごとく、足音をたてて恭也の横を通り過ぎその眼前に立ち塞がった。

士郎よりも背の高い、長身で堂々とした体躯の男性である。シャツの上からでもその肥大化した筋肉は見て取れた。それに反して手入れをしていないのだろうか綺麗な黒髪だというのにぼさぼさだ。顔自体は美形だというのにそれら全てを覆すような、深い闇色の瞳。そして、禍々しい暗さがあった。近寄りたくない、近寄ってはならない凶悪な雰囲気 naturali と彼から発せられている。腰には隠すこともしない二振りの小太刀。恭也はいつかこの人が銃刀法違反で警察に御用になるのでは、と心配していた。

そして——そこでゆっくりと振り返った殺音の興味、という色が乗った瞳が爛々と輝いていることを恭也は気づく。また、それに気づいたのは武曲も同様であった。チツと軽く舌打ちして嘆息一つ。

「いや、絡んですまなかつたね。謝るよ。でも特に何もしてないよ、僕たちは」

平然とそう言い切った武曲に頷く北斗のメンバー。それに拍子抜けたのは男性であった。本当か、という意味合いを込めて恭也をちらりと見る。確かに実際に何かされたわけでもなく、むしろ呼び止めたのはこちらのほうだ。無駄に因縁をつけたのは、恭也達とも言えた。

「はい。あの人の言うことは本当です。特に何かあったわけではありません、相馬さん」
恭也の返答にガシガシと頭をかく男性——御神相馬。どうやら自分の早合点だったことを理解したのかその表情はどこかばつが悪そうである。そんな相馬の影からヒョコつと顔を出した幼女がいた。恭也よりもさらに小さい、二歳か三歳は年下の女の子。セミロングの黒髪を指でくると弄びながらニパつと向日葵を連想させる笑顔を恭也へと向けてきた。

「にやつほー、きよう君。なにやつてるのー？」

「別段……何も。宴ウツゲこそ、また相馬さんの後についていたのか？」

「うん。おとーさまと一緒にいるのは刺激的だからにやー。とつても面白いのだ」

尋常ならざる怪物たちがいるこの場所で、平然とそう言い切る五歳の幼女。その余裕ともいえる姿に恭也の体から緊張が抜けていく。彼女の姿は言つてしまえば、御神琴絵の生き写し。御神宗家において琴絵二世とも呼ばれているほどに瓜二つであった。もつとも御神相馬と琴絵は姉弟、その血筋の關係上似る理由はあるともいえる。誰彼構わず喧嘩を売つてきた相馬とは正反対で、御神と不破の両家の誰しもに愛想を振りまくため宴の評判は父親とは違つて良好だ。本当に親娘なのか怪しまれていることを二人は知らなかつた——ちなみに本当に血の繋がりはあるのだが。

「まあ、悪かつたな。俺の勘違いだったようだ」

ここに昔の相馬を知るものがいれば驚いたであろう。かつては触れれば切れるという表現が当てはまるほどに狂暴で手がつけられない凶悪さの塊であつた彼だが、数年前に娘の宴が産まれてから少しずつ落ち着き始め、やがて一年ほど前に恭也を弟子にしてからは、もはや別人レベルに変わつていた。もつとも、落ち着いたとはいえ誰かに従うことを嫌う性格ゆえに、御神宗家の長老たちとは馬が合つていないのが現状だ。もつとも、かつての悪行の数々が負の遺産となつて現在の相馬の立場をまずくしているということも理由のひとつとしてあげられる。そんな相馬が素直に誰かに謝罪するなど、まさに青天の霹靂であるといえよう。

「ああ、その謝罪受け取るよ。それじゃあ、僕達はこれで——」

「で、だ。何でお前たちみたいな裏家業の、しかも俺たち同様の最悪の部類に当てはまる連中がこんなところにいるんだよ？　なあ、北斗」

ピシリつと空気が凍った。武曲の台詞を遮って、言い放たれた相馬の問いかけに、今度こそ殺音を除く六人の身体に力がこもる。今にもとびかからんとする五人に対して、右手を出して制止の合図を送ると、武曲は相馬へと一步近づく。

「なんだい、僕たちのことを知っていたの？」

「ふん。当然だ。知らないはずがあるかよ、お前らほどのビッグネームをな。まあ、俺が知っているのはそっちにいる女……破軍の顔だけだけだな」

うん、わたし？　つと自分を指差して、こてんつと顔を傾けて聞きなおす。その姿、大人の女性がするにしては子供っぽい、それ以上に可愛らしい。

「こんな何も無い町に観光つてわけじゃないだろ？　まあ、それに何をしに来たかなんて聞かずともわかるつてもんだ」

相馬は首をコキコキと鳴らしながら鞘におさめていた二振りの小太刀を抜く。ギラリと夕陽を反射させて、二刀が白銀に輝いた。

「臭うぜ、血臭がな。香るぞ、隠し様がない俺たちへの敵意つてやつがな」

ニイと不気味な笑みを浮かべ小太刀を殺音に向ける。一切の手加減もせず、剣気を叩きつけていく。その圧力に、北斗の五人の気配が濃くなっていく。怯んでいる様子は

微塵もなく、久方ぶりの強敵との遭遇に意識が鋭利に尖っていくことを自覚していた。残った二人、武曲——水無月冥もまた油断なく身構える。二刀を扱う劍士、即ち彼もまた標的となる御神の一族に間違いない、そして最初に出会ったにしてはあまりの力量に此度の依頼の難易度の高さについて改めて眉尻を寄せた。対して殺音は——相馬への興味を隠さずに満面の笑みをもって見返していた。

「恭也、悪いが宴を頼んだぞ。できればここから離れてとつとと屋敷に戻つとけ」

追い払うかのような相馬の発言に、宴は驚き、恭也はさもあらんと頷いた。

如何に御神最強の称号に近い相馬といえど、二人を庇いながらこの場の七人と渡り合うなど不可能だ。万が一人質にされたら詰む以上、子供たちを逃がすことを優先した彼の行動は実際に正しい。

「わっはっは。凄いい、凄いいねー貴方。七十点級はあるぜえい」

「——なっ」

殺音の何気ない、だが楽しげな台詞に訝しげに視線を彼女に向けなおした相馬を嘲笑うかの如く、瞬きをした瞬間——視界から突如として姿は消えていた。相馬は背中に氷柱をぶちこまれたかのような悪寒を感じ、即座に前方に転がる。転がり、体勢を立て直すとともに後方に小太刀をふった。

手ごたえはない。あつたのは空を斬つただけの感触。追撃は無く、何時の間に背後に

回ったのか先程まで相馬が立っていた場所で拳を突き出していた殺音の姿があった。

「うひゃあー!? 今のを避けるかー。ちよつと興奮してきたよ」

クフフと不気味に笑って両の拳を握り、パキパキと指を鳴らす。

その余裕の様子に相馬が不服そうに舌打ちと深い呼吸を一度。

「そうか。それはよかった——ならばそのまま、死ぬ」

地面が爆発した。相馬の凄まじい脚力が生み出した超加速。一拍もおかずに、殺音の懐へと入り込み、小太刀を振り上げた。左脇腹から切り裂くように、斜め上へと。

——殺った!!

相馬の確信にも似た予感。

間違いなくこの一撃は、この女を斬る。

「——だめ、だ!!」

反射的にあげた恭也の声にビクリと相馬の身体が震えた。何が駄目なのか、と思う間もなく、本能がそれに気づく。殺音の視線が相馬の小太刀を追っていたのだから。それに合わせる様に殺音の右手がぶれる。

「うおおおおおおお!!」

刀を振ることを諦めて、無理矢理に地面を蹴りつけ後方へ飛ぶ。無様な格好となつてしまつたが、死ぬよりはマシだと思いつつ、殺音から距離を取る。牽制するように、小

太刀を殺音に向けたまま、僅かな対峙で乱れた呼吸を整えた。

「ナイス判断だーねえ!! もし刀を振り切っていたら——死んでたよ!」

相馬の行動を褒めるように殺音はパチパチと手を叩く。出来のよい生徒を褒めるが如く、初めて歩くことが出来たわが子を褒めるが如く。その余裕の様子に相馬の顔つきが険しくなっていく。だが、熱くなつてどうにかなる相手ではないことは明らかで、改めて冷静になつて、殺音の全身を油断なく見渡す。

「噂通り、いや噂以上……はっ、噂が可愛く思えるレベルかよ!」

自分が聞いていた話のほうが随分と可愛らしい。実物はなんとということもない、破軍は相馬の想像を遥かに超えた化け物であつた。多くの暗殺業に手を染めてきたがこれほどまでに底が見えない相手に彼とて会つたことは数少ない。

御神の亡霊。不滅の百鬼夜行。魔導を極めた王。未来を見通す魔眼を持つ者。

これまで出会つてきた中でとびっきりの化け物達を確認した相馬だつたが……ふと気づく。

「……なんだ、結構いるじゃねーか!」

反射的にそう呟いてしまった。てつきり誰も考え付かないと思つただけに、四人もいることに逆の意味で驚く。だが、裏を返せば……その四人に匹敵する化け物だということだ。かつて手痛い敗北をこの身に刻んだ闇なる一族の頂点どもと同格ということ

認めねばならない。手加減など一切できない。必要ない。即ち全力を持って、殺しきる。

「……」

無言のままの相馬から立ち昇るのはさらなる高みを見せ付ける剣気。深く息をつき、深く息を吸う。その甚大な気配に、北斗達は驚愕の一言。これまで戦ってきた中で間違はなく最上位。殺音だからこそなんともないような戦いを演じていられるが、もしもあそこに立っているのが自分であるならば果たしてどうなるか。そんな感想を抱きつつ、二人の戦いを黙って見届ける。

そして恭也も気づいた。相馬の気配の昂ぶり、集中力。それはある技の前触れでもある。相馬が出そうとしているのは——御神流奥義之歩法神速しんそく。

時を止める。

そうとも伝承される、人間の限界を超えた動きを可能とする奥の手だ。文字通り必殺を可能とする、御神の究極。

何をするのかと興味深げに相馬を窺っている殺音。相馬の雰囲気で、何か大技を狙っていることくらいわかっているはずだが、邪魔をしようとしな。逆に相馬が何を出すのか愉しみにしている様子さえある。

「——馬鹿が」

それをスイッチとして世界が切り替わる。たつぷりと溜め込んだ感情と力の解放。極限に高められた集中力と完全な五体支配により、世界がモノクロに変化した。相馬の五感が一切余分なものを排除した結果だ。全身が重くなったような違和感を残し、ゼリ——状になった空気をかきわけるように走る。御神を最強たらしめている理由の一つ、神速を使つた相馬が世界を疾駆した。

「……ああ、なんだあ。その程度、か」

声が聞こえた。

聞こえるはずの無い声が。

相馬の目が驚愕で開かれた。有り得ないものを見たかのように、信じられないものを見たかのように。心底がっかりした表情の殺音は自分に迫ってきた小太刀を、それ以上の速度で横から殴りつけ軌道を逸らし——カウンターで相馬の腹部を叩きつけるように殴り飛ばした。

「……っあ?」

ごろごろと地面を転がり、恭也のもとにまで殴り飛ばされた相馬を見て、愕然とする。この化け物^あに対して神速ならば……という淡い期待があった。その希望を一瞬で叩き壊したのだ。あっさりと。事も無げに。当たり前のように。やはり恭也の予感^ねは正しかったのだ——水無月殺音は次元が違う。

「ぐう……くそつ……がつ」

意識までは奪われなかったのか、相馬は震える身体をおして立とうとするが、殺音の一撃は相手に重かったようでも立ち上がることすら苦労している。ゴホつと咳をした瞬間、赤黒い血が地面を彩った。

「おとーきゃま!!」

普段から飄々としている宴が顔色を変え、跪いている相馬へと駆け寄った。常に絶対の強者であった父親の初めて敗北する姿に我が目を疑う彼女は歳相応に見える。自分に抱きついてくる娘を背中へと押しやり、未だ立ち上がることは出来ずともその眼光は人を殺せるほどに鋭く強い。

二人の戦いの結果を見て、恭也もまた言葉もなかった。

あの相馬が。御神相馬が——これほどまでにあっさり。完全完璧な敗北を目の前で見せられた。

「むいー。まあ、七十点はちよつとキツメな評価だったかなあ。うん、そうだね。七十五点をあげちゃうよー」

相馬には興味をなくしたようにゆっくりと殺音は近づいてくる。

ざつざつと地面を踏む音が死神が這い寄る音に聞こえて鳥肌が立つ。

死ぬ。殺される。

あの相馬でさえも歯牙にもかけぬ圧倒的な力。しかも全くといっていいほどに本気を出さずに。これでは恐らく、他の誰もが勝てないだろう。複数でかかっても一緒だ。そういったレベルではないのだから。すでに戦っている土俵が違っている。

あの人がであれば或いは勝てるかもしれない。

だが、それまでに確実に何人かは——死ぬ。何人かで済むかはわからない。もしかしたら数十人、百人以上にのぼるかもしれない。御神の屋敷に住むのは何も全員が武を嗜んでいるわけではない。ただの一般人と変わらない使用人も多い。そういった人たちも巻き込まれるだろう。

誰よりも尊敬する父の士郎が殺される。誰よりも暖かかった静馬が殺される。誰よりも優しかった美沙斗が殺される。誰よりも厳しくも可愛がってくれた美影が殺される。誰よりも恭也の才能を買ってくれていた師匠の相馬が殺される。自分を兄と慕う美由希が殺される。天真爛漫で笑顔を向けてくれた宴が殺される。

そして——誰よりも愛情をそそいでくれた琴絵が殺される。

——ミンナ死ぬシヌしぬ死ぬシヌしぬ死ぬシヌシヌシヌ——コロサレル。

ブチリと恭也は自分の奥底で何かが千切れるのを感じた。

人として大切な何か。それを捨てても皆を護りたい。どれだけの艱難辛苦が訪れ

ようとも。如何なる試練も乗り越えて見せよう。

誰よりも大切な皆が殺される。そんなことは——。

——認めない。認めるものか。認めてやるものか。

折れそうだった心は蘇った。不破恭也としての心は決して折れなかった。

恭也の心は——琴絵の心配を不要とするほどの不屈の魂が宿っていた。

——覚悟を決めろ。不破恭也。相手を恐れるな。失敗したところで、ただ死ぬだけだ。愛する者達を失つて無様に行き続けるだけの人生を送るより遥かにましじゃないか。

「水無月殺音、さん——提案があります」

今の今まで感じていた重圧、恐怖、圧力全てが消失した。普段よりもなお気楽に、自然と言葉が口からでていた。殺音が放つ威圧感は衰えるどころか増しているというのに、震えも無く、怯えもない……普段通りの不破恭也がそこにいた。

「……ほ、ほえ？」

あまりに突然に問い掛けられた殺音が、おもわずどもりながら返事を返す。絶対強者にそんな反応をさせたことに少しだけ満足して言葉を続ける。

「御神の一族から……手を引いてください」

「……うーん。いやーちよつと無理かなー。一応依頼受けちゃつてるしー。それにそこ

にいる剣士さんよりも強い人いるかもしれないしねー。おねーさんは燃えちやつてるんだよう」

「ここにいる相馬さんが、御神最強の剣士といつても過言ではないです。この人以上に強い剣士は、御神にはいません」

「にや、にやにいいー!?!」

失望感たっぷりの殺音がぐくりと肩を落とす。恭也はあえて相馬を御神最強と言った。人によつては静馬や士郎、琴絵をあげるだろうが、あえて相馬を最強と推して、殺音のやるきを削がすためだ。実際に恭也自身、一対一で本気でやりあえば相馬が勝ち残ると思っている。息子としては親の士郎を推したいところだが、それほどまでに相馬は強い。もつとも——あの人のことは黙っておく。

「でも、貴女は戦いたいのでしょう……だからこそその提案です」

「む、むう?」

恭也の先へと繋がる言葉が予想できずに首を捻る。

一体何を提案とするのだろうか……その場にいる人間はみなそう思った。恭也はそんな人達の考えの遥か上をいく。

「……俺が貴女と戦います。貴女の渴きを、餓えを満たしましょう」

「……ええつと。笑うところ?」

「冗談じゃありません。もちろん今の俺が貴女を満足させることはできません。だけど

口の中が乾く。

緊張で舌がうまく回らない。

それでも必死となつて言葉を紡ぐ。

「何時か必ず貴女の餓えを、渴きを満足させることを——誓います。この俺が、必ず」

「……」

恭也の告白に、両目を隠すように手を当て、深いため息をついた。沈黙が訪れる。肺を直接握りしめられたかのような息苦しき。周囲に響くのは相馬の荒い呼吸音。いつの間にか虫の音も聞こえなくなっていた。

「……ほざくなよ、少年」

顔を押しえて開いた指の隙間から真紅に染まった瞳が——獣のように縦に裂けた凶気に彩られた眼光が恭也を貫いた。それとともに世界が闇に染まった。そう錯覚するほどに強大で巨大な殺気が迸る。言葉にならない。言葉では語りつくせぬ、異様なまでの瘴気。今までの殺音とはまるで別人。お遊びだったと言われても納得するほどに、凶悪な気配を醸し出す。これはなんだ。ああ、これは一体なんなのだ。一体この生物は、なんなのか。この化け物こそが、頂点だ。あらゆる人外で構成される夜の一族のな

かの至強の頂点。最強の名を関する九体の存在すらも脅かす、化け物の女王。

「……なんだ、こいつは?! あの、化け物どもに比肩……いや、超えてやがる!!」

相馬の声が震えた。

今まで見てきたどの化け物達よりも、明らかに一線を超越していた。ただの気配が物理的な重圧をもつてその場にいた全員にのしかかる。

傷ついた相馬は呼吸はさらに乱れ、宴の表情から色が失われその場に尻餅をつく。冥を含む北斗でさえも、こんな殺音の姿を見ることは久しくて、全員が言葉を失っていた。

だが、恭也だけは違った。

顔を青白くさせ、全身を震えさせながらも、真つ直ぐと殺音を睨み返している。

それを見た殺音は軽く拳をふるった。その拳は神速の域をもつて恭也の顔に迫り——そのまま打ち抜いた。殺音の拳は力を入れたように見えないというのに恭也の頭蓋を叩き割り、脳髓が飛び散る。膝から力をなくし、他の人間を見習うかのように地面につき、身体が大地へと倒れ付した。それを何故か冷静に見ている自分が居た。すでに頭は元の形を一片たりとも残していないというのに——。

「つ……」

ぺたりと反射的に片手で顔を触る。

ぺたぺたとした触感。砕かれたはずの顔は普段通りそのままに存在した。そして恭也の目の前には寸止めされていた殺音の拳。当たっていなかったのだ。だということにあのあまりにリアルな死の光景は一体何だったというのか……。

——さっ、き？

唾を飲み込もうとして……唾液もでないほどに乾ききった口内。

覚悟を決めていたとしても緊張は隠せなかった。

恐ろしいほどに凝縮され、恭也に向かって放たれた殺気は、寸止めされたにも関わらず恭也に死のビジョンを伝えてきた。呼吸が荒くなる。恐ろしい。本当に恐ろしい。この女性には、息を吐くかのように自分を殺せる。それを再認識した途端とてつもない恐怖が押し寄せてきた。

——死ぬことを恐れているわけではない。このまま何も残せず、何も成さず、殺されるのが、何よりも怖い。

「俺を、侮るな!! 水無月殺音!!」

ビリつと空気がさらなる緊張によつて震えた。殺音の殺気に怯えていた世界が、そこに無理矢理に割って入ってきた恭也に注目してきたような錯覚さえ覚えた。一步殺音に向かつて足を進ませる。眼前にあつた拳が額に近づく。

「……今更、今更命など惜しむはずがないだろう!! 貴女の先程の問いにこう答えよう

——他の誰でもない、俺こそが貴女の望みを叶えよう!!」

さらに一歩進む。

ゴツンと殺音の拳が額に当たった。だが、視線だけは殺音と交差したままだ。

「誰よりも、何よりも強くなつてやる!! 俺は、俺の命を、魂を、全てを犠牲にしても
——あんたの飢えを満たす男になつてやるっ!! それこそが、俺が掲げる確固たる信念!!」
「揺ぎ無い意思!!」

さらに一歩進む。

気圧されたように殺音が一步下がった。

爛々と輝く真紅の瞳が揺れている。その瞳に映すは——不破恭也。

「それが俺の答えだ!! 返答は如何に!」

静寂。

恭也の宣誓に誰も彼もがのまれていた。

たかが一桁の少年に。この場で誰よりも弱い少年に。

風が吹く。夕日が落ちる。

一分。二分と時が過ぎさる。緊張だけが世界を満たし——そして。

水無月殺音は何の言葉もなく、説明もなく、恭也を抱きしめた。強く強く抱きしめた。

本当に嬉しそうに、幸せそうに、笑いながら恭也を抱きしめながら、くるくると回り始

める。

「すごいなあ、キミは!! 私にここまで啖呵をきつたのは——キミが初めてだよ。私の殺気に晒されて、私の狂気にのまれて、私の全てを受け止めて、そこまで言えたキミは本当に凄い!!」

「む、むぐう……」

顔が丁度胸の位置に埋もれてしまっているせいも息苦しい恭也。

ある意味幸せな苦しきなのだが。

「すごいよお、本当に凄い凄い!! ほんとうだよおー!! あはははー!! あはははははは!!」

壊れたロボットののように笑い続ける殺音。どれほど笑い続けただろうか。他の人間が呆気にとられている間は随分と長かった。我に返っても狂笑ともいえる状態の殺音に声をかけることはできなかつた。

ようやく満足したのか……恭也を引き離し地面にゆっくりとおろす。

そして、恭也から離れ不気味な笑みを浮かべたまま語りかける。

「御神の一族からは手を引くよー。キミが約束を守ってくれるその日を愉しみにして。人類最強にはなってくれるよね?」

「無論。貴女の渴きを癒すんだ——世界最強くらいにはなってみせよう」

「ああ。ああ。うん、凄い。最高の答えだ。ああ、ごめんね。キミの名前を教えてくださいかな?」

「恭也。不破恭也」

「きょうや。恭也……不破恭也!! うん——良い名前だ。格好いいよ。キミらしい名前だねえ」

先程とは異なる天使のような——女神のような笑顔。それを残し背を向け、町から離れる方角へ向かって歩み始める。慌てたのがそれをみていた冥だろう。依頼を放置していきなり帰ろうとしているのだから。

「ちよ、ちよつと待て、殺音!! お前、依頼はどうする気だ……!?!」

「ん? 仕事中は破軍ってよぶんじゃなかったのー?」

「う……そ、それはおいといてだな……破格の報酬なんだぞ、今回は」

「まーいいんじゃない? お金には困ってないでしょ」

「……馬鹿か!! そうではなくてだな——」

「私がやらない、って言うてるのよー? 理解してる、マイシスター?」

「……」

しつこく食い下がってくる冥の頭を手で押さえて少しだけ冷たい視線を送る。向けられた本人にしか分からないほどの威圧。それに口をつむるしかできない。そしてそ

んな決して退こうとしない殺音に仕方ないか、とも考えた。むしろ元が怪しい依頼だ。断つたとしても特に問題はないか、と判断して今回の依頼はここまでだ、という意味合いの視線を残つた北斗五人に向ける。自由勝手極まりない長の行動だが、意外と北斗のメンバーは全員が諦めたかのように頷くと去つていく殺音の後を追う。その途中、くるりつと彼女が振り返る。

「にしっしー。愛してるぜー、きよーやああ!!」

「……」

なんと返事をしていいのか分からず取りあえず頷いておく。両手をぶんぶんと振りながら殺音はそのまま彼方へと姿を消していった。慌てて後を追つていく北斗のメンバーだったが、貪狼がふと恭也のすぐそばで足をとめた。恭也は訝しげに横にたつた貪狼を見上げると同時に、強く頭を撫で回される。

「尊敬するぜ、坊主。たいしたもんだよ、お前」

次いでトンつと胸を軽く叩くのは恭也の倍の背丈はある巨門であった。

「お前の覚悟、意志。直視できぬほどに眩いな。期待しているぞ、少年」

どこか不機嫌そうに眉を顰める緑存が十字を切る。

「あんな破軍は初めてみました。悔しいですが、感謝します」

細目を珍しく見開いた廉貞がパンつと恭也の背中を叩いた。

「強くなるヨ、お前はネ。その心をわすれなかつたらネ」

そして、文曲がじつと恭也を見つめて頷いた。

「……」

いや、何か声をかけてやれよ——と思わず突っ込んだ貪狼に、何か感じるものがあつたのかしばらく考え込んで。

「……頑張れ」

やけに甲高い、いわゆるアニメ調の声色でそう文曲は短くそれだけを言い残した。それぞれ一言ずつ声をかけていった北斗の五人。残つたのは武曲、水無月冥ただ一人。

「……緑存の台詞じゃないけどあんなに嬉しそうな姉を初めてみたよ」

今は見えなくなった水無月殺音の姿を遠い目で追いながら、冥はどこか疲れた表情を浮かべた。それはとてつもなく長い年月を生きた人間の姿にも重なった。

「見事だよ、少年。僕はキミの全てに畏敬の念すら覚えるよ。あの殺音に、あそこまでのことを言い切った。僕や北斗の連中でも出来なかつたことだ。出来ないことだ」

空虚で乾いた言葉が冥の口から漏れ出てくる。

「幼いキミにその重荷を負わせることになつた。謝罪してもしきれない。本当にすまない。だが……ありがとう」

彼女は躊躇いもなく恭也に向かって頭を下げた。十秒近くもたつただろうか、ようや

く頭を上げた冥は、ふつと薄く笑う。

「強くあれ、少年。強くなれ、不破恭也。いつか再開する日を夢見て、あいつはいつまでもキミを待っている」

もちろん、僕もね。そういう残して水無月冥もまた姿を消した。

北斗がいなくなつて一分ほどたつて、一気に疲労が押し寄せてくる。恭也はがくりと、地面に両膝をつくが——あまりの精神的疲労で結局地面に横になった。冷たくて気持ちいい。このまま眠つたらこのまま眠っていたかもしれない。

昨日までの恭也だったらこのまま眠っていたかもしれない。だが、今は違う。約束がある。殺音との——決して違えてはならぬ盟約がある。一分一秒さえも今は惜しい。四肢に力を入れて、立ち上がる。その時、ぼんと頭に手が置かれた。

「……本気か、お前？」

相馬が珍しくもどこか心配した声色で聞いてくる。殺音に殴られたダメージはどこにいったのか。単純に我慢しているのか、回復したのか。この人もまたとんでもない化け物だ、と再認識しながらじつと相馬の顔を見つめた。

「本気で、あの化け物と戦う気か」

「……勿論です」

「頑固なガキってのは知ってるけどな。俺が何を言ったとしても無駄だろうが……」
「応言つとく」

ガリガリと頭をかく相馬。

「やめておけ。ろくなことにはならん。お前では——いや、人では届かん」

「——届かせます」

「……死ぬよりも辛いことになるかもしれん。お前は、どこまでやるきだ？」

「——無論、この命尽きるまで」

そうか、と眩きを残し、恭也の頭から手をはなす。

御神の屋敷がある方向へと帰っていく。その途中で足を止め、空を見上げた。

「……最近はお爺にも仕事をほされていな。わりかし手があいている」

「はい」

「いつでも来い。俺の全てをお前にくれてやる」

「……有難うございます」

照れているのだろうか。それだけ言うとお前はさっさと恭也から離れていく。その後を追っていく宴が手を振っていた。相変わらず対照的すぎる親子だと恭也はふともったが、それよりも殺音に殴られた怪我を感じさせないのがやはりとんでもない人である。そんな相馬に続くように恭也も歩み始める。

——強くなろう。誰よりも何よりも。ただ、強く——
——
そう決意を新たにした恭也は拳を握り締めた。

その恭也を見つめる一つの視線。

誰もが気づかなかつた。恭也はもちろん、相馬も——殺音でさえもその気配に。
恭也から随分と遠く離れた場所。そこに彼女がいた。

女性自身が光を放っているのではないかと思うほどの美貌。殺音を女神とするならばこちらは天使だろう。輝き渡るプラチナブロンズが背にまで伸びている。顔には若干のあどけなさが残っていた。女性と少女。どちらで表現すればいいのか悩む容姿だが、少女とよばれるような弱さなど微塵もない。片目を瞑り、あいている片目だけで恭也を見つめていた。だが。ああ、だが……この女性は駄目だった。関わりあいになつては駄目な領域の住人であつた。関わるな、近づくな。これは災害だ。これは天変地異だ。全てを無茶苦茶に、台無しにする生きる天災だ。人間、夜の一族、そんなもの関係なく凶がりに凶がった最悪そのものであつた。

「廻る廻る。世界は廻る」

そんな女性が朗々と言葉を紡ぐ。美しいソプラノの美声。

「巡る。巡る。世界は巡る」

遠く離れた恭也に語りかけるように。

「今生の貴方に会えて私は幸せです。貴方と再び会えるときを愉しみにしてますよ……少年」

これより二カ月後。相馬は御神宗家を追放されることとなる。

そして、さらに三カ月後——御神の屋敷は爆破され一族は潰えることになった。生き残ったのは僅か四人。不破士郎。御神美沙斗。御神美由希。そして——不破恭也。



「……殺音。悪い知らせがある」

「んにー?」

北斗が拠点としている人里はなれた山奥にある館。

その一室の自分の部屋の椅子に座り、テレビを見ていた殺音が冥に気の抜けた返事を返す。

「どうしたのさ? 生活費がなくなったとか?」

「……お前にとつてはそつちのほうがいいだろうね。僕としてはごめんだが……いや、僕としてもそちらのほうがよかったか」

どこか苛立たしげで、深刻そうな様子の冥に殺音がちやかす。

それにたいして律儀に真面目に返答する冥。

「……お前が御執心だった、不破恭也。あの少年だが……死んだぞ」

「……え？」

「先日御神の屋敷が爆破されたらしくてね。生存者は——いなかっただけだ」

「あ、そう」

冥の発言に興味をなくしたようにテレビを見直す殺音。

あれだけ執心していた恭也が死んだというのにあまりにあつさりとした殺音に、逆に冥が驚きを隠せない。

「意外だな……てつきり怒り狂うかとおもっただけど……」

「んー。だって生きてるって分かっているしね」

「え？ いや、でも御神不破両家の生き残りは誰もいないらしい……が」

「だって私と約束したんだしいー。そんな簡単に死ぬわけないじゃない？」

「……なんだその根拠のない自信は」

はあ……とため息をついて冥は部屋から去っていく。彼女とてあの勇氣溢れる子供が亡くなった事をなんとも思っていないわけではない。むしろ、心のどこかがズキズキと痛んでいる。そんな冥を無視して殺音はテレビに熱中する。だが、冥は気づかなかつ

た。殺音の手が震えていたことに。

震える片手を力いっぱい目の前にあつたテーブルに叩きつける。

何かが碎き折れる音が部屋に響き渡り、粉々になったテーブルが部屋に転がっていた。

「生きてる……生きてるって信じなきや、やってられないでしょう……」

物悲しい殺音の声が、虚しく消えていった。

それから十余年の月日が流れ——物語の幕が開く。

1章：出会い編

第3話：高町恭也と高町美由希

「九百九十六……九百九十七……九百九十八……!!」

さらさらと気持ちいい風が吹く。近くには川が流れているのか水の音が聞こえる。

風に吹かれた木々が、ザワザワと葉がこすれあう音を響かせていた。

人が滅多に近寄らないとされる巨大な山々が連なる日本でも辺境の地。その山々のなかでも霊山ともされる場所の麓で一人の女性が一心不乱に木刀を振っていた。

長い黒髪を後ろで三つ編みにして、容姿は可愛らしい。化粧ツ気がないが、元が余程いいのだろう。どことなく目をひきつけるものがある。薄く白いシャツが汗に濡れ、下着が透けて見えるが本人は全く気にしていないようだ。本人がきづいてないだけかもしれないが。

「九百九十九……千!!」

一切の休みなく木刀を振っていたのだろうに、最後の千回目まで姿勢を崩すことなかったその少女は、様々な意味で美しかった。武に生きているものならば目を離せない

よくな、そんな鬼気迫る様子も感じ取れただろう。

ふう、とたいして乱れていない呼吸を整えるように息をつく。

華奢に見える見掛けとは裏腹に恐ろしいほどの体力があるのだろう。腕の甲で汗を拭う。勿論それだけで汗をふき取れるはずもなく、近くの木の子にかけてあつたタオルを手に取った。

そのままタオルで汗をぬぐいながら近くに流れる川の方へと向かうと一分も歩かないうちに透き通った水が流れる川をみつけ、そこで両手で水を掬い顔を洗う。

都会ではお目にかかれない底まで見える美しい水におもわずため息が出る。毎年ここで合宿を行っているが、この川と周囲に広がる森だけは変わらない。

季節は四月。冬も終わり、春を迎えてはいるが流石に山奥であるここはまだ肌寒さが残っていた。特に朝と夜は、気を抜くと風邪をひいてしまうほどの気温である。シャツを替えないといけないかなーと考えている少女だったが、ビクリと身体を硬くした。

「……気を抜いたな」

「うう………面目ありません……」

振り返ることを許さない硬い声が少女の後ろから聞こえた。気づかぬ間に、一人の青年が少女の背後から首筋に手刀を添えていたのだ。ただの青年にしか見えないが、見る人が見ればそうでないことは分かるだろう。

無駄なく締めきった身体。身のこなしに隙はなく、纏う気配に険しきはない。短く切られた黒髪に、それが似合う精悍な顔つき。或いはただの青年にしか見られないかもしれない。少し腕が立つ程度の若造と侮られるかもしれない。

だが、少女は知っている。この青年が——世界最強に最も近い剣士であることを。誰よりも知っていて、誰よりも信じていた。

僅かな気配を感じ取られることもなく、足音もなく、己の背後にまわられたことにため息をつきつつ少女は両手をあげ降参の意を示す。

青年はそれ以上は何も言わず、少女から離れ森の方へと戻っていく。少女は鍛錬が終わった直後であつたが気を抜いていたことを指摘され罰が悪そうに青年に続いた。

「……………わっぷ」

その時、ばさつと少女の顔に布がかかった。

青年が何時の間にか少女に向かって投げていたらしい。それを広げてみると、少女の着替えだつた。気を利かせて持ってきてくれたのだろう。何も言わない青年の優しさに、少女は着替えを胸に抱き、嬉しそうに笑つた。

「ん、有難うね……………きよーちゃん!!」

「夕飯にするぞ。着替えたらテントに戻って来い……………それと肩は冷やすなよ、美由希」
永全不動八門一派が一つ。御神真刀流小太刀二刀術——御神流の残り僅かとなつ

た使い手。それがこの二人の兄妹。高町恭也と高町美由希である。

恭也は今年高校三年に上がり、美由希は中学を卒業し高校一年になる歳なのだが、毎年恒例ともいえる二人で行う春合宿を春休みの間を利用して彼らが住む都市海鳴から随離れたこの山にきたのだ。普通の人が聞いたら驚くのだが……美由希を指導しているのは何を隠そう恭也なのである。

歳は十八。そんな年齢で人を指導するなど無理だと思われるかもしれない。

しかし、恭也は見事なまでに美由希を育てていた。その強さは筆舌に尽くしがたく、彼らの知り合いである空手家の評価は、お前ら二人は人間をやめてるな、だそうである。

美由希は受け取った服に着替えるためにシャツを脱ごうとして——ちらりと恭也が去っていった方角を横目で見る。視界にはすでに恭也の姿はなく、揺れる木々が映されるばかりだ。

全く異性として意識されていないことに、深くため息をつく美由希。最近大きく成長してきた二つの膨らみを見て再びため息。あまり大きくなるのも戦いの邪魔になるため困るためだ。もしこの考えを言葉に出したら、高町家にいる犬猿の仲ではあるが、仲がいいという矛盾の間柄の二人の居候少女がタッグを組んで襲い掛かってくるのは明らかだ。そんな考えの美由希だが、一応は年頃の少女。本音は胸が膨らんできて嬉しかったりする。

着替え終わった美由希は、キャンプ地としてある場所に向かう。

緑豊かな世界。鳥の鳴き声が聞こえる。頭上を見上げれば赤く燃えていた。

既に夕方の時刻。太陽は地平線の彼方から没しようとしている。穏やかな風が汗ばんでいる身体を心地よく撫でていく。

獣道——というほどではないが、美由希と恭也が歩くだけの道——には草花が生い茂り、木々の合間を時折リス等の小動物がかけていく。平穩そのものの情景である。ゆつくりと恭也の後を追い、木々が開けた場所に出た。

広がった空間。そこにはテントと石で囲った焚き木。

薪を適度に入れながら、鍋を蒸かしている。その周囲には木を削った串を刺した魚が数匹炙られていた。

美由希の鍛錬中に得意の釣りで釣っていたのだろう。それに対して美由希は釣りが得意というわけではないので、かつては魚を捕まえるのが苦手だった。その旨を恭也に愚痴ったこともあったが、その返事は美由希の考えの遥か右斜め上をいくものであったのが懐かしい。

——釣れないのなら、掴め。

何を言っているんだ、この人は……という表情をしたのが悪かったのだろう。即座にデコピンを喰らってしまい悶絶してしまった。

できるわけがないという美由希の意見を聞いた恭也は手本としてあっさり泳いでいる魚十数匹を素手で掴み取ったのだ。あの時は思わず口をあぐりとあけて、反応がでなかつたのだが——恭也の、魚の気配を読め、という教えを自分なりに噛み砕き理解した。あれから数年……今でも釣りが苦手な美由希であったが、魚を掴み取るのは得意となっている。

御飯は恭也の当番のため、美由希は近くの石に腰掛けてぼうつとしながら出来るのを待つ。というか御飯を作る担当はほぼ全てが恭也だといつてもいい。

その理由は単純明快。恭也が美由希に料理をさせようとしなからだ。美由希としてはやはり好きな相手には手料理を振舞いたいという願望もある。そのため何度か料理をかってでようとするのだが、何故か凄く可哀相な人を見る目で見られて優しげに断られるのだ。

一度無理矢理作ろうとした事があったが——背中に衝撃がはしり暗転。目を覚ましたら、御飯ができていた。恭也曰く……これはお前が作った物だ。在り難く戴こう。質問しようとしたが、その時の恭也の顔が怖くて追及はできなかった過去がある。

とりあえず食器の準備をして、料理ができるのを待っていた美由希だったが御飯と魚以外に珍しく肉のような物も用意されていることに気づく。この山は野生動物が豊富で、時々ウサギや鳥を捕まえているのだが今回はどうやらそれらとは異なるようだ。傍

にいてあった水筒から木でできたコップに水を注ぎ、ながら口に含みながら聞いてみる。

「あれ？きよーちゃん。何か動物捕まえたの？」

「ああ。お前が素振りをしている最中に熊が出たのでな。狩っておいた」

「ぶふあつ!？」

思いつき噴出した。

すぐ前にいた恭也は背後からだというのにその霧状となった水を横に軽く動いてかわす。そして何事も無かったのように調理を再開する。

「ごほつ……ごほつ……熊!?熊がでるの、この山!？」

「冗談に決まっているだろう？確かにここらは動物は多いが流石に熊がでたことはない」

「だ、だよね——あはは」

乾いた笑いをあげる美由希だったが、兄ならば本当に熊を狩りかねないのでちよつと不安になる。落ちてこうと再度水筒の水を飲む。

「お前は俺なら熊を倒せられると思ってそうだが……熊をなめるなよ」

「……お、思っていないよ」

あつさりと心の内を見抜かれた美由希は水が気管に入りそうになったが、なんとか落

ち着かせるように飲み込む。恭也はまるで相手の思っていることが分かるかのように言ってくるが多く、美由希は兄がそういった特殊能力をもっているのではないかと怪しむことも多々あるのだ。

「いいか。ツキノワグマならまだいい。だが、羆にだけは気をつけておけ」

「ええつと……いきなりだね、きよーちゃん。羆つてそんなに危険なの？」

「……ああ。奴らの凶暴性。執着性は尋常じゃない。三毛〇羆事件や福〇大ワンゲル部羆事件など悲惨な獣害事件を引き起こしているからな。十分に注意しておけ」

「聞いたことないんだけど……きよーちゃん詳しいね？」

「恐ろしいからこそ、調べる。知らない方がよっぽど恐ろしいと思うぞ」

「ん……そうかもね」

炊き上がった御飯を皿にのせ美由希に渡す。結局何の肉から分らないが——それも更にのせて渡された。恐る恐る食べてみると思ったほどまずくはない。多少の獣臭さを感じるが、牛や豚とは違った旨みがある。山での鍛錬中は魚や山菜が多いので、滅多に味わえない肉は有難い。

今更どんな肉でもいいか……と納得して美由希は食べすすめた。二人で黙々と食事をしていたが、ふと美由希は思いついたように口を開く。

「ん。そういえば、きよーちゃん。熊が怖いつて昔なにかあったの？」

「……昔からとーさんに連れられて日本全国を回っていたときに少し、な。それと全国武者修行で中学の時に旅立ってた時があっただろう？その時にも北海道の方で出くわしたことがあったんだ」

「出会ったところはあつたんだ……よく無事だったね？」

「ああ。北海道で遭遇したのは熊だったからな。流石に殴り殺すのには苦勞した。奴らは人間とは比較にならない肉の分厚さだから打撃系の効きが鈍くて……四百キロクラスの大物はしつこかったぞ？」

「ふーん」

聞き流した美由希だったが、魚にかぶりつこうとして——反芻するように呟く。

「え、えつと……殴り殺した？」

「あの時は……雨に降られて洞窟で雨宿りをしていた時だった。外の様子を見に出たらぼったり出くわしてしまったんだ。刀を取りに戻る間もなく襲い掛かれて、なかなかの強敵だったな」

「無理無理無理、無理でしょう!？」

「失敬な。何度か死を覚悟したがきつちり息の根を止めたぞ。素手で」

「素手で熊を殴り殺すってどんだけ!？」

「楽に勝てた、とはいえんが。良い戦いだつたと両者認めるところだろう、あれは。その

後食べたがなかなかいけたぞ。貴重なタンパク源だったしな」

「てか、食べたの!？」

「ああ。少々硬く肉に臭みがあったが、贅沢はいってられん」

「……もう何に驚けばいいのかわからないよ……」

知らなかった兄の非常識さの一つがまた新たに浮上し、心底疲れたため息をつく。

刀を使って倒すのならまだしも、素手で殴り殺すとか人間を辞めるとしか思えない。少なくとも美由希は熊と素手で向かい合って倒せれるような自信はない。というか、あつてたまるか。

「まあ、実際は熊に遭遇するなど滅多にないから心配するな」

「……わかつてるよ」

一応はフオローをいれてくる恭也だったが、皿にのっている肉を見てふと思いついたように独白した。

「そういえば——今日で倒した熊は五匹目になるのか」

「……えっ!?!そ、それってまさかこの肉——」

美由希の台詞を邪魔するように、テントからオーソドックスな携帯の着信音が鳴った。どうやら恭也の携帯のようで、食器を置くとテントに向かう。美由希は質問を切られた形になったので、皿にのっている肉をどうしようかまじまじと見つめた。確かに牛

や豚とは違う。ましてや鳥でもない。鹿や狐などでもなかった。ということは本当に

。テントに戻った恭也は荷物の中に埋もれていた携帯をとりだすと液晶画面を確認する。表示されていた名前は——高町桃子。恭也と美由希の母親だ。

「もしもし。こちら俺だが——何かあったのか?」

『何かあったか?……じゃ、ないわよー!!ちゃんと連絡を毎日いれなさいっていったでしよー!!』

「……すまない。忘れていた」

『もう!! 恭也がついているから大丈夫だとおもってたけど、心配したんだからね』

相変わらず元気な母の様子に恭也は安堵を隠せない。恭也が家を一週間以上あけるのは美由希との合宿の時だけだ。桃子がこちらを心配するように、恭也も高町家のことを心配していた。桃子がいる限り大丈夫だてや思っているのだが……。

「それで安否の確認の電話……だけではないようだが?」

『あ、そうそう。恭也つてば五日までに帰るって言ってたじゃない?美由希の入学式が六日にあるから』

「ああ。そうだが」

『なのはこの時間になっても帰ってこないから心配したのよ。まさか恭也が日付をを間

違えるわけないし』

「……」

桃子は何を言っているのだろうか、と恭也は首を捻る。

まだ今日は四日で、明日の朝一で帰ろうと思っていたのだが。

「……少し待ってくれ」

耳から携帯を離し、改めて液晶を見る。

そこに表示されていた日付は——四月五日。どう見ても恭也が一日日付を間違えていただけであった。咄嗟に頭の中で山から下りる時間と、電車で海鳴に戻るのに必要な時間を計算して弾き出す。

「——今夜遅くにはなるが、帰る。心配しないでくれ」

『恭也……あんた一日勘違いしてたわね?』

「……何のことだ?」

『はいはい。そういうことにしておいてあげるから急ぎなさいよー。あんたもしっかりしてるのか抜けているのかわからない時あるわよねー』

「……面目ない」

幾ら美由希の鍛錬に気を使っていたとしても、日付を間違えるのはうっかりを通り越していた。

今回の合宿で美由希は御神流の基本でもある徹までを使いこなすに——というにはまだ早い、実践でも十分使えるレベルに達した。

予想以上の成長速度を見せる美由希は、指導をしていても楽しいと素直に恭也は思う。怪我をさせることなく、御神の剣士として完成させることが恭也に課せられた義務ともいえた。

焦って強さを求めた剣士の成れの果てが——ここにいる。ズキリと痛んだようなきがする右ひざ。普段生活する分には問題もない。だが、決して忘れえぬ過去の愚行の結果だ。

「では、急いで帰るとする」

『あ、晩御飯はどうする?』

「丁度いま済ませたところだ。準備をしなくてもいい」

『わかったわー。気をつけて帰ってくるのよ』

携帯を切り、テントから外に出るとすでに美由希が後片付けをしていた。

どうやら恭也の話を聞いていたのだろう。美由希自身も鍛錬で疲れていたとはいえ、日付を確認していなかったのが恭也に文句をいえるはずもない。

「片付けた後すぐに山を降りるぞ。強行軍にはなるが、ついてこれるか?」

「大丈夫。それについていけないと思ったら置いていく気でしょう?」

「勿論だ」

あつさりと言ひ切る恭也にちよつとだけ寂しくなる美由希であつた。



強行軍に強行軍を重ね、山を降りなんとか一番近くの駅についたのは午後七時を回つたところであつた。

普段だつたらもう少しゆつくりといくので、一時間近くを短縮して下山できたことに

なる。鍛錬の疲労が蓄積されている現在でそれだけの速度で降りれたのはまさに限界ぎりぎり。無人駅のため恭也や美由希以外に待っている人はいなく、美由希は疲れたように椅子に腰を下ろした。

対する恭也は時計に目をやり、時間を確認する。美由希からみて、恭也が疲れているようには全く見えない。美由希の指導をし、供に汗を流した後に——夜中美由希が寝静まった後も一人で鍛錬を続けていたというのに、疲労など微塵もないその姿に心底尊敬のため息しか出ない。

はつきりいつて美由希の剣士の腕前は相当なものだ。

それは父の友人であり、数少ない実戦空手の巻島流の創始者巻島十蔵のお墨付きを貰っているのだから疑うことは無い。

その美由希が恭也のことを断言する。高町恭也の底は——計り知れないと。

強くなればなるほどにそれを体感できる。実戦をかねた試合を何度も行っているが、恭也に一撃をいれたことは一度としてない。かつて恭也が士郎に感じた壁。それを美由希は恭也に感じていた。

そんなふうには思われていると気づいていない恭也は背負っていた荷物を降ろし、肩をぐるぐると回す。さすがに美由希の数倍の重さの荷物を持っていたために肩が痛かったのだろう。ここら一帯は田舎のため電車の本数は少ない。というかほとんどこない。

普通電車が一時間に一本だけなので、乗り過ぎたら長い間待たされることになる。何度もここにはお世話になっているのでその時間にあわせるように下山してきたこともあり、あと数分程度で電車はくるようだ。

やがて、遙か彼方から低くうなるような、かすかな振動が響くのに恭也はきづいた。耳をすませば、確かに長く低く、響く音の波動が聞こえてきた。

夜の闇を切り裂くように、明かりを照らし電車が現れる。寸分の狂いも無く、駅に停車した。

恭也と美由希は電車に入ると荷物を降ろし、長椅子に座る。

春休みも最終日で夜ということもあつたのだろう。恭也達以外に乗客は乗っておらず、閑散としていた。

電車が走り出し、車両が揺れる。動き出してからすぐ恭也の肩に軽い重みが加わつた。美由希が相当に疲れていたのだろう。恭也に身を預けるように眠っていたのだ。流石に起こすような真似はしない。

ここから海鳴まで一時間程度はかかるのだから、それまでは寝かせておこうと決めると、恭也も目を瞑る。眠る——というわけではないが、少し考えたいことがあつたらだ。

美由希には徹底的に基本を叩き込んでいるがそれがかなりのレベルになってきてい

る。御神流の基本にして最も重要な徹。これを使いこなせるようになったのは大きい。この調子でいけば御神流でいう第三段階の貫をそろそろ教えてもいいのかもしれない。

そしてその先——神速の世界。

御神流の奥義の歩法。かつて大勢居た御神の剣士達も全員がこれを使えたわけではない。というか、使えた人間の方が少ない。

言つてしまえば己にかかつているリミッターを外し人間が可能とする動きを大幅に上回ることができる——というものだ。人によつて解釈の違いがあるが、恭也はそう認識している。簡単にすると、火事場の馬鹿力を何時でも可能とする。それだけだ。だが、そんなことが簡単にできるはずもない。また、神速に対する適正というのも存在する。どれだけ修練を積んでも結局その域に至れなかったという事例も多数存在する。逆にあっさりと神速の世界を自在に操れた剣士も居た。故に神速の世界へ至るには修練も大切だが、適正も重要だとされている。

果たして美由希はどうだろうか。

恭也を信じて、不平不満もなく青春を投げ打って鍛錬に精をだしている。修練という意味では問題は無いはずだ。後は適正。貫を修得したうえで——後は神速の世界を認識できるか。多少の不安はあるが、問題はないと信じている。

美由希は、御神宗家の血を受け継ぐもの。

御神静馬と御神美沙斗の間に産まれた完全なサラブレッド。両者とも神速の世界にわけもなく踏み入っていた剣士達だ。その二人の血を受け継ぐ美由希ができないはずがない。

目をあげ、今度は恭也は自分の右膝を見る。

他の人間が見たならば何の問題もないように見えるかもしれない。だが、実際に恭也の右膝は一度砕かれたことがある。別に事故でもない。鍛錬の疲労でもない。

勝てないと分かっているながら戦いを挑み、圧倒的な差を持つて——人智を逸した化け物に嘲笑うかのように砕かれたのだ。

今でも色鮮やかに思い出せる。

五年もの昔——ひたすらに強さを求めていたころ。

その時に彼女に出会った。

何故居たのかわからない。何時の間に居たのかわからない。

普段鍛錬をしている八束神社の裏手に広がる山の中で、初めて彼女に邂逅した。

片目だけでこちらを射抜く人外の化け物に。

美しい女性の姿をしただけの化け物に。

己の全力で挑んで——傷一つつづけることもできずに敗北したあの時の思い出は

苦々しい。不可思議なほどに強かった。二振りの剣を操り、恭也と同じ土俵で戦いなが

らも圧倒された。その姿は——御神流の剣士にそっくりであったのが未だ理解できない。

意識が薄れていく中、女性は恭也の右膝だけを砕いて消えた。

忘れられない。あの時の屈辱を。忘れられない。あの時の言葉を。

——この程度の試練は乗り越えてくださいね？

狂ったようなソプラノの声が頭に響く。

すぐ傍にあの女性がいるのではないかと時々錯覚してしまう。

——私は××と呼ばれています。アンチナンバーズが××。世界に仇なす化け物集団の一員ですよ。そんな可憐で異常な私が予言をしてさしあげます。今から二年後に貴方は人の理を容易く超えた怪物と出会うことになるでしょう。人類に憎悪と悪意しか持つていない真正正銘の化け物に。それまでに、強くなつていないと死にますよ？

彼女は予言めいたこと残して姿を消した。

それ以降彼女と出会ったことは無い。気配を感じたことも無い。

だが、確かに彼女の予言は——的中したのだ。

反射的に右膝を手で握りしめたが、すぐに力を抜いた。

何故だろうと時々思うこともある。あの時あの女性は確実に恭也を殺す事ができた。

だというのに右膝を砕くにとどまったのだ。その意図が読み取れない。しかも、砕か

れた膝は実はそれほど酷いというわけでもなかったのだ。膝はすぐに治った。

しかし、不思議なことに今でもその時の古傷が痛むのは事実である。幻痛かと最初は訝しがったが、そうではなかった。知り合いの医者に相談した所、細部まで検査してもらえたが理由は結局分からずじまいだった。その時の話の中での一言が妙に恭也の耳に残っている。

——完全に怪我は治ってるのに、医者として情けないことだけど原因は正直わからないんだ。まるでこれは一種の呪いだね。

呪い。

そういわれた恭也はそれもあるかもしれないと思った。

あの女性ならば、そんなことを仕掛けていても可笑しくは無いのだから。恭也を殺さなかったこともあるし、膝のこともある。恭也にとっては恨みしか抱けない相手ではあるが、あの時の女性の瞳は——懐かしい人物にあったかのような——そんな優しいな感情が読み取れた。

勘違いだったのかもしれない。それでも確かにあの時の女性は——。

「いや、今更気にしても仕方ない」

何時の間にか思っていたことが口に出ていた。

恭也自身、再びあの女性と出会うことになるだろうという予感を感じているために次

の邂逅で聞けばいいと思っっているのだ。今の自分ならば五年前のような無様な結果にならないという自信はある。

慢心ではない。あの時の敗北で得たものは計り知れないほど多い。

あの時あの女性に出会って膝を砕かれなかったよりも——今の自分の方が強いという確信がある。不思議なものだ。怪我を負っていない自分よりも、怪我を負っている自分の方が強いなど思うのも。

恭也の思考に割って入るように何度も駅に停車し、少しずつではあるが乗客も増えてくる。といっても満員になるほどでもなく、車両は所々あいていた。外の景色もすでに暗くなっていて見えにくいのが、家々の明かりが多くなってきたのがはつきりとわかる。

ガタンゴトント規則正しい揺れが身体を揺らす。

どれくらいたっただろうか。次の駅を告げる車掌のアナウンスが聞こえる。

『次の停車駅は——海鳴。海鳴——』

ようやく恭也達の住む海鳴へと着いた様で、隣で寝ている美由希を揺らす。

「……………んっ……………」

「起きろ、美由希。帰ってきたぞ」

「ん……………ふあ……………ごめん。寝ちゃってみたい」

「気にしないでいい。もう少しで家まで帰れるから頑張れ」

「はーい」

電車が駅に到着。海鳴はかなり大きな都市でもあるので多くの乗客が下車する。

その流れに乗るように恭也と美由希も電車から降り、改札を通った。時刻は九時近くを指しているが、多くの人たちが海鳴駅の前を賑わせている。

「はあー。懐かしの海鳴にかえってきたよー」

「やはり帰ってくると安心するな。今日は鍛錬は無しとするから家に帰ってゆっくり休むぞ」

「了解です」

鍛錬無しという恭也の言葉に美由希は安堵したように返事をする。

別に訓練は嫌いではないのだが——今日ばかりは疲れがピークに達している。

二人が高町家がある方向に向かおうとして、恭也が人混みの中に見知った顔があるのに気づいた。

「……美由希。先に帰っていてくれ。少し用事が出来た」

「うん。分かったけど……あまり遅くならないようにしてね？」

「ああ。すぐ帰るさ」

去っていく美由希を見送る恭也。

この時間に女性一人で帰るといふのも物騒ではあるが——美由希を襲うような輩がいたら逆にそちらがとんでもない目にあうだろう。

恭也は人混みで見かけた知り合い……女性に声をかけようとして、近づいていく。

周囲は人混みが凄いいのうのに、誰にもぶつかることなくすり抜けるように歩いていき——。目的の人物に辿りつく一歩手前で長身の男性にぶつかってしまった。ドンという音がして肩が男性にあたる。それは知り合いの女性とその長身の男性に丁度割り込むように——。

「失礼しました」

「……ちっ」

謝罪をする恭也に対して男性は舌打ちを残してその場から離れていった。

後ろのそのやりとり気づいたのだろう。目の前にいた女性が恭也へと振り返る。

「あれ？ 高町——くん？」

「終業式以来だな。月村」

女性の名は月村忍。恭也の通う高校である風芽丘学園の生徒である。

恭也と一年二年と同じクラスだったためそれなりに面識があり、恭也も砕けた話し方ができる数少ない相手である。

恭也は、はつきりいって知り合いが少ない。というか、学校において友達と呼べる人

間はたった三人だけだろう。

一人は赤星勇吾。剣道部の部長であり、恭也とは中学時代の腐れ縁で、恭也の唯一の男友達だ。二人目が藤代佳奈。女子剣道部の部長。赤星との縁でそれなりに親しくしている。

三人目が目の前の月村忍だ。互いに口数が多いというわけでもなく、友達もいない。休み時間は、むしろ机が友達な二人。色々と共通点があったこともあり、二年の時に少しだけではあるが話すようになり、今では友達といつても良い関係だ。

はつきりいつて忍は美人だ。

身長は百六十を少し超えた程度。薄紫の髪が綺麗で、背中ほどまであるロングが印象的だ。どこか無口で冷たいように見えるが、ソレが良いとクラスの男達が噂している。

「こんな遅い時間にどうしたの？」

「……春休みを利用してキャンプに行つて来てな。今から帰るところだ」

「キャンプ？　へえ……意外とアウトドアなんだね。何処に行つてたの？」

「……稲神山の方に少しな」

「稲神山？　ああ、うん。あそこはのどかでいいところらしいね」

「——ああ」

ちなみに恭也は下手に嘘をついて後々話の流れに齟齬がでるのを防ぐ為に本当のこ

とを言っている。豊かな自然で有名稲神山。車どころか人が通れるような道もほとんどない場所ではあるが、一応は山の麓付近にキャンプ場が存在している。

「さっきの台詞をそのまま返すが、月村はこんな時間までどうしたんだ？」

「親戚に呼ばれてね。今帰ってきたところなの」

「そうか。このまま帰るのか？時間も時間だ。送っていくくらいはするが」

「ん。ありがとう。でも、大丈夫。車でそこまで迎えに来てくれるから」

「それならいいんだが……今日のように遅くなる日は気をつけたほうがいい」

「うん。気をつけるね。高町君って——優しいね」

忍が口元に笑みを浮かべた。見惚れそうになるほどの綺麗な笑みだった。

その笑みに一瞬目を奪われた恭也だったが、目を軽く瞑って冷静さを取り戻す。

そんな恭也を不思議そうに眺めていた忍だったが、時計を確認して、ロータリーの方角へと視線を向けた。

目的の人物を発見したのだろう。遠目にだが、スーツ姿の女性が高級そうな自動車から降りてこちらに一礼していた。

「それじゃあ、高町君。また明日。また同じクラスになれるといいね」

「そうだな……祈っておくか」

胸が高鳴るような言葉と笑みを残して、忍はその女性のもとへと去っていった。

自動車で帰るのなら大丈夫だと安心して、恭也も歩き出す——美由希を追ってではなく、薄暗い路地裏の方へと。

確かにここら周辺は駅があるため開発が進んでいる。だが、必ずそういった薄暗く危機感を煽られるような場所も存在するのだ。

薄暗い路地地に入った恭也は真っ直ぐに奥へと進む。

そして、行き止まりまで足を進めると体を反転させた。

「出てきてもらっても構いませんよ。居るのはわかっています」

「……お前のようなガキに覚られちまうとはな……俺もやきがまわったか」

恭也の視線の先の暗がりから出てきたのは先ほど忍の前でぶつかった男性だった。

さつきぶつかったときはまだ不機嫌そうな表情だけだったが、今は明らかに敵意を剥き出しにしている。改めて見ると恭也よりも随分と背が高く、筋肉質なのがわかる。

「俺が態々人気のない場所まで来た理由は推測できますか？」

「さあな。ただお前は俺の仕事の邪魔をしゃがった。忌々しい奴だ。楽に終わると思っただのによ」

男はポケットに手をつっこむと中をまさぐる。しかし、一向に目的のものを掴むことができない。そんな男を一瞥し、恭也は隠していた折り畳み式のナイフを取り出し、見せつけるようにかざす。

「はっ？ いや、ちよつとまで……なんだ、それ」

「先程ぶつかったときに抜き取らせてもらいました」

「嘘だろ……そんな様子など微塵も……」

先程までの余裕と敵意に満ちた表情は一転し、男性は呆然とする。

そして、男性はようやくわかったのだ。さつき恭也がぶつかったのは偶然ではなく、男性からの忍への敵意に気づき、故意に割って入り邪魔をしたのだと。

ただの青年にしか見えなかった恭也を見る目にかすかに恐れ of 感情がまじった。

恭也はナイフを後ろに放り投げると一歩男性に向かって踏み出す。

「さて、話して貰うぞ。俺の友を——月村を狙った理由を」

恭也の言葉遣いが本来のものへと戻り——男性は悟った。自分が決して関わってはならない何かに自ら進んで近づいてしまったことを。男性は長い間暴力が支配する世界で生きてきた。別に真つ当に生きようと思えば生きれただろう。

だが、それでも自らが選んでこちらの世界へ足を踏み入れたのだ。拉致監禁。殺人。恐喝。様々な法に触れるような裏の仕事をこなしてきた故に、色々な人間をみてきた。その中でも目の前の青年は常軌を逸している。何が危険なのか、と問われればどう答えればいいのか迷うだろう。それでも怖いのだ。恐ろしい。人間の姿をしているだけに、逆にそれが恐ろしくてたまらない。

次に男性の取った行動は——服従だった。

両手をあげ、刃向かう気はないのだということアピールする。

いきなりそのような行動にでた男性を不審そうにみる恭也だったが、本当に敵対する意思がないのだということを即座に読み取った。

「知っていることは、全て話す。だから命だけは、助けてくれ……ください」

「正直に言ってもらえるなら、ソレは約束しよう」

殺す気など全くないのだが、勘違いしているならそれはそれで利用できるので敢えて否定はしないでおく。

「まず最初に聞きたいことは、月村を狙った理由だ」

「……依頼がきたんだよ。しかも、かなり法外といつてもいい金額で。俺自身はあの女に何の恨みもない」

「依頼とは？」

「……俺は、言ってしまうえば何でも屋だ。ただ、とても表沙汰にできないこと専門、だが……」

「依頼主は誰なんだ？」

「……いえねえ。と言いたい所だが、わからん。さつきも言ったが法外な金額には依頼主のことを詮索するな、って意味もこめられてたんだらう……」

「しかし、電話やメールだけで依頼を受け付けたわけではないだろう？ 実際に会って依頼の話をまとめたのではないのか？」

「……確かに会った。でも、あいつはただのつかいっばしりだぜ……」

「そう思う根拠はあるのか？」

「……実際に会ったやつがそう言ってたんだよ。雇い主が云々ってな……ついでに相手先への連絡方法はない。あつちから連絡がくるのを待つだけだ……」

「依頼はどんな内容だったんだ？」

「……あの月村忍って女を脅せって。殺しは厳禁。怪我をさせるようなことはするなつてよ……」

矢継ぎ早に質問をした恭也だったが、どうやら男性はほとんど何も知らないらしい。

質問をするときに男性の表情を注視していたが、全くといっていいほど反応はなかった。仮に嘘をついていたとしたら、恭也を前にして騙しきっていたならばとんでもない演技力だ。恐らくこれ以上聞いたとしても大した成果はあがらないだろう。

依頼主への連絡する方法があれば直接そちらを辿る方法もあったのだろうが、今の段階ではそれもできないらしい。

「これが最後だ。この世界から足を洗え。それを約束できるならば——去れ」

「……ああ。約束しよう。頼まれたつてごめんだね」

男性はそう言い捨てて路地裏から姿を消す。

言葉に出したようにもはやこの世界で生きていこうなどとは思えなかった。

これまで多くの修羅場を潜り抜けてきた。それなりに自分が度胸と腕っ節が優れているのだと自負をしていた。だが、本物に出会ってしまったのだ。まごうことなき、本物の裏の世界の住人に。戦おうなどとは決して思えない。思うことすら許さない絶対的な、格の違い。根本的な、質の違い。命があつただけで幸運と思えてしまう。

「——十年ぶりに故郷に帰るか」

男性は自分にしか聞こえない程度で呟き——。

そして、海鳴の街から一人の男が消えた。

路地裏から去っていくのを見届けた恭也は、これからどうするかと考え込むように口
に手をあてる。

忍に危害を加えようとしている誰かがいるらしい。だが、殺す——というほど過激なものでもない。となれば、言葉通りの脅し。彼女は数少ない恭也の知り合い。できれば力になりたいと思うが、まずは忍の意見も聞かなければならない。自分ひとりで動き回るのも迷惑にしかならないだろう。

それでも、危害を加えようとしているのが誰なのか。それは調べておいたほうがいいだろう。

恭也は携帯電話を取り出すと、登録してある番号を探し、通話のボタンを押す。

耳に当てると何度か着信を知らせる音が鳴り、やがて電話が繋がった。

『やあ、恭也。こんな時間にどうしたんだい？』

「夜分すみませんが、急ぎ——というわけではないのですが調べていただきたいことがあります」

電話に出たのは女性の声。

電話越しではあるが、恭也へ対する言葉遣いは親しさを感じさせる。

『ん。最近は警察の方の仕事も落ち着いてるし、恭也の頼みなら優先して受け付けるよ？』

「何時もご迷惑をおかけします」

『いいっていいって。ボクと恭也の仲じゃない？』

電話の女性のどこか、からかう様な響きを言葉に乗せる。

「——調べていただきたいことは月村忍という女性の身辺で不審なことがないか、です。もしあるようならば、誰が何の目的で行っているかも合わせて調べていただきたいのですが」

『……月村？どこかで聞いたことがあるような……まあ、分かったよ。できるだけ早めに調べておくから』

「有難うございます。かかる費用のことですが——」

『翠屋で御飯を奢ってくれればいいさ』

「しかし……」

『ボクにとつてはそれが最高の報酬だからね。期待しているよ』

「……何時も助かります」

『ふふ。じゃあ、わかったら連絡をいれるよ。携帯でいいかい？』

「そうですね……はい。それをお願いします」

『それじゃあ、バイ。恭也』

今回は相手も機嫌がよかったのだろう。あっさりと頼みごとが終わったことに対して逆に驚いてしまう。

何時もだったら、あーだこーだと様々な理由をつけてきたに違いのないのだから。

あの銀髪の小悪魔は——頼りになるが、それ以上に厄介なところもある。

果たして本当に翠屋で一回食事を奢れば済むのか……ぶるりと恭也の背中を悪寒が駆け抜けた。第六感が告げてくる。絶対に碌な事にならないと。

今から考えても鬱になるので、とりあえず無理矢理考えないことにしようと思った恭也は路地裏から抜け、高町家へと向かう。

駅に着いた時に比べて少しばかり人の波は減少をしているようだが、まだまだ人混み

が消える前兆は見えはしない。

再度その人の波をすりぬけ、歩いて行く。ひんやりとした空気が恭也の頬をなでる。すれ違う人の数はどんどんと少なくなっていく、そのかわりに家が増えてきた。家から漏れる明かりが遙か先まで続いている。

海鳴駅や海鳴臨海公園などは開発されて、様変わりをしていつているが、ここら一带は昔から変わらない。

恭也がこの街に住み始めてから八年程度だが、この住宅街だけはまるで時が止まったかのような、懐かしい気持ちにさせてくれる。

住宅街を抜けた先、他の家とはまた異なる様相の家が建っていた。普通の家の三倍はある敷地。

その周囲は石垣で囲われているが、敷地内には二階建ての家と、小さいが池もあり——隅には道場まであるという大盤振る舞い。

こここそが恭也の住んでいる場所であり——多くの家族と暮らしている高町家である。

門を抜け、玄関に到着。

高町家は今では珍しいかもしれないが、玄関はドアではなく引き戸になっている。

手をかけてあげようとするやと抵抗もなく開いた。どうやら鍵はかかっていたらしい。美由希が先に帰ってきているはずなので気を使ってくれたのだろうか。

「お帰りなさいですーおししよー」

恭也を迎えたのは身長百四十程度の小柄な少女。

緑色のショートカットヘアで、可愛らしいが童顔。小学生にしか見えないがこれでも明日には晴れて中学生の仲間入りをする年齢である。

「ああ。今帰った、レン」

高町家が四女——レン。本名は鳳蓮飛。実際に血のつながりは無い。

桃子の親友であるレンの両親が海外赴任で日本にいないため、数年前から高町家で居候している。そのレンが恭也を迎えたのだが……。

「何故そんな格好で出迎えてるんだ？」

すでにお風呂に入ったのだろう。可愛らしいデフォルメの亀の刺繍がしてあるパジャマを着ている。これは全然問題ない。問題はレンの姿勢だ。玄関に入ってすぐの場所で正座をして深々とお辞儀をしていたのだ。

「お師匠を出迎えるんですからこれくらいは弟子としてせなあかんと思ひまして……」

「まさか今まで待つていたのか？」

「いえー。美由希ちゃんが先程帰ってきましたので、時間的にお師匠おそろそろお帰り

になられるのではと……。そしたら丁度お師匠の気配を感じましたんで」

気配を感じたから、迎えに出た。レンは簡単に言うのだが、その絶技に舌をまく。

普段から恭也は意識して気配を抑えるようにしている。学校生活を送る上で、他の学生と遜色ないほどに。違和感を感じさせないために。ただの一学生を演じるために。彼女は、言ってしまうばただの一般人レベルの恭也の気配をあつさりと感じ取っていたのだ。

戦いの天才。恭也はレンをそう呼んでいる。

恭也の知っている中でも美由希の才は群を抜いているといつてもいい。間違いなく御神流の正統伝承者として恥ずかしくない剣士としてなれる器を持っている。

その美由希を遥かに凌駕するのが鳳蓮飛だ。剣士としての才覚はない。武器を使わぬ無手の戦いならば、レンに勝てる相手を探すほうが難しい。決して切れぬ伸び代。研鑽を積み積むほど桁外れの成長を見せる。恭也の心を躍らせるほどに——その才は溢れている。本人自身はそれほど戦うことを好いていないのが唯一の欠点なのかもしれない、が。

「お師匠の気配を間違えることはうちは絶対にありませんよー」

にこりと一点の曇りもない笑顔で答える。

恭也は指で額をかくと、靴を脱ぎ家の中へと入った。それにレンも一步後ろを歩いて

ついでくる。

「晶となのはは？」

「晶は今日は早めに家に帰る用事があつたみたいです。なのちゃんは今さつきまでお師匠をまつとつたんですけど、リビングで居眠りし始めてしもうたんで部屋で寝かせときました」

「すまんな。苦勞をかける」

「美由希ちゃんが今お風呂使ってるんで、お師匠が使えるのはもうちよつと後になりませう」

「ああ、わかった」

二人揃ってリビングへ入った途端、キッチンで食器を洗っていた女性が物音に気づき振り向く。見目麗しいという単語がピツタリあてはまるような容姿だ。光を反射する美しく長いブロンドの髪。知る人ぞ知る歌唄い。世界が注目する若手の歌手の一人——ファイアツセ・クリステラ。恭也の幼馴染にして、高町家の長女的存在。

恭也の姿を認めると、ペアと花がいたような笑顔で走りよつてきて——そのまま勢いよく恭也に抱きついた。軽い衝撃がはしるが、恭也ならば受け止めることは容易い。

「きよ〜や〜、お帰りー!!」

ファイアツセは甘えるような声をあげ、恭也の胸に顔を埋めて背中に手をまわして抱き

しめる。とても恭也より年上——二十一になる女性の行動とは思えない。普段は大
人っぽいのだが、恭也に関することは時折子供のような行動を取る時もある。

それと抱きついてきているため、なんとというかフィアツセの胸が恭也にあたつて仕方
ない。高町家最強を誇るその双丘は破壊力抜群だ。口にだすわけにもいかず、とりあえ
ず黙つたまま抱擁を受け入れておく。やましい気持ちなど一片も——ない。

「連絡くれないんだもん。心配したんだよ」

「悪かった。どうも鍛錬を始めるのと他のことが目に入らなくなつてしまうから。迷惑を
かけた」

「もう。今度からはちゃんと連絡をいれてね」

フィアツセは恭也から離れる前にチョンと鼻に触れるか触れないかで指を止め、メツ
と子供にするように叱る。恭也を叱つてはいるのだが、全くそんな様子には見えない。
むしろ可愛さ満点だ。

「洗い物さきにしちやうね。座つて待つててー」

「手を止めさせてしまつてすまんな。」

キッチンに戻つたフィアツセは食器を洗う仕事に戻る。

恭也も荷物を置くと、傍にあつたソファに身を沈める。ついでにテレビのスイッチ
をつけるが、すでに時間も時間。ニュースくらいしかやっていない。

視線を感じ、顔だけ後ろに振り向くと、レンがじとと効果音がつきそうなくらい冷たい視線で窺ってきていた。

レンの両手は自分の絶壁ともいえる両胸にあてている。

「おししょーの、おししょーの……おっぱい星人ー!!」

そんな捨て台詞を残してレンはリビングから走り去っていく。ダンダンという階段を登る音が聞こえ、ボタンと勢いよくドアを閉められた。

恐らく自分の部屋に戻ったのだろう。呆然とそれを見送った二人は顔を見合わせる。

「なんだったんだ……?」

「さ、さあ?」

二人して首を傾げる。

おっぱい星人などという不名誉な呼ばれ方をしたが、それは気にしないで置こうと心に決める恭也。決してフィアッセではわからないだろう。今のレンの気持ちは――。

兎に角去っていったレンのことは置いていて、恭也はテレビに流れるニュースを興味深げに眺める。

それもそうだろう。二週間近く世俗を離れて仙人のような生活と鍛錬をおこなっていたのだから、最近起こった出来事等は全くわからない。

ちなみに流石に春休みの宿題は恭也はでていないので安心してゐる。テレビを見て

いた恭也の前にコトンと音をたてて湯飲みが置かれた。置いてくれたのはフィアッセだ。態々緑茶をいれてくれたらしい。ズズと音をたてて一口啜ると、お茶の香りと味が口の中に広がっていく。

「……うまい」

「そういつてもらえると嬉しいよ」

お茶を啜る恭也を、本当に嬉しそうに見るフィアッセとの間に沈黙が流れる。聞こえるのはテレビの音だけ。

別に嫌な沈黙ではない。恭也は元々自分から喋るようなタイプでもなく、どちらかというとよく話すフィアッセも今は恭也の姿を見て満足しているような状況なのだから沈黙となるのも仕方ないことだろう。

「そう言えばカーさんはまだ翠屋にいるのか？」

「あー桃子はね。明日は朝早起きしないとだめだからってさつき寝たよー」

「む、そうだったのか」

「桃子はりきってたよ。可愛い娘の入学式だものね。しかも美由希とレンの二人同時だもん」

「そう考えると、時間の流れは早いものだ」

なにやら爺臭いことをいう十八歳。

若いというのに酷く老成した精神と雰囲気を持つ恭也は、桃子や美由希達に酷く呆れられるときもある。

二人としては、いや高町家の皆の総意として若々しい趣味を持つて欲しいと願っているのだが、それが決して叶えられる事はない望みということ全員が薄々感づいているのかも知れない。

だが、恭也は本当に時が進むのは早いと思つた。

父である土郎が死に——美由希に剣を指導するようになったあの日が昨日のことのように思い出せる。自分にできるのか、という迷いは何時もあつた。

それでも——やるしかなかつた。

今の美由希を見て多少の満足感は覚えるが、まだ上への階段を一步ずつあがつている最中だ。

「フィアツセは……のどの調子は？」

「うん。お蔭様で大分よくなつたんだよ。調子がいいの、最近」

「時間があるときに、また聞かせて欲しいな。フィアツセの歌を」

「うん!!」

フィアツセが嬉しそうに頷く。彼女は歌を歌うのは好きだ。それ以上に恭也に聞いてもらえるのが——何よりも嬉しいからだ。

イギリスにある超名門音楽学校。クリステラソングスクールに以前は在籍していたが、少し喉を痛めてしまい今現在は親交深かった高町家でお世話になっている。

「といつても、ここから少し離れた場所で親友とのルームシェアで部屋を借りているのだが、この家で寝泊りすることも実は多い。」

何気なく壁にかかっている時計を見ると短針が十一を指す時間になっていた。

そろそろいい時間になってきている。飲みきった湯飲みをテーブルに置くと、フィアッセがお代わりはいる？と目で聞いてきていたので首を横に振る。

すでに言葉が必要としないほどに二人は通じ合っていた。

「フィアッセは今日はマンシヨンに戻るのか？」

「んー。私も準備するものがあるから一旦家にかえろうかなーと思ってるよ。明日は美由希の晴れ舞台だしね」

「なら送っていいんか？」

「大丈夫だよー。車で来ているから帰り道は心配しないでも大丈夫」

「そうだったか。珍しいな、車でくるなんて」

「あははー。暫く使ってなかったからね。明日のための試運転だよ」

二人は立ち上がると玄関に向かう。

玄関から車庫へと移動し、フィアッセが車に乗り込んだ。エンジン音がして、排気ガ

スのにおいが恭也の鼻にかかる。

「それじゃあ、恭也。また明日、ね？」

「ああ。気をつけてな」

窓を開けて別れの挨拶を告げフィアツセは車を発進させて夜の街へと消えていった。

恭也はそれを最後まで見送ると高町家に戻る。

リビングに向かう途中で、風呂場からでてきた美由希にばったりとでくわす。長い髪だがすでにドライヤーでしっかりと乾かしていた。

「あ、きよーちゃん。お帰りなさい。先にお風呂使わせてもらったけど良かった？」

「ああ。お前も早く休め。明日の朝の鍛錬は無しにするから身体を癒せよ」

「はーい。きよーちゃんも……ほどほどに、ね」

美由希は恭也を見て少しだけ辛そうな顔をする。

そして、そのまま二階の自分の部屋へと戻っていった。

恭也は飲んだ湯飲みを洗うと、二階の部屋へと一旦戻る。

必要ない荷物を部屋に置くと、小太刀と飛針。鋼糸を持ち部屋を出た。

既に皆が就寝している為だけ物音をたてないように高町家から外へと向かう。その際きつちり鍵をかけるのも忘れてはいない。

「さて、いくか」

気合を入れるため言葉に出し、恭也が走った。

家の明かりが煌々と煌く。すでにこの時間になると出くわす人間もほぼいない。

目的地は何時も恭也と美由希が鍛錬している場所——八束神社。

美由希には休息を取るようになっておきながら恭也は休む気など全くなかった。他人に厳しいが、自分にはもつと厳しい。それが高町恭也。

恭也の目指す先は何よりも遠く——未だ辿りつけていない世界だ。かつてかわした約束を守るために、恭也は今日も刀を振るう。

その全ては——水無月殺音との再会のために。

高町恭也。風芽丘学園三年を迎える、この年——運命が廻転。

時代の闇に蠢く化け物どもが——高町恭也と運命を共にする者達が——動き出す。

それは偶然ではなく、必然。

高く連なるビルの屋上。

そこに一人の少年がいた。月を見上げ、何を考えているか分からない、無機質な瞳で空を貫いている。

「今年は……面白い子に会えるかな。すぐに壊れない玩具に——僕と遊べる人間に」

古ぼけた屋敷。広大な敷地を誇る日本家屋。

その一室に二人の少女が座っていた。

「で、一体私に何の用なのかなー。天守の次女さんが」

「——貴女のことば聞いています。鬼頭家が次期当主候補の一人……鬼頭水面さん。その実力、かの黄金世代すらも凌駕するとも噂されていますよね」

「そりゃ、うわさが大きくなりすぎてるかなー。まあ、噂に名高き天守^{アツカミカエル}翔に知って貰えるなんて嬉しいわー」

「感情がこもっていませんよ？まあ、いいです。それよりも貴女——次期当主の座を確固たるものにしたくない？」

「うーん。悪いけどあんまり興味ないんだよねえ、それ。まあでも、なーにをかんがえてるのかなー？子供の過ぎたお遊びは身を滅ぼすよ？」

病院を感じさせる真っ白に壁を塗りつぶされた部屋。

死の匂いが充満する中、長身の女性と小柄な女性が椅子に座っていた。

「最近は一ナンチナンバーズ私どもの動きが活発化していませんか？」

「……そうだな。ナンバーズ達の手がたりないというのに、労働基準法で訴えたい気分だ」
「お前の容姿で訴えに言っても鼻で笑われるのがおちだぞ？まあ、それは置いておいて、
序列一桁台の伝承級が沈黙を保っているのがまだ救いか」

「伝承級か……序列六位の伝承墜たふさとしての詳細はまだ不明なのか？」

「情報がすくなくすぎるな、奴に関しては。まあ、互いに死なない程度でがんばるとするか。また会おう、チンク」

「お前も死ぬなよ、トーレ」

人里離れた森の中にある屋敷。

そこに幾つもの黒塗りの車が到着する。

趣味の悪い服装のやや小太り気味の中年の男性を囲うように黒服達が展開する。

「ここに本当にあいつらがおるんかいな？」

「はっ!!情報通りならばここで間違ひありません」

「この前雇った男はつかえんかったからな。今度はワシも本気や。北斗のメンバーならノエルでも相手にはならんやろう。まっとれや、忍の馬鹿たれが」

広大な森林地帯を凄まじい速度で走りぬける一人の男性と、それに付き従うように駆ける少女が一人。しきりに背後を気にする少女。

「もう、おとーさまってば!!あんだけ私には手をだすな!!って言ったくせに自分が喧嘩うってるじゃない!!」

「う、うるせえ!!仕方ないだろうが、あの場合は!?!」

「……おとーさまって悪ぶってるくせに以外と甘いよねー。幾ら一宿一飯の恩があるか

らってアンチナンバーズの二桁台に戦いを挑むってさ」

「別にあいつらのためじゃねーよ!!あの化け物が俺の寝るのを邪魔したからだ!!」
「にやふーん。これがツンデレってやつなのかなー」

そこは美しく、巨大な湖だった。

水面には月が映し出され、幻想的な光景を作り出す。

誰も近づかぬ、秘境。誰も近づかせぬ、永遠の地。

私と彼の約束の場所。

その湖の上で踊っていた。プラチナブロンドを靡かせて。月の祝福を受けるように女性が踊っていた。女性の足は不思議なことに水を弾くように沈まず、波紋を波立たせる。片方だけ開いた瞳が世界を見通す。世界を、未来を見通す魔眼の持ち主は静かに踊る。

「——時は動き出します」

タンタンタンとリズム良く。

「多くの魍魎魍魎が、青年と出会う。でも、それは全て青年の糧となる」

バサリとゆれた髪が乱れる。

「全ての存在は所詮。パーツに過ぎません。運命を形作る部品の一つ」

ピタリと動きを止め空を見上げ、両手を広げた。

「私と青年が再び出会うために——皆さん精々頑張ってくださいね？」

ゆっくりと開け放った右目は金色に輝き、静かに世界を見つめていた。

とらいあんぐるハート3

アナザーストーリー

御神と不破

開幕

第4話：変わり行く日常1

「そういえば恭ちゃん……師範代って鉄とか斬れるの？」

ある日普段のように恭也と美由希が実戦を想定した訓練をして、相変わらずあっさり
と美由希が敗北した時そう突然聞いてきたときがあつた。

恭ちゃんとよんだ瞬間、少し鋭い目つきで睨んだため慌てて師範代と言いなおした。
訓練中は師範代と呼ぶことを厳命しているからだ。

「……また唐突だな。何かそれっぽい小説でも読んだのか？」

「う……なんでわかっちゃうのかな」

「それくらい唐突だからだ。お前は読んだ小説にすぐに感化されるからな」

恭也が美由希から少しだけ離れて小太刀を納刀する。

再開するのかと美由希も戦闘態勢になろうとしたところで、恭也は首を振った。

「鉄を斬る技術。斬鉄と言ったところか。別に細い鉄程度ならどうにでもできるぞ。俺
でもお前でもな」

「え、そうなの？」

「それほど太くない、という条件はつくが。ある程度剣を学んだ者なら恐らくできるだろう」

恭也の前には巨大な木があった。その幹の太さはゆうに一メートルを越えているだろう。それほど太く大きな樹木であった。

美由希は恭也がなにをするのか不思議に思っていたが、僅かな間合いを取ってその樹木の前で抜刀術の体勢を取る。まさか——と思う間もなく。

「……シツ」

光が奔った。

輝きを残す、光が煌く。その閃光を美由希は刀が残した軌跡だとは認識できなかつた。それほどに速く、人の理解できる域を超越していたのだから。何時抜いたのかもわからぬほどの音速で抜刀された小太刀が目目の前の樹木を斬りつけた。が——。

「まあ、これだけ太いとさすがにこうなる」

恭也が小太刀を鞘におさめ、美由希へと振り返る。

美由希はまじまじと恭也が斬りつけた樹木を見るが特に変化はない。てつきり真つ二つにでもするのかとおもっていただけにちよつとだけがつかりした。

「小説を読むのはいいがあまり感化されるなよ?」

「はーい」

「では、少しは休めたか？再開するぞ。今から一分の間時間をやる。その間に罨を仕掛けるなり、身を隠すなりしろ」

「……」

返事もなく、美由希は即座にその場から姿を消す。

一分という時間をどれだけ有効に使うか考えながら……森の中を走り去る。

恭也と美由希の力量差はまともによつたら絶望的。例えば、罨や奇襲を仕掛けたとしてもどうにもならないほどだ。だからこそ美由希は考える。どうすれば恭也に一泡ふかせれるのか。

「……」

両腕を組んで目を瞑り、頭の中で秒数をカウントをする。

風が吹き、木々の葉を揺らす。ざわざわという音が恭也の耳を打つ。

そして――。

恭也の背後にあつた木が……ずれた。

ズズズという不気味な音をたてて、ずれていく。ずれていく。ずれていく。ずれていく。斜めに斬りつけられた剣閃の跡が、一分近くたった今になってようやく樹木に斬られたことを思い出させたかのように。地響きを立てて半ばから斬られた木が大地へと倒れ伏した。その斬り口のなんと滑らかなことか。或いは戻し斬りなる技術とはこう

いうものを言うのかもしれない。即ちこれは神業の一種だ。

「——まだお前には見えなかったか、美由希」

少しだけ残念そうに呟いた恭也の独り言は——風の音とともに消えていった。



高町恭也の朝は早い。

お年寄りも真つ青な時間帯に目を覚ます。

目覚まし時計をかけてはいるが、毎回なる前に目を覚まし、アラームを前もって止めるのが日課といつてもいい。合宿の疲れはあつたがそれでも恭也は何時も通りに睡眠から目覚め、布団から起き上がり身体を軽くほぐす。

「懐かしい、夢か」

やけに鮮明に見た夢だった。

あれは何時ごろだったろうか。まだ一年ほどしかたっていないくらいに昔だったかもしれない。あの時放つたのはただの抜刀による斬撃だ。御神流の基本技術。斬を極めた者は鉄さえも切り裂く。そう言わしめるほどの境地に至れる。確かにそうだ。記憶にある御神の剣士達もその域に達していた者も幾人かはいた。

今の美由希ならば鉄をも両断できるだろう。御神流の剣士としての腕前はそれほどまでに成長している。

だが——恭也は鋼すらも断つ。

今の恭也は基本であるはずのただの斬撃が、すでに必殺の域にまで達していた。

横目で見た時計は朝四時を示している。動きやすい服装に着替え、昨日の夜と同じく音をたてずに高町家から外へと出る。時間が朝早いだけにまだ日の出はまだのようだ。辺りは薄暗い。

何度が深呼吸をくりかえし、ランニングを開始した。普通の人が見たら驚くほどの速度のランニングではあるが。途中で何人かではあるが、すれ違ったので挨拶をしておく。何時もこの時間帯で会う人は決まっていて、特に親しいというわけではないが顔見知りか何人かいる。

朝靄がうかぶ空気を裂きながら走る。

やがて長く続く階段へとたどり着き、それまでと同じ速度で階段を駆け上がる。

止まることなく終わりまで駆け抜けると、前に広がるのは赤い鳥居とその先の神社が見えた。八束神社——この後方に広がる広大な森林が恭也達の訓練場所である。

実戦は常に万全の状態で行けるわけではない。それを想定してどのような状況でも全力をだせれるように、恭也達の鍛錬場所は敢えて障害物の多い森の中を選んでいた。

普段から使っている鍛錬の場所。そこは長年の鍛錬の結果、多少は動きやすいようひらけた空間となっている。その丁度中央付近で足を止めた恭也は小太刀を抜こうともせず、足を肩幅程度に開き手をだらりと下げた状態となる。所謂無形の位だ。

何分そうしていただろう。

ただ立っているだけの恭也の額から汗がしたたり落ちる。

そして、抜刀。何も無い空間を断ち切った。

それと同時に、跳ねたように後ろへと跳躍。地面に足をつけると横へ今度は転がる。即座に体勢を立て直し、牽制するように一振り。続いて、もう一振りを斬り上げようとした瞬間、刀を振るのをとめ、半身になって迫ってきた何かをかわす。右手の小太刀で頭上から落ちてきた何かを弾く。弾くと同時に左の小太刀で見えない敵に対して斬り付けた。

もし、この光景を見ている者が居たならば恭也が戦っている空想の敵を肉眼で確認できただろう。それほどにイメージで作られた敵と戦う恭也の姿は鬼気迫るものを感じさせるのだから。例えるならば究極に近いリアルシャドー。戦うべき相手のできるごと、できないことを確固たるイメージとして固め、そのイメージと戦う。

今戦っているイメージは——五年前に敗北を喫した女性。アンチナンバーズが××。以前の恭也ならば相手にもならなかった強敵。そのはずだったが——。

森を縦横無尽に駆け回る恭也は、木々を盾とし、障害物を利用し、三次元的な動きで相手を翻弄する。木の枝を蹴りつけ、空から強襲。相手の背後へと回りこみ、そこでさらに加速。見えないはずの相手を断ち切った。そしてイメージした敵は一瞬で霧散。残されたのは小太刀を振り切ったままの体勢の恭也だけであった。

「……駄目だな、この程度では」

深いため息。イメージしていたあの女性との戦いは確かに恭也の勝利で終わった。

だが、所詮はイメージはイメージ。実際に戦ってみなければ勝敗がどうなるかわからない。ましてや、恭也の中のあの女性の強さは——五年前のお遊びのように戦っていた力量そのままなのだから。戦い方も動きもスピードも、その全てがあああの時の女性の見せたものを想定している。

あの底知れぬ女性の力が一体どれほどのものなのか……今の自分が負けるとは思っていない。しかし、勝てるとも思っていない。それほどまでにあの女性は強かったのだから。

なんといつてもあの女性はアンチナンバーズの一桁台。

伝承級と称されるいかれにいかれた化け物どもの頂点に立つ生物。水無月殺音に匹敵……或いは凌駕するという存在なのだ。

ナンバーズと呼ばれる組織がある。

対化け物専門の世界最強を名乗ることを許された戦闘集団。設立時期は不明。随分と昔から化け物を狩る組織として存在したという。

多くの戦闘要員を擁しているが、その中でも特に優れた十二人は数字持ちと呼ばれる、夜の一族から恐れられている。真つ向から戦いを挑むことは死神に喧嘩を売るような

ものだと子守唄のように聞かされているという。

HGS能力者によって構成されていることが多い。特にナンバーIII。神速のドライと呼ばれる女性は圧倒的な殺戮能力を持ち、ナンバーズ設立史上最高のアンチナンバーズ撃墜数を誇る。続いては爆殺姫バクサツキの通り名を持つフユンフ。この二人を筆頭として今のナンバーズは歴史上最強戦力と噂されている。それぞれの数字を与えられた者達は世界各国を走り回りアンチナンバーズと呼ばれる化け物達を処理してまわっているという。

そしてナンバーズと対になる組織としてアンチナンバーズと呼ばれる集団がある。それはナンバーズによって定められた処理対象。そのほとんどが夜の一族ではあるが、人間でも人類社会に多くの被害をもたらした者なら対象に加えられる。あくまで人類社会に対する危険度が優先されるため序列が一位に近ければ強いということではない。ただし、アンチナンバーズの序列一位から九位までは別格と考えられている。十位の二桁以降はナンバーズによって定められるが、九位までは基本的に固定なのだ。一位から九位までは寿命で死んだ場合はナンバーの繰り上がりが行われる。もしくは寿命を感じ、本人の意思によるナンバーの継承を行わない限り変化は起きない。

例外が、一対一の戦いで撃破すること。力によるナンバーの強奪。そうすれば例えアンチナンバーズの序列百位の者だろうがアンチナンバーズの五位を倒せば一気にそこ

までナンバーが繰り上がる。そのような奇跡は起きたことはないのだが。そう、それはまさに奇跡としか言いようがない出来事だ。それほどまでに上位九人は規格外の化物達なのだ。アンチナンバーズの九位までは圧倒的にして絶対的。超絶的な戦闘力を誇り、それゆえに一桁台として畏怖されこう呼ばれる。歴史にさえも名を残す化け物達。即ち伝承級、の怪物達と。

いや、一度だけそんな奇跡が起きたことがある。アンチナンバーズの序列六位を単独にて、撃破せしめたものがある。故にその者はこう呼ばれた。伝説の怪物を墜としたもの。即ち——伝承墜とし。

それが一体誰なのか、情報は開示されていない。というか、ナンバーズでも把握しきれていないというほうが正しい。ただ、結果だけが届けられた。一人の女性によって。当時のアンチナンバーズ六位が敗れ去ったということを。それを伝えたのが——。

「未来を見通す天なる眼を持つ者——アンチナンバーズが序列二位。六百年以上の時を生きる最古参の魔人」

そう……恭也の膝を砕いた張本人。

名乗った本人の談を信じるならば——現在確認されている生き続けている最古の夜の一族。夜の一族の世界にも、人の社会にも不干渉を保つ人外の中の人外。その人外が圧倒的な力を持つて唯一手をだしてきたことがあった。

それが、アンチナンバーズ序列一位。劍神が六百年もの昔亡くなり、繰り上がるはずだった彼女は——その席に自分が座ろうとはしなかった。否、決して誰も座らせようとはしなかった。第一席を狙っていたあらゆる存在を殺戮しつくしてまで。

それ以降、第一席には誰一人として選ばれていない。決して誰も座ることのない永久欠番。触れてはならぬ禁忌。戦ってはならぬ同族殺しの化け物。

それが、未来を見通す天なる眼を持つ者——天眼。

誰もが恐れ、関わり合いになることを避けるであろう化け物だが……。

二振りの小太刀が迸る銀閃を描く。

幾度斬ったのか視認さえも許さない雷の如き速度。恭也の周囲に舞い降りてきた木の葉が劍の結界に触れた瞬間切り刻まれ、微塵となって消えていく。

「——借りは必ず返す」



本日は四月六日。

風芽丘学園と海鳴中央の入学式であり、二年と三年にとっては始業式ともなる日だ。

美由希とレンはそれぞれの学校の一年生として入学することとなる。対して恭也は風芽丘学園の三年。高町家の三女——城島晶は海鳴中央の二年になった。

流石にこの記念日にぎりぎりまで鍛錬をするわけにもいかないのです、できるだけ早めに鍛錬をきりあげ高町家へと恭也は帰った。

玄関の引き戸を開けると、恭也の鼻をくすぐるのは味噌汁の良い香りだ。

その匂いから今日の朝食を作っているのは桃子か晶のどちらかだと予想がたった。

基本的に高町家の食事当番は四人でローテーションを組まれている。桃子、フィアツセ、レン、晶の四人だ。どうしても料理当番が都合がつかないときに恭也。そして恭也

も駄目な時はなのは。ただし、なのははまだ小学二年生。簡単なものしかまだできない。

なのはも駄目だったらもはや最終手段——外食である。一人欠けている気もするが、そう高町家の法律で決められているのだ。

料理の傾向として桃子が料理は基本的に和洋中なんでもオールマイティーにいける。どれもこれもがプロレベル。というか、本当にプロなのだが。

対してフィアッセは洋食専門。レンは見かけどおり中華。晶は和食やその他色々。この三人も十分にお金を取れる腕をしているといっても過言ではない。だから、味噌汁の匂いをかげば作っているのがどちらかに絞れるのだ。

リビングに足を踏み入れるとキッチンで忙しそうに動き回っていたのは、青みがかつたショートカットヘア。ボーイッシュな雰囲気を纏った少女であった。少女は味噌汁をお玉で掬い、小皿にうつし味見をしている。

「よし!! 良い出来!!」

一人でガッツポーズを取った少女が、テーブルに焼き魚を乗せた食器を持ち運ぼうとして——恭也にじっと見られていたのに気づいた。

「し、師匠!!? いたんですかー!?!」

「ああ。今帰ってきたところだ」

「い、いるならいるっていつてくさいよー。滅茶苦茶びっくりしたじゃないですかー俺」

「いや、なに。晶、お前は楽しそうに料理を作るなど思っていたところだ」
「うう……変なところみられちゃった……恥ずかしい」

晶と呼ばれた少女は若干顔を赤くしてそっぽをむく。

セーラー服の上からエプロンを着ているが、それが不思議と似合っている。スカートから見える素足が健康的な色気を醸し出している、が——髪が短いうえに私服も男っぽいものも多く、一人称が俺。そのためセーラー服を着ていない限りは七割の人が少年と間違えてしまう。最も本人は間違えられることに慣れているため、そんなに気にしていないという。

「かーさんはまさかまだ寝ているのか?」

時間はまだ六時三十分なので寝ていたとしても十分に間に合う時間なのだろうが、まさかあの桃子がこの時間におきていないことがあるとは思えなかった。

しかし、朝食の準備もしていないので他にどこにいるのか訝しがる。

「あー、桃子さんは美由希ちゃんとレンの制服の着替えをみてます!!」

「ああ、そうか。今までとは違う制服になったしな」

「美由希ちゃんには風芽丘の制服にあいそうですね。レンは微妙でしょうけど」

「……レンとあまり喧嘩はするなよ。なのはに怒られるぞ?」

「う……気、気をつけます」

テレビをつけてソファーに座ろうとした恭也だったが、まだ一人起きてきていない家族がいるのに気づく。

「なのははまだ起きてきていないか?」

「あー。そうですね。多分まだ寝てますよー」

「では、俺が起こしてこよう」

「お願いしても大丈夫ですか? お願いします、師匠!!」

階段を昇ると幾つもの部屋がある。レンと晶、恭也と美由希。そしてなのはの部屋。

廊下を進み角部屋となる部屋の前までいくとドアを軽く叩く。ちなみにドアには可愛らしい字で、なのはとかかれてあるドアプレートがかけられていた。

「なのは。もう朝だぞ。起きているか?」

返ってくるのは静寂。どうやらまだ起きていないのはは現実のようだ。

再度ドアを叩く。今度は先程叩いたよりも強く。しかし、反応はない。

「入るぞ、なのは」

一応断つてから扉をあける。なのはの部屋は小学生の部屋とは思えない空間だった。机はしっかりと片付けられており、デジカメやパソコンなどの機器がおかれている。

まだ小学二年生なのにこれらを完璧に使いこなすのだから恭也からしてみれば実に大したものだと感心せざるを得ない。今でこそようやくパソコンを使えるようになってはきたが、幼いころの自分はなのはくらしいの年頃なにをやっていただろうと昔を思い馳せる。

——剣の修行と士郎につれられて全国を回っていた記憶しかなかった。

ろくでもない記憶を意識的に片隅においやる。ふと見ると机の上やベッドの枕元には多くの人形が飾ってあった。その大部分は恭也がプレゼントとして送ったものであり、しつかり飾ってあるのをみると喜びを感じてしまう。まさに兄冥利につきるとはこのことだ。

「なのは。そろそろ起きる時間だぞ?」

「……すう……すう……」

返ってくるのは可愛らしい寢息。小動物のようにまるまってベッドで寝ているのはとよばれた幼女。今年私立聖祥大学付属小学校の二年生となる、高町家の末っ子であり、真正銘血の繋がりがあがる恭也の妹だ。

なのはは朝に強い恭也や桃子とは異なり、非常に朝に弱い。かわりにどんな時でもあつという間に眠れるというある意味羨ましい特技を持つ。声をかけてもまったく起きる様子もないなのはに嘆息しつつ、肩に手をかけて軽く揺り動かす。

「遅刻するぞ。起きろなのは」

「……………うにゅ……………」

ようやく目をあけるのはだったが、焦点があつていない。ゆつくりとベッドから上半身だけ起き上がって、まだまだ寝ぼけ眼で恭也を見る。しばらくぼーとしていたのはだったが、起こしにきたのが恭也だと気づいた瞬間――。

「おはよう!! おにーちゃん!!」

にぱつという向日葵のような見るものを暖かくさせる笑顔を向けてきた。美人や可愛いといった女性は多く知っているが、そういった女性達とはまた別の魅力がなのはあった。子供ゆえの純粹さ。子供ゆえの無邪気さ。なのはの笑顔を見ると安心する。恭也はなのはと一緒にいる時は数少ない心が安らく時であった。

「ああ。お早う。今日は起きるのが早いな?」

「う……………だつておにーちゃんが起こしてくれたから……………」

恥ずかしそうに俯くなのは。

その手の趣味がある人ならばお持ち帰りをしてもおかしくはない可愛らしさ満点だ。

「昨日は遅くなつてすまなかつた。本当ならもう少しゆつくり帰つてくるはずだったんだが……………」

「ううん。私も起きてなくてごめんなさい……………」

今度はシユンとしたように笑顔を曇らせるのは。昨日恭也が帰ってきた時間は夜遅い。まだ幼いのが限界ぎりぎりまで起きて恭也をまっていたのだから、寝てしまったとしても仕方ない。むしろそこまで頑張つて起きていたのだから謝られることなど少しもない。ぽんつと頭に手を置くと寝癖になつている髪をなおすようにさする。「気にするな。それより早く顔を洗つてくるといい。バスの時間に遅れるぞ?」

「……あ、そうだね」

なのははベッドからおりるとちよこちよこ効果音がなるような歩き方で部屋から出て行く。その一歩手前で立ち止まると、恭也へと振り向く。

「起こしてくれて有難うね、おにーちゃん!!」

語尾にハートマークが着いていそうな嬉しそうな響きを残してなのはが一階へとおりていった。殆どのクラスメイトが妹とはうまく行っていないという話を時々耳に挟むが、高町家ではそのようなことはないようで正直胸を撫で下ろす。

まだ幼いということもあるだろう。だが、なのはが成長して年頃になったらどうなるのだろうか。反抗するなのをイメージして気が重くなる。どうやら相当なダメージを負う事は間違いないようだ。どうか、なのははずっとあのままでありませうと珍しく神頼みをした恭也も一階のリビングへと戻る。

「あ、きよーちゃん。おはよー」

「お師匠。おはようございます」

「お、流石に今日ばかりは帰ってくるの早かったわねえ」

なのはを起こしに行っている間にリビングには美由希とレンと桃子が戻ってきていた。美由希は風芽丘学園の制服。胸元の学年色を示す黄色のリボンも輝いている。

対してレンは海鳴中央の制服だ。二人ともおろしたての制服のため皺もなく、初々しさが身体全体からあふれ出ている。そんな二人を見ていた恭也だったが、桃子が突然近づいてきて——美由希やレンに聞こえないような小さな声で囁く。

「ねえ、恭也？　ちよつとは何か言いなさいよ？」

「……何か、とは？」

そう聞き返した恭也を、桃子は——うわー何言ってるのこの子——というように駄目な子を見る目で見返してくる。高町母は、はあとため息をつきながら首を振った。

「ここまで朴念仁なのも国宝級ね……新しい制服きているんだから褒めてあげなさいってことよ」

「……そういうことか」

「そうそう。そういうことよ」

桃子の台詞の意味がわかった恭也が頷くが、桃子は半ば投げやりにそう返事をする。成る程。桃子の言葉を理解してみれば、簡単なことだった。美由希もレンもどこかそわ

そわとして落ち着きがない。普段では全くありえない事だ。視線をあちらこちらに向けているように見えるが、ちらちらと恭也を窺っているのは明らか。つまり、二人は恭也の感想を聞きたいのだろう。それによく気づいた恭也が遠慮がちではあるが二人の制服姿を見る。あまりじろじろみるのも悪いかと思つたからだ。

つい先日までは二人とも別の制服をきていたのだから、確かに新鮮な姿だ。しかし、美麗字句を並び立てるのも恭也には似合わない。というかそんなことができたら朴念仁などと決して呼ばれないだろう。

「二人とも、まあ、なんだ……よく似合っている」

結局恭也が告げたのはそれだけであつた。

桃子はそんな恭也の感想に嘆息するもの——まあ、いいかと思うしかなかった。

「えへへ……」

「有難うございます。お師匠」

美由希とレンは素直に恭也の賛辞に照れていた。

二人とも長い付き合いなので、今のが恭也の最大限の褒め言葉だということを知っているからだ。最悪何も言われなにか、良くても馬子にも衣装——程度のことを予想していただけに意外すぎる恭也の台詞に照れを隠し切れない。

この程度のことをいうのにも恥ずかしかつたのか恭也は無言で朝食が並べられてい

るテーブルに座り新聞を広げる。そんな恭也の姿に三人は顔を見合わせて苦笑した。

そうこうするうちになのはも顔を洗ってきたのだろう、起こしたばかりのときのような寝ぼけ眼ではなく、しっかりと目を覚ました様子でリビングにやってくる。これで一応高町家にいる全員が揃ったことになる。普段だったらフィアッセもいるが、今日はマシヨンの方に戻っているのでもまだきていないようだ。

全員が椅子に座り、食事の前の挨拶を済ませ、朝食に舌鼓をうつ。ゆつくりと味わいたいところだが時間的にもそういうわけにもいかない。手早く皆が食事を終えると桃子が食器を洗い始めた。

「すみません。後はお願いしてもいいですか？」

「いいのいいの。桃子さんに任せておきなさい」

晶が申し訳なさそうに謝っている。時間も迫ってきているだけに洗い物までする時間が厳しかったのだ。それに桃子は笑いながら胸をドンと叩いて答えた。普段なら桃子も店長を務める翠屋にいかなければならないが、今日はお休みを貰っていた。翠屋は人気の洋風喫茶ということもあり休みを取ること自体なかなか厳しいのだが、今回ばかりは二人の愛娘の入学式ということもあるためアシスタントコックの松尾さんの許可をしつかり取っている。

恭也も部屋に戻り風芽丘学園の制服に着替えると一階へ戻る。

玄関にはすでに美由希とレンと晶、そしてなのはの姿が見えた。そこへエプロンで手をふきながら桃子もやってくる。

「じゃあ、また後でね。いってらっしやい」

「「「いってきまーす」」」

「ああ。行ってくる」

桃子に見送られ恭也達は学校へと向かう。風芽丘学園と私立海鳴中央は同じ敷地内にある学校だ。少子化が進む昨今ではあるが、部活動では運動部が優秀で力を入れていくこともあり多くの学生が集まっている。巨大な土地面積と生徒数をほこるマンモス学校ということで中々にその学校名は通っている。

恭也達五人連れ添って歩いている姿を知らない人が見たらどう思うだろうか。

仲がいい兄弟と思う人が多いかもしれない。年齢の離れた友達同士と思うかもしれない。もちろんそれは制服で登校しているからであり——私服であったらまた意見も変わってくるだろう。間違いなく恭也となのはは親子。レンと晶は下手をしたら……年若いカップルに見られるかもしれない。

なのはは皆で登校できるのが嬉しいのか上機嫌で歩いている。普段は誰か一人とバス停までしか一緒に歩かないので、これだけ大人数でいられるのは嬉しいのだろう。通りがかる近所の人達に挨拶しながら数分。私立聖祥大学付属に通う小学生達が集まって

いるバス停に到着した。

「あ、なのは。おはようー」

「おはよーアリサちゃん」

なのはが仲の良い友達——というの少し年齢が離れているようにも思えるが——

——見かけ駆け寄る。金の髪が美しい、元気浚刺そうな少女だ。

少女の名前はアリサ・ローウエル。名前の通り日本人ではない。そして、本当の両親の顔を知らないという。もっと幼い時から孤児院で過ごしていたが、最近になって養子として迎えられたらしい。普通ならば捻くれたりするのだろうが、そんな翳りなど一切持たない少女である。

歳は丁度十。なのはよりも少しだけ年上ではあるが、姉妹のように仲がいい。以前に——とある事件を経て高町家と交流を持つようになり、それが縁でなのはとも仲が良くなったのだ。

仲良く二人で話をしていると、時間になったのか毎朝迎えに来る聖祥大学付属小学校専属のバスが到着した。なのはとアリサ。その他の待つていた子供達もバスに乗り出発。その間際窓ガラス越しにアリサが恭也に向かってウインクをしてくる。それに軽く手を挙げて答える恭也。それだけでアリサは満面の笑顔を残していった。

「アリサちゃんも相変わらずですね」

「おししよーって小さい女の子にもてますよねー」

「そうそう。恭ちゃんってなんか変なフェロモンでもだしてるんじゃない」

晶とレンに重なるように発言した美由希だったが、言い終わるよりも早く恭也の右手がぶれた。それに気づいた美由希が迫ってくる右手を防ごうとして——その右手は蟹気楼のように実体をなくし、美由希の額に「デコピン」が直撃する。

脳を揺らすかのような衝撃がはしり、美由希はふらふらと後ろに倒れそうになるが、電信柱が背についたおかげでそれは阻止することが出来た。

「あ、あれ……？ 何やってるの美由希ちゃん？」

「おししよーのそれって何時も思うんですけど凄すぎますよー」

晶は突然苦しみだした美由希を呆然と見ている。何が起きたのか全く分かっていないようだ。レンは美由希がなにをされたのかわかったらしく、額を痛そうに押さえる。美由希がされたのを見て自分が「デコピン」を受けた場合のことを想像してしまったのだろう。

「二人とも早く行かないと遅刻するぞ？」

「あ、そうですね」

「流石に今日遅刻したら洒落になりませんしねー」

苦しんでいる美由希を置いて三人は先へ行ってしまふ。それを見た美由希が額を片

手で押さえながら追いかけてきた。何時も喰らっているせいで耐性ができたのだろうか、普段段だったらもう少し長い間苦しんでいたはずなのだが。

「デコピン一発にも徹を込められる師範代を褒めるべきか、防ぐことができない自分の未熟さを戒めるべきか……」

涙目になってそうヒリヒリと痛む額を気にする美由希だったが――。

「徹だけだと思っただか？」

「え？ 徹……じゃない、の？」

「いや、今のお前にしては上出来だ」

「え、ええー？」

いまいち納得できない。そんな様子の美由希だったが、こういう意味深な発言をした時は追求しても話してはくれないことを経験上知っているので大人しく諦める。そして彼女は改めて考える。意味もなく恭也があんなことを聞くはずがない。聞くはずが……な、ないかもしれない。

不安になる美由希だったが、先程の恭也のデコピンを脳裏に浮かべる。確かに受けた一撃は徹のこもったデコピンだった。衝撃を完璧に内側へと伝える技術。最近になってようやく使いこなせるようになったのだから間違いようがない。デコピン一発でもわかる兄の凄まじい基本の錬度。

他に何かあるのか思い出そうとした美由希だったが——思い至る。恭也の右手の動きは速かったが、防げないほどではなかったのではないか。かなり手を抜いていたのだろう。美由希でも防ごうと防御をすることができたのだから。

問題はその後だ。恭也の右手を押さええたと思つた瞬間、そこが最大の違和感だ。自分の防御を通過してデコピンを叩き込まれた。確実に防げたはずなのに。幻を見せられたかのように、抜けてきた。

——わざと右手の動きを遅くした？ 私が反応できるように？
恐らくそれは間違いない。

何故なら普段の恭也だったならば気がついたときにはすでに額に打ち込まれているのだから。だというのに今回は視認して、なおかつ防ぐ時間もあつた。そして……防御をすり抜けた。それを見せたかつたのだろう。気づいて欲しかつたのだろう。今のデコピン一つに込められた、技術に。

だが——。
口元を面白げに歪めていた恭也をちらりと横目で見て……ただたんに面白そうだから打つたんじやないかと不安になる美由希だつた。詳しい追求は今は無理でも鍛錬の時にでも聞こうととりあえず忘れ、恭也に追いつき、並んで歩き出す。

四人が幾分かゆつくり歩きながら学校へと向かう。その途中多くの学生もその道へ

と合流してきた。千人を軽く超える規模の学校のため、通学路となる道は学生で一杯だ。

その中には多くの新入生と思わしき若い少年少女が混じっている。ピカピカに光るおろしたての制服に、希望を胸に膨らませ学校へと向かっているところだ。

随分とゆつくりと来た割には時間には余裕が見て取れた。校舎の前に、学年ごとに貼られているクラス分けを見てみると……恭也は風芽丘学園三年G組であった。

他に見知った知り合いがいなかったか順番に見ていくが——発見したのは赤星勇吾と月村忍。恭也の三人しかいない友達のうち二人までが同じクラスになったことに胸を撫で下ろしたい気分だった。神は恭也を見捨てなかつたのだ。

クラス分け程度で大きな話だが、恭也にとつては死活問題だ。恭也は授業のほぼ半分近くを睡眠に費やすことも少なくない。となつたら問題はノートだ。授業態度はもはやどうしようもないが、テストでそこその点数さえとれば問題な……くもないが、補習は免れる。

真面目な赤星と一緒になればノートの心配はない。良く考えたら月村忍は恭也以上に授業中寝ているのだからあまり期待できなかつた。結局は知り合い二人がクラスメイトになれたのが嬉しかつただけだが。

「それじゃあ、お師匠。また後ですー」

「また始業式終わったら一緒に帰りましょうね!! 師匠!!」

「ああ。二人とも入学式から喧嘩はするなよ?」

私立海鳴中央のレンと晶は校舎が違うので恭也達と別れ、別の校舎へと向かっていく。美由希は自分に挨拶をされなかったことを少し寂しく思ったが、何時ものことなのですぐさま立ち直ると恭也と一緒に風芽丘学園の校舎に入り、上履きに履き替えた。

「一年の教室は三階にある。クラスは何だ?」

「えーと。Aクラスだったかな」

「それならば、その階段を三階まで上がって一番手前の教室のはずだ」

「有難うね、きよーちゃん」

「道に迷うなよ?」

「……階段上がるだけなんだから迷いようがないと思うよ」

「お前ならやりかねんしな。剣を握っている時以外のお前の行動はあまり信用できん」

「……うう。あまり反論できないのが悔しいよ」

口を尖らせて上目使いで睨んでくる美由希。

その子供っぽい様子に少しだけ苦笑する。

「また後でな」

「……え? う、うん。また後でね、きよーちゃん」

恭也と別れた美由希は階段をあがっていく。

同じようにのぼっていく生徒もいれば降りてくる生徒もいる。

そんな日常空間のなか、突如としてそれは舞い降りた。ピシッと空気が凍ったような非日常が産声を上げる。奇妙な軋み音をたてながら、一瞬で周囲の温度が下がっていく。その冷気を発するモノが階段をおりてくる。反射的に身構えてしまう美由希。その場から逃げ出したくなる負のオーラがざわざわと揺らめいている。

三階へと続く階段の踊り場から姿を現したのはただの少年であった。いや、ただのとうには語弊があるだろう。百七十を少しこえたくらい的身長。これは問題ない。問題があるとすれば容姿だ。これほど禍々しい気配を発する人物の癖に——そこらのアイドル顔負けの美形。

階段をのぼっていく美由希とおりてくる少年。その間の空気が異常なほどに壊れていった。少年は美由希のことなど眼中に様子がさらなる違和感を加速させる。身体を反射的に抱きしめたくなるような寒気。少年の姿が——どう見ても人間なのに、どう見ても人間にはみえない。

ただ歩いていただけだというのに——その背後には言葉には出来ないおぞましい何かか渦巻いて見えた。不吉な気配を撒き散らしながら、少年は美由希の前で階段をおりるのをやめ……。

「やあ、キミは新入生かい？」

朗らかに話しかけてきた。

あまりに急な問い掛けに返事がつまる。そして何とか頷くことで是とした。

「ああ。胸元のリボンの色で学年の色が分かっているからね？　だからすぐにわかったのさ。それだけのことなんだからそう警戒しないでほしいんだけどね」

「……」

にこにこ邪気などいっさいない微笑み。まるで幼児のようなその笑顔をみて、普通人ならば警戒心を解かれ、魅了されたかもしれない。だが、美由希は全く駄目だった。おかしいのだ、この少年は。頭のとっぺんからつま先まで——その全てが、何かがおかしい。

「うーん。困ったなあ。初対面でここまで警戒されたのは、初めてかもしれないね」

本当に困ったように頬をかく少年。そんなとこまで絵になっているのが美形故だろうか。何も知らない初心な娘ならばこの少年に少しでも囁かれたら恋に落ちてしまうかもしれない。美由希に限ってはそんなことはないが——だって、こんなにも異質な人間に、どうやって好意を抱けというのか。

「あー。自己紹介がまだだったね、失礼。僕の名前は——太郎。山田太郎というんだ。風芽丘学園の二年生になったばかりの若輩者だよ」

「……偽名？」

「いやー酷いなー。まー、でも皆そんな反応するけどね。あはははー」

あまりにあまりすぎる名前の少年……山田太郎は美由希の返答に笑って返した。

苗字と名前が普通すぎるゆえに突っ込まれることには慣れているのだろう。

「皆同じ反応をするから参っちゃうよ。その気持ちもわからないでもないから怒るに怒れないしさー。僕だってもし、僕以外の誰かが山田太郎とか名乗ってきたら間違いない本名かどうか疑うしね」

「……」

「おっと。時間が迫ってきたようだね。できればキミの名前を知りたかったけど今回は諦めるよ。この学園内にいればどうせまた会うことになるしね」

「……失礼します」

無礼だとは思った。たとえどんな相手だろうと、先に名前を名乗ってきたのだ。それに名前も名乗らず去ろうとしている。礼に無礼をもって返している。でも、どうしてもこの山田太郎に必要な以上に近づきたくはなかった。

確かに太郎の言うとおり時間はもう残り少ない。これ以上ここで時間を使っては遅刻になってしまう。初日から遅れていくのも問題だろう。そんな美由希が太郎の横を通り抜け三階へとあがっていく。太郎は逆に二階へと降っていくが――。

「また会おうね——高町美由希さん？」

「……っ!？」

名前を呼ばれ振り向くもすでにそこには太郎は居なかった。先程までそこにいたというのに。すぐそこで声が聞こえたというのに。薄気味悪い得体の知れない少年——山田太郎はまるで最初から存在しなかったかのように姿を消していた。

幽霊とでも話していたかのような不気味さを感じつつ、美由希は自分の教室へと足を進めた。どこからか感じる自分への視線を浴びながら……。

一方姿を消した山田太郎は——。

「いやはやー。素晴らしいなあ」

何時の間に移動したのだろうか。先ほどまでは確かに美由希と話していたはずの山田太郎は、屋上に移動していた。墜落を防ぐための屋上のフェンスに手をかけながら、中庭を挟んだ向こう側の校舎の三階の廊下を歩く美由希の姿をとらえている。

「まさかあれほどの逸材だったとはねえ。これは一目ぼれというものになるのかな？」
くすくすと嬉しそうに太郎は笑みを絶やさない。

先ほどクラス発表の紙が貼られていた校舎前で遠くから美由希を見てしまった時から、これまで出会って来た女性たちがまるで紙人形のように薄っぺらにしかおもえない衝撃を受けた。太郎はずっと探していた。太郎はずっと求めていた。太郎はずっと欲

していた。

——自分と対等に渡り合える雌獅子を。

「ようやく、出会えた。逃がさないよ。高町美由希」

その歪んだ微笑みは——決して恋心などではなく、ただただ己の生涯の宿敵を見つけたことに対するまがった歓喜しかなかった。



同時刻。日本から遙かに離れた東欧の地にて。

そこは都会とは言い難い街から、大きく広がる森を貫いて、さらに数時間はかかる辺境といつてもいいだろう。誰も近寄らない、道に迷った人間がひよつこりと現れる程度でしかない草原だった。普段だったらその見渡す限り埋め尽くす草原に息を呑んだだろう。だが、今はその草原が……地獄になっていた。

ぐちゃり。

肉が潰される音が周囲に響く。

あたり一面に広がっている草原は今では赤く染まっていた。どろりと濃厚な血に塗れている。その原因を作っているのは——化け物。そうとしか言いようがなかった。

体長は三メートルほどだろうか。巨大な筋肉の塊としか言いようのない。二足歩行で立つてはいるが、人間でいう顔のある部分が、犬のような形をしていて、鋭い牙がごつそりと伸びている。毛がはえていない巨大な化け物。まさしくその表現が相応しい怪物であった。普通の人間がみたならばグロテスクな冗談ではないかと勘違いしそうな異端の何かだ。

「ひ、ひるむな!! 奴も負傷している!! ここで退いたらさらに多くの犠牲がでるぞっ!!」
その化け物を囲んで逃がさないように何人もの黒服の男達が各々の武器を化け物に向けている。手に大型の拳銃を持っていた男達は、弾倉が空になるまで化け物に銃撃を続けた。

だが、たりなかった。大型の拳銃であったとしても筋肉の塊であった化け物には小さな傷跡しかつけられなかったのだ。顔をかばっていた化け物は、そんな男達を見て嘲笑をうかべる。

「その程度で、俺を殺せるとでも思ったのか？」

そして、流暢に話しはじめたのだ。理性など全くないように見える化け物が、人間の言葉を喋ったことに誰も驚かない。そんなことは最初から判っているのだ。

「お前らのような雑魚が、アンチナンバーズの序列三百十五位の……三桁台のこの俺様をおおおおおお殺せるとでも思ってたのかよおおおおお……!! 人間ごときがあああああああ!!」

男達の戦意を挫くような、凶暴な雄叫びをあげた。困っていた男の一人がそれに耐え切れず、短い悲鳴を残して逃げ出す。それに続くように、また一人。また一人と逃げ出し始める。残ったのは僅か数人となっていた。

化け物は凄まじい速度で男の一人に近づくと、片腕を叩きつけてくる。男は逃げるでもなく、その動きをぼーと眺めたまま、ぐちゃり、とおぞましい音をたてて、熟れたトマトが地面に叩きつけられたかのように、男だったモノが地面にぶちまけられる。一人を一瞬でひき肉へとかえた化け物は、その肉塊へとかわったモノの前に座り込み、かぶりつく。肉と骨を咀嚼する音が絶望的なほどにあたりに響いた。

非現実的な光景。だが、黒服達にとつては、これが当たり前の光景なのだ——ナンバースと呼ばれる組織に属する彼らの。男達に恐怖を与えるようにゆつくりと喰らっていた化け物だったが、その途中で凄まじいほどの圧力を感じ、それが感じられる方向へと犬のような顔を向ける。

「やれやれ。たかが序列三桁台程度の化け物が、こうも調子にのるとはな。いい気になるなよ、三下が」

「全くです。分相応という言葉を考えて欲しいものです」

遠く離れているというのに肌をピリピリと打ってくる圧迫感。その発生源である女性が二人ゆつくりと歩いてくる。人間を喰らう化け物がいるというのに、全く気にせずに、まるで虫を見つけたかのような嫌悪感のみを見せて。

一人はまだ少女といつてもいい年齢か。せいぜいが十代半ば。染めたような色ではなく、綺麗な茶色が映える長髪。腰近くまではあるだろう。可愛らしい容姿とは別で、表情は恐ろしいほどに冷たい。その腰元には二振りの剣が鞘に納められ、挿されている。

もう一人は、少女よりもかなり年上の女性だった。切れ長の目とシャープな顎のライン。薄紫のショートヘア。年は二十代前半だろうか。モデルでも嫉妬するようなすらりとした細身の身体だが、恐らく百七十をゆうにこえる身長だろう。この女性は、少女

とは比べ物にならない色気を醸し出している。男物のスーツを着ているが、それがまた女性の氷のような美しさを助長させているようだ。少女が剣を携えているが、女性は何一つ武器らしいものを持っていないのがアンバランスであった。

彼女達が現れて、残っていた男達は安堵のためいきをついた。ようやく時間稼ぎが終わり、自分達の役目を達成させられたのだから。たいして、化け物は女性二人を見て、怯んだように後ろへ一歩下がった。

「な、なんで、こんな場所に、お前みたいなのやつらが……いやがる!? ナンバーズの、数字持ちがあ!!」

幻聴だろうか。化け物の声には恐れが混じっているように聞き取れた。人間を遥かに超えた化け物が、ただの女性と少女を恐れるなど可笑しな話だ。

「今回はお前が前衛にでろ。できるな、デュード?」

「はい。お任せください。トール姉様」

デュードと呼ばれた少女は腰元の双剣を抜く。

重さなど感じていないように、軽々と構え、化け物を冷たい瞳で射抜いた。

「く、くそがああああああああ!!」

威嚇の雄叫びではなく、後悔と恐怖が織り交ざった遠吠えをあげ、化け物は疾走する。丸太のように太いその拳の一振り人間を肉塊へとかえられる破壊力を秘めた一撃が、

デイドに向かって放たれる。先程の反応できなかつた男性のように狙われた少女は身動き一つしない……いや、彼女はその拳の軌道を静かに見つめていた。

「ツインブレイズ」

デイドが全身から強い輝きを放つ。

化け物の拳が届くより早く、純白に煌く翼が背中から出現。化け物の目をやくように発光した。それに怯んだ一瞬で、彼女は拳をかくぐり、双剣を振るう。

その域や、超速。圧倒的な速度と威力の斬撃が化け物を切り刻んでいく。筋肉の塊であつたはずの化け物が、銃弾をも気に留めなかつた化け物が、まるで暖めたバターを切るかのよう労力で。反撃する隙さえなく、腕を、足を、斬り飛ばされ——断末魔をあげる間もなく、首を斬りおとされた。

——瞬殺。

絶望が具現化した化け物は、まさに一瞬で斬殺されてその生涯を終えた。圧倒的な戦闘力を見せ付けられた男達は呆然とその光景を見ている。本当にあの化け物が殺されたのか信じられない。その光景をつくりだしたデイドは背中に展開していた光の翼を消す。

「上出来だ、デイド。お前も腕を上げたな」

「有難うございます。トーレ姉様」

表情は変えないデイド。

だが、どこかその嬉しそうに見えるのは勘違いではないはずだ。

「——お前達は後始末を頼むぞ」

「は、はい!!」

声をかけられた男達は無線を片手に化け物の残骸の処理を始める。それもナンバーズの仕事の一つだ。化け物の存在が公になれば、間違いなく世界は混乱する。完全には隠せなかつた異端による事件も、普通の事件として報道すればそれは日常の出来事の一つとして誰にも疑問を残さないですむ。

一般の人々が化け物の存在を認知してしまえば、確かに何も知らないよりは良いのかも知れない。だが、武器ももたぬ一般人がどうやって自分の身を守れば良いというのだ。ただ、恐怖するしかない。そして、その恐怖は疑いをうむ。もしかして、隣に住んでいる人間は実は化け物ではないのか、と。

疑いは際限なく広がりやがて悲劇となる。そんな状況にならないためにナンバーズがいるのだ。化け物の存在を隠し、人々を守る。もつともそのような崇高な意思を持って行動しているナンバーズは数えるほどしかないが。

——パチパチパチ。

男達が無線で話をする声しかきこえない中で、拍手が聞こえた。

誰がした拍手だろうか。誰もが疑問におもい、そして気づく。全く気配を感じさせずに、彼女はそこにいた。

「なんと見事。流麗可憐。美しきかな。いやはや、ナンバーズの数字持ちとして年若かったその少女も、随分と強くなりましたね？」

「……き、きさま!!」

「っ!？」

トーレとデイド

二人がその女性の声を聞いた瞬間、その場から離脱。数メートル以上の間合いを取つて、向かい合う。そして、二人の背中には光り輝く羽——リアーフィンと呼ばれるそれを——展開する。

笑顔を絶やさぬプラチナブロンドを靡かせる未来視の魔人。

二人の猛者の感覚に気取られることなく、天眼は間合いの中へ現れていた。戦慄するデイド。

「お久しぶりですね。三番さんと十二番さんでしたか？ 相変わらず夜の一族狩りをしているみたいですね」

「アンチナンバーズが序列二位……事実上の最大の人類の敵がこんなところでなにをしている?」

「別に意味なんてありませんよ？　ただ散歩にきただけです。ここらへんは私の散歩のコースなんですよ」

「……」

目つきを鋭く。睨みつけるような二人の視線を受けても天眼の態度に変化はない。

凄まじい重圧の殺気を放つても暖簾に腕押し。魔人は気にしたそぶりもない。

「冗談ですよ。そんなに怖い目をして欲しくありませんけどね」

ふうとやや小馬鹿にしたように首をふる。

デイドの足に力が入り、地面を蹴りつけようとした瞬間――。

「相手が悪いですよ？　十二番さん？」

背筋が凍った。

睨みつけていたはずの天眼の姿が消失し、驚く暇もなく首元に手を添えられていたのだから。触るか触らないかの隙間をあけて、なでるように首に両手をあてている。息が詰まるような圧迫感。呼吸が出来ない。

しかし、そんな圧迫感も一瞬で消えた。

天眼はデイドから大きく距離を取ったからだ。それと入れ替わるようにトーレが先程まで天眼がいた空間を光り輝く爪で薙いでいた。彼女の両手に輝く太陽のような光をはなつ爪。リアーフィンの力によって生み出された、鉄をもたやすく切り裂くトー

レだけの、如何なる鉄壁の防御も結果も容易く無効化する人類最強とも称される近接兵器。

「怖い顔をして、何もしませんよ？　今はまだ、ですけどね……」

「ここで決着をつける気か……？」

「決着？」

何を言っているのだ、と天眼が呆れたような声をあげたが、トーレの険しい顔つきを窺い、再度ため息をつく。

「今回はそんなつもりはありませんよ？　ちよつとした情報を伝えにきたんです」

「情報、だと？」

「貴女達が掴めないアンチナンバーズが序列六位。伝承墜とし、彼の情報です」

「伝承墜とし!？」

デュードが反射的に聞き返す。

驚くのもむりはない。ナンバーズの情報網でも掴みきれていない伝承墜とし。それが本当ならば喉から手が出るほどに手に入れた情報だ。人類最大の敵でもある伝承級の一桁台。その化け物のなかの化け物の情報が不明などあつてはならないことなのだから。

「ここから遙か極東の国日本。そこに伝承墜としは居ます。探してみるのも一興ではな

いのですか？」

「……その情報を私達に伝えるメリットはなんだ？」

「メリット？ そんなものを考えているんですか？ 結局貴女達は動くしかなないのです

からね？」

「ちっ……」

トーレが舌打ちをする。

実をいうとナンバーズと天眼は半協力関係にあるといえる。天眼は様々な夜の一族の情報をナンバーズに渡す代わりに、ある程度の行動は黙認されるのだ。ナンバーズといえど天眼と真正面からぶつかりあうのは、どれだけ被害がでるか判らない。それ故にどれ位昔からかももう忘れ去られているが、奇妙な協力関係にあるのだ。

「それではお二人とも……いずれ、また」

再会を匂わせ、天眼は森の中へと消えていった。

残された二人は暫くの間緊張をとくことはなかったが、完全に去ったのがわかると背中のリアーフィンを消し去る。

「……調べるしか、ないか。日本で任務をしている数字持ちはいるか？」

「確か……チンク姉様が向かっていたはずです」

「チンクか。奴ならそう簡単におくれを取ることにはあるまい。情報を回しておこう」

「わかりました。他に誰かむかわせましょうか？」

「……そうだな。クアットロとウエンデイにも伝えておいてくれ。差し迫ったアンチナンバーズへの対応もあるまい。念のため援護に回ってくれと」

「はい。わかりました」

今の今まで全くの情報もなく、影さえ踏めなかつた存在。伝承壁とし、その存在を突如として匂わせてきた未来視の魔人。その不自然さと突然差に、胸中がざわめいていた。暗雲に覆われた空を見上げて——トーレは不吉な予感を隠せずにはいられなかった。

第5話：変わり行く日常2

入学式は特に問題も起こらず——起きるはずもなく、つつがなく終了した。

学生は各々の教室に戻り一時間ばかりのオリエンテーションが行われ、それが終わるとともに、帰宅という形となっている。運動系の部活が強い風芽丘学園では、早速将来有望な一年生を獲得しようと、それぞれの部活の二年生と三年生が部活動紹介という形で、一年生にアピールしていた。

美由希はオリエンテーションが終わり、クラスメイトが教室から出て行ったあとでもまだポツンと自身の席に座っていた。入学式でまだ初日ということもあり、様子見という態度で教室を去るクラスメイトも多かったが、人当たりのいい人間はすでに何人か、話に華を咲かせていたのだが、生憎美由希はどの輪にも入れていなかったのだ。美由希や帰って行った生徒以外にもそういったグループが何組か残ってはいる。

はあ……と深い深いため息をつく美由希。幼いころのある出来事が、人と深く接する

という行為に歯止めをかけていた。それ故に、美由希も恭也と同じく友達は少ない。

確かに寂しいとは感じる。同年代の少女達はきつと同性と色んな場所に遊びに行ったり、異性と付き合ったりするのだろう。素直に羨ましいと思つてしまうときもある。だが、これは自分で選んだ道。恭也とともに御神流を極めんとしているこの道は、幼いころの自分が確固たる意志のもとに——選んだのだ。

——決して後悔だけはしない。

美由希が椅子から立ち上がり、廊下へとでようとしたとき、楽しそうに話していた女生徒の一人が美由希を見つけた。

「あ、えーと……高、町さん？ 気を付けてねー」

「は、はい。さようならです」

まさか苗字を覚えているとは思わず引き攣つた返事しかできなかつた。愛想笑いを残し、教室をでていった美由希。まだまだ中から談笑する声が聞こえた。気が重くなつたが、恭也や明。それにレンをまたせているかもしれない。そう考えた美由希が多少早歩きで階段へと足を進ませようとしたとき——。

「えう!？」

ドンという何かとぶつかる衝撃が美由希に伝わってきた。そして、妙に可愛らしい声がか聞こえ、眼前に舞う紙吹雪……いや、書類だろうか。転んだように廊下で尻餅をつい

ているのは……一人の少女。胸元の黄色のリボンを見ると、新一年生だろう。バツサバツサという音を立てて少女の周辺は書類で埋め尽くされる。

「あわわ……ご、ごめんなさい」

少女は慌てて落ちた書類を拾い集める。小動物——リスやハムスターのような雰囲気少女だった。美由希よりも幾分か低い身長。髪のは長さは一緒くらいだろうか。黒髪三つ編みの美由希に対して少女は茶髪のストレートをリボンで結っている。かといって染めているというわけではないようだ。とても綺麗な、自然な茶色の髪なのだから。中学生と言っても通りそんな童顔の少女が謝りながら書類を拾っているのを見ると罪悪感がわいてくる。

「すみません。前をしつかりみてたらぶつからなかったのに……」

少女と一緒に落ちていた書類を拾う。

そんな美由希に対して、少女は申し訳なさそうに頭を下げた。

「いえ、そんなこちらこそ申し訳ありません」

泣きそうな表情の少女はひたすら美由希へ謝ってくる。美由希は何か凄く悪いことをしたような気持ちになりながら一緒に落ちて拾い、すぐに全てを拾うことができた。枚数を数えていた少女だったが、確認し終わった後、パアッと笑顔を見せる。どうやらきちんと全ての書類があつたらしい。

「あ、あの有難うございます。拾っていただいて……この御恩は一生わすれません!!」
「私が前に注意してればぶつからなかったわけですし」

たかが拾ったくらいで一生の恩になるとは思っていなかった美由希だったが、なんとかどもらずにそう返すことができた。少女はぶんぶん顔と顔を横に振ると、書類を持ちながら器用に美由希の右手をつかむ。

「あ、あの……うちは如月紅葉といいます。一年C組なんですけど……貴女は？」

「えっと、高町美由希と言います。このA組ですね」

「高町、さん……本当に有難うございました」

手を離し、ペこりとお辞儀をする紅葉。美由希も太郎の時とは違いあっさり与自己紹介をする。紅葉と名乗った少女は太郎のような不吉な気配など微塵も感じないのだから当たり前といえれば当たり前の話だ。

「おーい!!如月ー!! 早く職員室にいつくよー」

遠くから紅葉を呼ぶ声がある。声の方角には一人の女性———というか少女としか表現しようがない身長の一———スーツを着ている女の子が居た。制服を着ていないということは、生徒ではないのだろう。まさか先生かとも思ったが、あの身長でそれはないだろうと判断する。それもその筈、遠目ではあるがその背丈は百四十にも届かない……いいところ百三十五程度のちんまりさだ。

「あ、今行きますー鬼頭先生」

「先生!？」

反射的に突っ込んでしまった。恭也相手にはよく突っ込みを入れるがあつて数分の少女に突っ込みを入れることになるとは予想もしていなかった美由希だ。遠くにいたせいで鬼頭とよばれた——紅葉の発言曰く先生は、聞こえていなかったのだろう。特に反論をするでもなく紅葉に向かつて手を振っている。当然そばにいた紅葉は聞こえているわけで、苦笑しつつ、鬼頭の方へを歩いていく。

「鬼頭先生って身長のこと少し気にしてるので、あの人の前ではいわないであげてくださいね」

「あ、はい。すみません」

優しく微笑んでそう告げた紅葉に思わず謝ってしまう美由希。なんとなく、そんな優しい雰囲気を感じているのだ。目の前の如月紅葉という少女は——。お辞儀をして去っていく紅葉を見送り、美由希も恭也達と合流するために階段をおりようとして、ふと気づいた。

「——気配が、なかった？」

ぼわわんと緩んでいた美由希の背筋が冷たくなる。そうだ。その通りだ。何故気付かなかつたのだろう。美由希として達人の域にいる御神の剣士。気配を消したり、気配を

探ったりする術は学んでいる。いや、それは美由希の中では相当なレベルで行えると自負している。

普段の恭也との鍛錬……及び実践を想定した試合は広大な森林を利用する。ずっとそんな空間で試合をしていれば気配の消し方、探り方は嫌でも成長する。それこそ野生動物並みに。幾ら学校という場所で気を抜いていたからと言って、気付かないはずがない。感じ取れないはずがない。

山田太郎。如月紅葉。

この数時間足らずで得体のしれない人間に二人も会ったことに言いようのない胸騒ぎが美由希を襲っていた。その胸騒ぎを振り払いつつ美由希は一階へと向かう。まだ結構校内に生徒が残っているのか、多くの生徒たちとすれ違う。校舎から出ると、校門までの道が生徒で埋まっている。まさに雲霞のごとし。

道の両脇では各運動部がそれぞれ勧誘活動を行っているようだ。一人でも多くの新入部員を得ようと、熱心に勧誘している様子は見ているこっちがひきそうなほどだ。恭也達はどこにいるだろうかとキョロキョロ周囲を見渡すが、人が多すぎて流石にすぐには見つけられない。待ち合わせ場所をきめておけばよかつたかなと少し後悔する美由希だった。携帯電話は生憎と家に置いてきている。風芽丘学園では携帯の持ち込みは禁止されているからだ。もっともそれはほとんど建前であり守っている生徒の方が少

ない。

「っ!!」

嫌な予感を感じ、その場から前に飛ぶ。振り返ってみれば、先ほどまで美由希が居た場所で恭也が驚いた顔で固まっている。鍛錬の時ほどに集中していなければ気付けなかった僅かな気配を出していた恭也の奇襲——というには大げさだが——に反応できたことに心底驚いているようだ。

日常の美由希ならば間違いなく気付けなかったであろう恭也の気殺に反応できたことは、恭也の予想を上回るものだったのだろう。幾ら美由希が気づく機会を与えるために僅かな気配を敢えて出していたのだとしても。でなければあの鉄面皮の恭也がここまで表情を表に出すようなことはしないはずだ。立て続けに尋常ではない二人にあつたせいで神経が過敏になっていたようだ。それ故に恭也の気配に反応することができた。

「くっ……まさか、お前に気づかれるとは……」

「ふふん。私だつて成長しているんだからね!!」

「ぐう……死んだほうがましなくらいの屈辱だ」

「そこまで言わなくても!?!」

酷い落ち込みのような恭也に対して鋭い突込みを入れる。一体どれだけ凹めばいいの

だろうか。ずうんと効果音が聞こえるほどに恭也は暗い顔をしていた。

「おししよー。元氣出してください。そこは美由希ちゃんの成長ぶりを喜ばええんやないですかー？」

「うわっ!？」

今度驚いたのは美由希のほうだ。気配を悟らせずに、レンが美由希の背後にいたのだから。別に気配を消していたわけではない。普段の恭也と同じように気配を一般人レベルまで落としていただけだ。そのため、美由希は背後にいたレンをただの一般生徒と知覚していたのだ。

「それもそうだな……」

レンの励ましになんとか立ち直る恭也。そんなに落ち込むのなら完全に気配をけし、仕掛けてくればいいのにと美由希は思わなくもなかった。

それにしても問題は——レンだ。

美由希に気づかれぬほどの気殺をあつかりとやってのける中学一年生。そんな使い手が果たして日本全国を探し回った所で見つかるだろうか。少なくとも美由希は年下でありながら勝敗がどう転ぶかわからない相手をレン以外知らない。

この少女は美由希をして——底が見えない。

どれほどの実力を隠しているのか、掴めないのだ。全力を出している時を見たことも

なく——晶との戦いの時も一目で手を抜いているのがわかる。

「美由希ちゃん……うちの顔なんかついとる?」

「え? ご、ごめん。なんでもないから」

まじまじと注視していたのだろう。レンが自分を見つめている美由希を不思議に思つて首を捻る。流石に不躰だったかとちよつと反省する美由希だったが、恭也とレンだけしか見当たらない。

「あれ、晶はー? まだ来てないの?」

「ああ、晶か? 晶ならあそこだ」

恭也が指差す方向——校舎の影になるような位置に大きな木がはえている。その影に一人の少女が倒れていた。どう見ても晶だったが、肝心の彼女はピクピクと痙攣しているのが遠目でもわかる。

「えつと……どうしたの、晶?」

「まあ、何時ものことだ。お前を待っている間にレンと晶が少しな」

「あ、あははー。一応他の人の邪魔にならないよー気をつけて相手したんやでー、うち美由希にたいして弁解するようにレンが両手を顔のまえでわたわたと振りながら答えたが、周囲の生徒達が妙に三人……いや、レンをちらちらと見てきていた理由に納得した。恐らくだが、美由希が来る前に何時もの如くレンと晶の言いあいが勃発。家なら

いるストップパーこと高町なのはがいなかつたために段々とエスカレートしていき、何百回目になるか分からない拳での語り合いになったのだろう。

恭也と美由希ならばもはや見慣れているためなんとも思わない戦いではあるが、良く考えたら一般人がみたらとんでもない光景だろう。何故ならレンと晶の戦いは現在のレンの完全勝利で終わっているが——大概その戦いの終結は寸頸による一撃で意識を奪われてか、四肢の動く力を奪われてである。ちなみに年若いレンではあるが、その錬度は計り知れず、晶の身体が数メートル近く吹き飛ばされるため、知らない人が見たら目を丸くすること間違いない。

「外に居る時はほどほどにしないと駄目だよー?」

「入学式のせいでテンションあがってたんかなー。何か何時もより晶をとばしてしまたんや」

「うわー。それなら回復に時間かかっちゃうかな?」

「いいのいれてもーたし……数分くらいはかかるかもしれないへんなあ」

大声で話すわけにもいかず、互いの耳元で囁くように会話をする。そうこうするうちに人混みの向こう……校門近くで桃子とファイアツセが恭也達をまっけているのを見つけた。特にファイアツセはブロンドの髪の超絶美女。少年達はあまりの美しさに魅了されたようにみつめ、少女達は憧れのような視線を向ける。

「いってして……」

恭也含む三人の視線がファイアセ達から悶絶していた晶へと移った。レンの目が大きく見開く。相当に良い一撃をぶちこんだというのにもう起き上がってきたのだ。普段だったならば手加減しているので納得できるが、今回は手加減を忘れた寸頸だったはず。

だというのに、回復に数分程度は要すると判断していたレンの予想を遙かに上回り、一、二分足らずで復活する晶に驚きを隠せない。晶の回復力は評価していたが、どうやらそれでも過小評価だったらしい。何事もなかったかのように、駆け寄ってくる。

「じゃれ合いは、家まで取っておけ。これ以上は迷惑になる」

レンへとリベンジを果たそうと拳を握り締めてた晶とそれを迎え撃とうとしたレンの間に恭也が割ってはいる。恭也に止められてしまったならば、二人が戦いを始めるわけにもいかず、レンと晶は大人しく拳を引くものの、二人の間で視線が火花を散らしたような気がした。

「よー、高町。もう帰るのか?」

そこに割って入ってきた男の声。片手をあげて挨拶をしてきたのは、恭也とほぼ同身長の美青年だ。風芽丘学園の制服ではなく、清潔な白い胴着と袴を着こなし、手には竹刀を持っている。

「ああ。家のほうで入学祝をやるんだが……お前もこないか、赤星？」

「んー。是非に、と言いたいんだが今から剣道部の演舞があるからなあ。ちよつと厳しいかもしれない」

「そうか……。開始は夕方くらいからになると思うし、時間があつたらきてくれ。歓迎するぞ？」

「ああ。こつちが早く終わつたらお邪魔させて貰うよ」

赤星と呼ばれた青年は笑いながらそう答えた。青年は赤星勇吾。恭也の唯一といつていい男友達で、風芽丘学園の剣道部を全国クラスへと導いた強者である。

草間一刀流剣道の使い手で、剣道部の部長も務める文武両道な好青年だ。ちなみに剣道の方は個人戦で全国十六という成績を残している。もつとも昨年は大会前に負つた怪我の影響がありながらもその成績を残したので怪我さえなければより上位へくいこめたのではないかともしばらの噂である。

「勇兄も後できてよー」

「ははは。行けたらいくよ」

赤星と晶の仲はいい。実の兄妹なみにといつてもいい。いや、兄弟かもしれない。晶の通っている空手道場と赤星の通っている剣道道場がすぐそばにあり、二人の家自体も近所のため昔からの付き合いらしい。赤星も来てほしいという晶にボンと頭を軽く撫

でて去っていく。そろそろ演武が始まるようだ。

普段だったら少しでも演武を見学していっただろうが生憎と今はフィアツセや桃子を待たせている。あまり時間をかけてもいられないので、その場から去ろうとした恭也の視線が、人混みの中から知り合いを見つけ出した。

今年も同じクラスになった——月村忍だ。

「月村。今帰りか？」

「あ……高町君。うん、今から帰るとこ」

儂げな笑みをかすかに浮かべ忍が答える。そこでふと思いつく。忍は幼いころに両親を亡くし、今は家で使用人と二人で過ごしているということ、世間話をしていくにポロつと本人が漏らしていた。

その影響だろうか、忍はクラスメイトとも碌に話もしない。辛うじて会話をするのが恭也くらいなのだ。最も恭也自身も会話をするのが赤星と忍と藤代の三人しかないのだが。

「あー、月村。今日は夕方くらいから予定はあるか？」

「え？ うんと……特には、ないかな」

「そうか。実をいうと俺の妹達が本日めでたく風芽丘と海鳴中央に入学したわけだな。この二人がそうなんだが」

横に立っていたレンと美由希の肩にひよいと手を回す。

それにビクリと過敏に反応する二人。訝しげな恭也だが、二人にとっては心臓がバク激しく胸を打つような大事件だ。

「そうなんだ……おめでどう」

「あ、ありがとうございます」

綺麗どころはフィアツセで見慣れている二人だが、忍もまた尋常ではないほどの美貌。フィアツセを太陽とするならば忍は月。対称的な美しさを醸し出す美女同士である。二人して緊張からか微妙にどもるようには返事を返した。

「ささやかだが祝いの席を設けることになっている。良かったら月村もどうだ？」

「——え？」

思ってもいなかったことを聞かれ、呆けたような様子の忍。それもそうだろう。まさか恭也から誘いの言葉を聞けるとは予想だにしていなかった。十数秒も呆然としていたのだろうか、忍はやや困ったような笑顔を浮かべ、首を軽く振る。

「お誘いは嬉しいけど——身内の集まりじゃないの？ 私が行っても邪魔になっちゃうよ」

「そこは心配しなくても大丈夫だ。完全に身内だけというわけでもない。レンと晶……と、この二人の知り合いも来ることになっている。それに俺と月村のクラスメイトでも

ある赤星も恐らく来るだろう」

「ええつと、でも……そんなに人は入るの？」

「ああ、心配するな。翠屋——という店を知っているか？」

「え、うん。海鳴で知らない人は多分いないと思うけど……」

「実はそこは俺の母が経営している店なんだ。夕方からそこを貸切させてもらうというわけだ。だから心配しなくても良い」

「ええつそうなの？」

本当に驚いたような月村に恭也が頷いて答える。まさか恭也があつた翠屋の経営者の家族だったとは。予想できないことのオンパレードに結構な衝撃を受けていた。

「迷惑かもしれないが、来てもらえたら——嬉しい」

照れたような恭也の表情と発言。

そばで見ていたレンと晶と美由希はレアすぎる恭也の様子に、自分達の頬をつねっていたりする。レンはちなみに横にいる晶の頬をつねっていたが……。イテテ、と泣きそうな声で痛がった晶がレンに向かって拳を繰り出すが、片手で受け止められあっさりとして投げ飛ばされる。受け身も取ることも許さず地面に叩き付けられる晶を見て周囲の生徒達がさらにひきはじめた。忍はすぐそばでそんなことがあったというのに目にも入らぬように驚いたままだ。

「本当に、いつていいの？」

「ああ。男に二言はないぞ？」

「……それじゃあ、お邪魔させてもらおうかな」

「歓迎する。大体夕方六時くらいから始める予定だからそれを目安できてくれ。翠屋の場所は分かるか？」

「うん。何回も行ったことあるから大丈夫だよ」

「分かった。では、また夕方に翠屋で会おう」

「——うん、有難う。高町君」

忍が嬉しそうな様子で別れを告げ、校門の方角へと向かい、途中でスーツ姿の女性に声をかける。先日見た、自動車で迎えに来た女性のように——遠目だが確かにそうはつきりとわかった。今日も自動車で迎えに来てもらったのだろうか。二人は連れ添って敷地から姿を消していった。

一方受け身も取れず地面に叩き付けられた晶は、痛みで転がりまわっていたようだがすでに復活。起き上がりざまにレンへと襲い掛かる。やる気満々な二人に対してため息を残しつつ、恭也が割って入り、飛び掛かってきた晶の拳を掴み回転。一回転した晶を羽毛を落としたかのようにゆっくりと地面に立たせる。

襲い掛かってくる晶に対してカウンターを合わせていたレンの腕も掴み晶と同じよ

うに一回転。二人ともを立たせた後に、両者にデコピンを打ち込む。脳まで響く痛みと
いうか、衝撃を受け額を抑えるレンと晶。あまりの早業のため周囲の一般生徒は何が起
こったのかすら分かつてはいなかった。それを狙って恭也は動いたのだろうか。

「いい加減にしておけ。そろそろ帰るぞ?」

「うう……その痛みを分かるだけに二人とも頑張れ」

「い、痛いですよ……おししよー」

「あててて……レンに殴られるよりも痛いって、絶対普通じゃないですよか」

涙目な二人と苦笑いな美由希を引き連れて——恭也達はようやく高町家へ帰宅す
るのであった。車で来ていたファイアッセのおかげで非常に楽に高町家まで帰宅するこ
とが出来た。ファイアッセが運転するのだから大概の人は軽自動車のような可愛らしい
モノを想像するが実際は違う。

大人数が乗車できるワゴンを運転するのだ。しかも、運転をする時妙にハイテンショ
ンになるのが少しというか、凄く怖い。一度本人に聞いたところ緊張しすぎて——そ
れを振り切つてテンションがあがってしまったとか。

高町家についた後、庭を背景に皆で記念撮影をする。すでに風芽丘学園の校門でとつ
たのだが、可愛い娘達の写真を残しておきたいという桃子の親心だろう。桃子とファイ
アッセと恭也が代わる代わる写真を撮り、ようやく満足した桃子。

そして各々それぞれの部屋に戻り私服に着替え、リビングに集合する。晶と美由希はソファアに座りテレビをゆつたりと見始め、レンはキッチンへと向かった。本日の昼食の当番はレンのためである。

「それじゃー、私とファイアツセは翠屋いくからねー。六時前にはちゃんとするのよー?」

「おくれちゃ駄目だよー。恭也」

「……何故俺限定なんだ、ファイアツセ」

「ふふ。日付を間違えちゃった前科が昨日あったばつかだよー」

チョンと恭也の鼻先に人差し指をくつつけて優しく微笑むファイアツセ。昨日しでかしたばかりの大ポカを指摘されて反論の余地はない。しばらくこれはいじられそうだと先日までの己の迂闊さを後悔する恭也だったが、自業自得のため素直に頷くしかなかった。

「——まあ、それはおいといてだな。良かったら手伝おうか?」

「んー。今日は三時にはもう閉店するし大丈夫かしらね。ピークも過ぎたでしょうし」

「うん。気を使わなくても大丈夫だよ、恭也」

「そうか。それなら別に大丈夫そうだな」

忙しくなったら電話するわ、と言って桃子とファイアツセが翠屋へと出勤していく。仕事とはいえ高町家の家計を支えてくれる桃子に感謝しかない。そんな恭也の思考とは

別に台所からはなにやら燃え上がるコンロの炎。中華の達人にして炎を支配する料理人レンが手際よく昼ごはんを作っている。

基本的に朝は桃子か晶。夜がレンか晶かファイアツセなのは納得できる当番だろう。幾らレンの料理が美味しかったとしても——朝から中華は重すぎる。食べられることは食べれるだろうが……どちらかといったら朝は米が食べたい日本人の恭也である。

料理は口を挟む余地もないため恭也は久々に自分の息子達を世話しようと思つて庭へ出る。先程写真を撮つたときに見てから気になっていたが、庭の一角にならべてある息子達——普通の人間は盆栽と呼ぶ——を腕を組んで眺める。春合宿で随分と長く放置してしまつたことを気に悩んでいた。若い男、しかも高校生が盆栽の前で考え込むというのも正直変な話だろう。

何故盆栽に嵌ってしまったのか……どうせならもつと若者趣味にはしればよかつたのにと桃子達によく言われるが、盆栽に嵌ってしまったものはしかたない。逆に何故精魂尽くして世話をした大事な息子達の良さをわかつてくれないのだろうか……と不思議に思ってしまう。

「師匠覚悟おおおおおお!!」

「……はあ」

そんな恍惚としていた恭也の耳に晶の雄叫びが聞こえ——。

縁側から飛び降りて突っ込んできた晶の右拳を振り返りながら流しつつ、晶の腹部に蹴りを入れ、蹴り足をそのままに身体を反転させて地面にたたき落とした。盛大な音をたてて叩きつけられる晶が、痛みに悶絶をしている。恭也からしてみれば随分と手加減をした——御神流体術の一つ猿落とし。レンから普段お猿お猿と呼ばれている晶にかける技としては皮肉がきいている。

「全く。何度も言うが声をだして襲ってきたら、奇襲にならんぞ?」

「……うう。それは分かっているんですけど……奇襲は俺の性に合わないというか……」

「お前は相変わらず正直だな」

地面に転がっている晶に手をさしのばす恭也だが、晶はちよつと躊躇しながらもその手を握り締める。たいした力も入れずにヒョイっという感じで晶を立ち上がらせると、庭の砂で汚れた背中を払ってやる。少し緊張で硬くなっている晶だったが、先程蹴りを入れられて叩きつけられたというのにもう平然としていた。

幾ら恭也が手加減をしていたとはいえ相変わらぬの回復力は目を見張るものがある。そこは美由希やレンを遥かに上回るものがあるのだが——今日だけで一体なんど地面に転ばされているのだろうか。

「晶……強く生きろ」

「え? わかってますって、師匠!!」

「慰められた晶だったが、どこをどう理解したのか分からない返事を強く返す。えへつと照れたような笑顔の晶を見て、絶対わかっていないと、不憫になる恭也だった。

「きよーちゃん。御飯できたってー」

「ん？ ああ、わかった。行くぞ、晶」

「……次こそは一撃入れて見せますからね、お師匠」

気合を入れる晶を伴って、リビングへと戻る恭也。テーブルには湯気をたてる様々な中華料理が皿に盛られていたが、果たして四人で食べ切れるのかと疑うほどの量であった。普通の四人ならば食べ切れなかっただろうがここにいるレンを除く三人は実を言うとかかなり大食漢なのだ。特に晶と美由希は運動量も多いせいかな細身なのに、女性には平均よりも随分と食べる。

レンの見事な料理なのもあいまって、次々と皿にのっている料理は消費されていき、残すことなく——完食。満足そうに腹をさする恭也の前に熱い緑茶が注がれた湯のみが差し出され、礼を述べ受け取った。旨そうに飲む恭也を見て、レンが恭也以上に満足そうにしているのは気のせいではない。彼女にとつて恭也が食べて満足してくれば、これ以上嬉しいことはない。

その時、高町家の電話が音をたてる。こんな時間に電話がなるとは珍しいと思いつつ一番近くにいた美由希が席を立とうとして——それより早く恭也が電話を取って

た。

「もしもし。高町です——」

『あ、きよーや？丁度良かったわー。てつきりまた鍛錬にでもいったんじやないかと
思ってたから』

受話器ごしからでもはつきりと分かる、一家の大黒柱の高町桃子からの電話だった。
だが、鋭い。恭也は御飯が終わったら軽く汗を流しに行こうと思っていたからだ。どこ
か近くで見ているのではないかと少しだけ疑いを持ってしまう。

「——店が忙しくなったのか？」

『あー、そういうわけじやないのよ。昼に忙しかったみたいで——夜の分がちよつと
足りなさそうなのよね。その分を買ってきてきてほしいんだけど、大丈夫？』

「ああ。それなら問題ない。買いに行つてこよう」

『さすが、恭也!!えつと、買ってきてほしい物は——』

桃子の言つてきた食材と数量をメモ帳に書き写すと、受話器を置きリビングへと戻
る。こういう時のためにと引き出しに隠してある高町資金からお金を借り受けた。

「誰からだつたのー？」

「ああ、かーさんだ。夜のために材料を少し買ってきて欲しいと、な」

「あ、そうなんだ。私も一緒に行くかうか？」

「いや、問題ない。それほど量も多くなさそうだしな。それよりお前は飛針と鋼糸の練習でもしておけ。どんな状態でも思ったとおりに扱えるようにしないと実践では使えんぞっ。」

「う……耳が痛いお言葉です」

「レンに晶。そういうわけだ。ちよつと出てくる」

「いつてらつしやいです、おししよー」

「はーい。気をつけてくださいね、お師匠」

しよぼーんと落ち込む美由希と元氣な二人をリビングに残し、恭也は財布だけ持つと玄関をくぐる。太陽の光が眩しい。ほかほかとした陽気が心地よく、自然と足の運びが軽やかになった。雲ひとつない晴天。見渡す限り続く青空が、空の果てまで続いている。

恭也は夏はあまり好きではない。かといって冬もそう好きではない。大抵の人がそうだとしようように春と秋を好んでいた。というのも、理由は簡単だ。

別に暑さや寒さが嫌いというわけではなく、長袖を着ていても人目をひかないということだからだ。恭也の身体には様々な訓練や死闘の果てについた消えることのない傷跡が刻まれている。傷だらけの身体を晒して、じろじろと他人から見られるのは流石に気分的に良くない。むしろそれで気分が良い人間がいるとしたらそっちのほうが怖い。

一際心地よい風が吹く。冬ならば吐く息も白かっただろうが、今はそんなこともない。恭也は足早に海鳴の商店街を歩く。平日ということもあってか商店街を歩いている人々は主婦が多い。かといってそういった女性ばかりでもなく、入学式や始業式を終えた若い学生達も多く見られる。

主婦達は夕食の買い物にでもきているのだろう。手には買い物帰りなのか食料がはいった袋をひっさげている。対して学生達はどこかへ遊びに行こうとしているのか、忙しそうに友達と海鳴駅へと向かっている。

その中には多少顔見知りの女性も混じっていた。恭也は海鳴では有名な翠屋の店長である桃子の息子なのだ。小学生の頃から剣の修練の合間に時間があれば手伝っていたので、その頃から見知った常連客も多い。そういった人たちに会釈だけして歩きさる。主婦達の会話に混じれるほど多弁ではないのを自覚してはいるし、桃子から頼まれた買出しもあつたからだ。

何時も買出しに行っている商店で頼まれたものを買ひ、御札をいって店を辞する。幾つかの店舗を回り、大した時間もかからず頼まれたものを買い揃えた。

後は翠屋にこれを置きに行くだけとなった恭也の耳に複数人の若い男と少女の話し声が聞こえてきた。そちらの方向に眼を向けてみれば、どうみても真つ当とはいえない髪型と格好をした少年達と、中学生……見ようによつては小学生程の身長少女が居

た。

少女は、白髪……いや、綺麗な銀髪といえ方がいいのだろうか。あの銀髪の小悪魔を思ひ出させる美しいプラチナブロンドであった。腰元ちかくまでその髪を伸ばし、フアツシヨンなのだろうか、右目に黒い眼帯をしていた。その眼帯だけが少し妙な印象を与えるが、それ以外は可愛らしい少女である。

「すまない。ここに行きたいのだが……」

そう言つて少女は少年達に持つていた地図を見せる。

少年達はその地図を見ていたが、暫く考えて互いに顔を見合わせた。

「えーと……その場所なら案内してやるよ。こっちからのほうが近いな。ついてこいよ」

「ああ。助かる」

少年達が入つていったのは商店街の裏道へと続く道であった。

そこらは人通りも少なく、薄暗い道ということもあり、海鳴の人間ならあまり利用しない通路である。だというのに、少女は何の疑いも無く少年達についていった。

それを止めようとする人間はそこにはいない。それは、少年達が札付きの不良ということもあり自分に被害がくるのを恐れたからだ。自分に被害がくるかもしれないのに止める勇氣を持つのは難しい。見てみぬふりをしたとしても責められないだろう。

「……まずい、な」

少年達と少女が裏路地に入つていったのを遠目で見た恭也だったが、嫌な予感がして後を追うように足を速める。不吉な予感がした。あの少年達と少女を放置しては取り返しのつかない事態になってしまうという予感。

「あら、恭也くんじゃないの？ 高校はもう終わったのかしら？」

それを振り払うようにして後を追おうとした恭也の足を止めたのは背後からかけられた声だった。振り返つてみれば恭也の後ろの店から丁度出てきた中年の女性がいた。その女性が恭也に声をかけたのだ。高町家の近所に住み、昔からの付き合いのある女性だ。恭也も小さい頃から面識がある。いい人なのだが、異常なまでに話好きなのだ。それがこの状況では大いにマイナスに働いてしまう。

ズキリと首筋が痛んだ。

何か良くないことがおきる場合の第六感ともいうべきモノ。科学的根拠など一切無いが、この予感は幾度と無く自分の危機を救つてきた。だからこそ信じるに値する。はやく行かなければ――。

そう。はやく行かなければ不幸が舞い降りる。

彼らに最悪の不幸が――。

「……申し訳ありませんが少し用事がありました。失礼します」

「あら、そうなの？ また今度翠屋に行くわね」

「お待ちしています」

不吉な予感に背中を押されるように、女性の話の切れ間に割って入り終わらせることに成功した。それに思わず拳を握る。一礼して、女性から離れると先程少年少女が消えていった裏道へと恭也が疾駆した。

薄暗く、汚れも目立つ裏道は狭くほとんど一本道といつてもいい。走っているとすぐに二手に分かれる通路となっていた。どちらに行つたのか一瞬悩む恭也だったが、意識を広げるとあつさりと気配を捕まえることが出来た。

——異様な圧迫感を持った気配。

何の躊躇いも無くその気配の方向へと向かう。

幸いそれほど離れてはいない。一際不気味に蠢く気配に近づいていくと、恭也の耳に少年達の声が聞こえた。

「お嬢ちゃんもあまり俺達みたいなのにはいはいとついてくるもんじゃねーぞ」

「全くだ。世間知らずもいとこだぜ。俺達じゃなかったらどうなつてたことか……」

笑いながらそう少年達が少女に注意をしているのだろう。確かに少年達の心配も最もだろう。少年達は内面はともかく外見はいかにもそこらへんにいる不良となんら変わらぬ。そんな自分達に道を尋ね、何の疑いも無くこんな裏道についてくるという少

女が不思議で仕方ない。

「……その言い方だとお前達は私に何もしないのか？」

「へ？」

少女の真面目な問いに一瞬言葉が詰まる少年達。

まさか少女の口からそんな言葉がでるとは思ってもしなかった。

てつきり世間知らずのお嬢様かとおもっていたが、少女の口ぶりからまるで何かされるのをつかっていたかのような――。

「ああ、何を考えてるのかわからんでもないけど。しないしない」

「俺達はさすがにそんなことはなあ……」

「んだな。つと、ほら、そこを出れば目的地のすぐ近くに出るぞ」

ガラが悪くも、親しみを感じさせるような笑みで少年達は、少女を送り出そうとする。この光景を一般人が見たら少年達への偏見を捨て去ったかもしれない。何時も優しい人が良いことをするよりも、素行が悪い人が良いことをしたのを見た時のほうがインパクトがある法則だ。意外と優しい所があるのだと感心したかもしれない。

少年達に未来があつたのならば――。

「残念だ。お前達が救いようのない悪党だったならば――私の心も痛まなかつたぞ？」

「ん？お前何を言つて——」

狭い路地裏が軋みをあげる。

燃え立つように少女から放たれる殺気。それなりに喧嘩で場慣れしている少年達でも震え上がるほどの威圧。凶悪な重圧が身体中から迸る。言葉で例えるならば、燃え盛る炎のような少女。少年達に、この場に居ては危険だという気配を言葉よりも雄弁に、焼け付くように伝えてくる。

「すまない。日本に着いてから組織の連中となかなか連絡が取れなくてな。なに、痛いのは一瞬だ。悪いが——」

「ああ、すまない。ここにいたのか」

煮えたぎった殺気の世界を押し潰すように、少女の台詞を遮って、恭也の声が路地裏に響く。驚愕を表情から隠せない少女が、路地奥からあらわれた恭也に振り向く。この場に自分達以外がいるとは思つてもいなかったらしい。重圧から解放された少年達は少女と恭也の二人を交互に呆けたように見比べる。

「君達。案内してもらつて助かった。この娘は俺の知り合いでな。探していた所なんだ」

「あ、ああ……」

「礼を言う。だから、もう行くんだ」

真剣な様子の恭也の視線に無言で頷くしかなく、少年達は逃げるように路地裏から飛び出していった。救われたのだ、少年達は。恭也が声をかけたことよって、未来を掴み取れた。その事に気づかないまま、少年達は姿を消した。いや、本当は気づいていたのかもしれない。目の前に居た少女の危険性に……だからこそ、有無をいわさず飛び出していったのだ。

逃げ去っていった少年達には一切の注意を払わずに、少女は恭也のみを注視する。例え少年達にのみ気をやっていたとはいえ、自分に僅かな気配も感じさせなかつた男に油断などできるはずもない——例え両手に買ひ物袋を引っさげていたとしても。

「貴女が何者かは分からない。だが、こんな真昼間にあまり物騒なことは遠慮ねがいたいのですが」

「……あのような輩は社会的にも消しても問題ないと教えられたのでな」

「誰がそんなことを……」

頭が痛くなる恭也。一体誰がそのようなことをこんな年端も無い少女に教えたというのか。まず間違いなく、ろくな人間ではないだろう。

「そんなことをすればここ日本では大問題になりますか……」

「問題ない。組織の力をもってすればそれくらい幾らでも揉み消すことが出来る」

「——組織？」

「っ……」

聞き返す恭也に、しまったという顔をする少女。

あまり触れては欲しくない話題のようだ。答えることも無く、少女が両手を広げ恭也から少しばかり距離を取る。だが、恭也とて裏の世界に足を踏み入れてる者。そちらの世界の情報はそれなりに持っている。

少女の幼い容姿。白銀の髪。組織。爆熱のようにあふれん気配。

それを組み合わせれば——少女の正体の察しがついた。

「……忘れろ。それ以上私に関わるならば、命の保証はできん」

「まさか、貴女はナンバーズか。数字持ちの中に年若き少女がいると聞いたことがある。

白銀の髪を靡かせ、あらゆるアンチナンバーズを撃破せしめるもの——ランブルデットネイター爆殺姫の

チンク」

恭也の返答に少女の肩が釣りあがる。

ただの一般人が知っていい情報でない。つまり、恭也はこちらの世界の住人だということを理解した。それならば、少女がこれ以上自分の正体を隠す必要はない。

「……お前が何者か知らんが、私と関わりあつた不運を嘆け」

レンほどに小さな少女だというのに——その気迫は異様であつた。桁外れといつてもいい。年齢的にやはりレンと同じ程度にしかみえないが、その年齢でここまでの気

迫を纏えるのは規格外だ。レンとはまた違った圧倒的な威圧。確実にこの少女は、幾人幾十人もの命を奪ってきている。命を奪い続けてきた者、特有の危うさをこの少女は纏っていた。

——やはりこの少女は——。

圧縮される。少女の赤く幻視できそうなほどの灼熱のオーラ。

数メートル離れている恭也を、焼き焦がさんと熱く膨れ上がっていく殺気。

背中を伝わる寒気。このままここにいたら、ただでは済まない。そんな予感めいたことを恭也は感じた。ここままで必殺の気配を感じたことは久しい。ナンバーズの数字持ちと出くわしたことは未だかつてなかったが、実際に会って、アンチナンバーズが恐れるのも納得できる。それほどほどの圧迫感を伝えてきた。

赤く燃える。燃える。燃える。

少女の背中から赤く、朱く、紅く、ただ真紅に染まった二対の翼が出現する。炎で出ている……：：：そう言われたとしても納得できるほどの業火灼熱のリアーフィンであった。

「覚えておくがいい。我が名はチンク——お前を消す者の名だ」

そして、赤が弾けた。今までの重圧が消え去り、そこは平穏を取り戻している。不思議に思った恭也だったが、すぐさまに理由が分かった。チンクと名乗った少女が、その

場に倒れていたのだ。地面に四肢をなげうって、海からあげられた魚のように。

「…………お、お腹減った…………」

「…………」

流石の恭也もその眩きにどう返していいかわからず、沈黙しかない。

殺氣を向けてきた相手とはいえ、戦う前にいきなり倒れ、しかもお腹減ったといわれ始末。本気でどうしようかと悩む恭也だったが……。

買った物袋に手をつつまみ、林檎を驚掴みにして取り出すと倒れているチンクに近付ける。顔だけ上げて恭也の手に乗っている林檎を見た瞬間、立ち上がり掴み取るとかぶりつく。まるで一週間断食していた人間のように、一気に林檎を食べつくす。驚くことに芯さえも残していない。

それを見た恭也は袋からまた林檎を取り出して渡す。それをまた取り上げるように奪うと一心不乱に食べ続ける。まだ足りないのだろうか、少しは腹の足しになったのか、ようやく落ち着いたように深くため息をついた。その表情は恍惚としていて、彼女は呆けるように恭也を見つめる。

「…………お腹が減っているのか?」

「…………ん」

まだ呆けているのかコクンと顔を縦に振る。

それを見た恭也は財布に残っている金額を思い出し――。

「これ以上手を出さないという約束をしたら食事をご馳走しますが」

「……ほ、本当か?! 約束する!! 約束するぞ!!」

凄まじい勢いで恭也にすりよつてきた。そんなチンクを見てどれだけお腹が減つていたんだ、と心底不憫に思いつつ、彼女を連れ立って路地裏から出る。周囲を見渡すと平穩そのもの。路地裏であつた出来事が幻のようだが、横にはしっかりと銀髪の少女がいた。

とりあえず、すぐそばにあつた喫茶店に入り、ウェイトレスに案内され席に座る。向かい合うように座つたチンクが早速メニューを開きどれを注文するか迷つているようだ。その光景は兄妹のように見えて傍から見ていると微笑ましいだろう。

「……遠慮せずに注文しても構いませんよ」

「!!」

本当にいいのか?と目で訴えてきているフユンフに頷くことで返す。

キュピーンと目が光つた気がした。そして、注文を聞きにきたウェイトレスを捕まえて――。

「やきそばにオムレツにミートスパゲッティにナポリタンにカルボナーラにハンバーグにカツサンドに――」

兎に角注文をしまくるチンクを見て——お金足りるかなあと本気で心配をする恭也。ウエイトレスもマシガンのように注文し続ける彼女に注文表を書くのに追いつかず、あわわと慌て始める。

これ以上は、と思った恭也はチンクの持っていたメニューを取り上げると届かない位置に置く。それを不満そうに頬を膨らませて抗議するが、財布の中身と相談した結果もはや崖っぷちだ。

「以上でお願いします」

「は、はいー。わ、わかりました」

パニックになっていたせいだろうか、注文を繰り返すことなく厨房に消えていく。チンクは不満そうにしていた様子などなんのその、ウエイトレスが消えてからは注文がはやくこないかとウキウキ気分です。床につかない足をプラプラとぶらつかせている。

今の彼女の様子はまるで子犬。尻尾と耳があつたらちぎれんばかりにふついていただろう。路地裏の凄惨な姿など微塵もない。このチンクを見て裏の世界で恐れられるナンバーズの数字持ちの一員だとは信じるものもないだろう。

「……一つ聞いてもいいですか?」

「うん? なんでもいいぞー。というか、その丁寧な言葉遣いはやめてくれ。何故かわからないが背中が痒くなる」

「いえ、しかし……」

「私が良いといってるんだ。別に構わんだらう？」

では……と改めてコホンつと咳払いを一つ。

「……仮にも人の世界を守る最後の壁。ナンバーズの数字持ちともあろうキミが——
何故あのようなことを？」

「あー。うちの司令官がお金に困った時は、あーいう輩を追いはぎしても罪にはならな
いって教えてくれたんだが……違うのか？」

「……頭が痛い」

先程も思ったことだが、なんでそんな碌でもないことをおしえるんだ、と恭也はズキ
ズキと痛む頭を抑える。人類最後の砦。そう言われているナンバーズの司令官がそん
なことを教える人間だとは思いたくなかったが……その真実は認めるしかない。

そうこうするうちに、出来上がった料理が次々と運ばれてくる。目を輝かせ何の遠慮
もなく次から次へと食べ始めるチンクだったが、その小さな身体はどこにはいるのかと
いう疑問を残し、胃袋の中へと消えていく。コーヒーだけ注文していた恭也はそれを嚙
りながら——最初は驚いていたが、途中からあることを思い出して納得した。

「あの赤い翼は恐らく……ならば、大量にエネルギーを消費するのも納得がいく。あの
人もそうだったな……」

「むにゆう？ ふおにかふおったか？」

「——口にものがはいつてるときは喋らない」

「……ふおう」

人智を超えた異端の力。夜の一族とは異なる人にして人外の域に達した者達。銀髪のこせうまの小悪魔と同じ——HGS能力者。その身に感じた波動は間違はなくそうだろう、と恭也は当たりをつけていた。触れずして命を潰えさすことができる、人類を超越した——人類。

「で、何故こんな街に数字持ちであるキミがいるんだ？」

「……ちよつと探し人を頼まれて。この街なのは——勘、かな？」

「探し人？」

「ああ。といつても、相手の顔さえわからないんだけど」

「……どうやって見つけろと？」

「……全くだ!! ヒントも何も無い!! 顔も種族も性別も身長も血液型も何も分からないというのにどうやってみつければいいんだ、と本気でいってやりたいぞ」

「血液型はおいといてだな……見つかるものなのか？」

「無理に決まってる……特に私は戦闘特化型だしな。見つかる可能性は0パーセントに近い」

ガンとテーブルを両手で叩くチンク。相当にお冠なんだろう。その音に驚いて店内にいた客が恭也たちの方を見たので、すみませんと頭をさげる恭也。

「一体誰を探してるんだ？」

あまり深く突っ込むのも問題だとおもったが気になったので質問をしてみる。

答えて貰えないだろうと予想していた恭也はコーヒートを口にふくみつつ返答を待つ。

「ああ。アンチナンバーズの序列六位。伝説を覆した者。最凶を虐殺した刃。伝承墜とし、だ」

「——ぶふお!？」

吹いた。噴出した。口の中に含んでいたコーヒを目の前のチンクにぶちまけた。その不意打ちに顔面がコーヒまみれになった少女が、顔を押しえてテーブルに突っ伏す。

「ううあああああ——あ、あついいいい!!」

「げほっげほっ……す、すまん、大丈夫か？」

ハンカチを取り出すとコーヒ塗れのチンクの顔を拭いてやる。こればかりは弁解の余地は何もなく、完全完璧に恭也が悪い。抗う気力もないのか恭也のなすがままに顔を拭かれるチンクだったが、暫くたってようやく目が開かれるようになったのか、テーブルのうえに残っているコーヒ塗れになった料理を見て絶望した表情になる。

しかし、その表情も一瞬。コーヒー味になつたというのにその料理を食べ始める。どうやらコーヒー味より空腹が勝つたようだ。色々複雑な気持ちになりながら、チンクの勇士を見守る恭也だつた。

それから僅か十分たらずで完食した彼女は満足そうに腹を撫でる。とりあえず伝票を持つて会計にむかうが——ぎりぎり財布の中のお金でたりたようだ。もし足りなかつたらと思うと冷や汗が流れる。

喫茶店から出ると——落ち込む恭也とつやつやしたチンク。入る前とは全く逆の様子だ。ちなみにウェイトレスは心配そうに恭也を見送つていたのが、少しだけ心が癒された。

「ああ、そうだ。お前の名前を聞くのを忘れていたな」

「……高町恭也だ」

「ふむ。キョーヤか。覚えてたぞ」

腕を組みながら、口の中でキョーヤキョーヤと呟きながらチンクはどこか嬉しそうに恭也の前を歩く。数歩歩いた先でクルリと恭也に向かつて振り返る。路地裏で出会つたときのような凄惨な笑顔ではなく——。

「それにしても不思議な名前だ。初めて聞いたというのに——懐かしい気がする」

「はてさて、誰か知り合いにでも似た名前の人がいたのか。それともどこかで聞いたこ

とがあつたのか。どちらかじゃないか？」

「いや、そういうのじゃない。なんというか、産まれる前から知っているような——そんな不思議な感じだ」

「デジャヴというやつか？」

「何といたつたらしいのか……まあ、気のせいだろう」

後ろ向きで歩いて行くチンク。不思議と人混みはこの少女に気づいていないように割れていく。気づいてみれば、夕陽が差すような時間になっている。

「——今日はご馳走になった。お前とはまた会いそうな気がするな。ふふ、私の勘は結構あたるんだぞ、キョーヤ」

その言葉を最後にチンクの姿が幻のように消え去った。今まで見ていたのが幻影だったのではないかと疑いたくなる。それほどに突然に消え去ったのだ。遠ざかつていく気配だけは掴み取れたが、姿は微塵もない。首を捻る恭也だったが——頼まれていた桃子のお使いが遅くなったことに気づき、急いで翠屋へと走っていった。



「もうチンクちゃんつてばあ。ちゃんと指定の場所にいてくださいよお」

「ああ、すまん。クアットロ。少し色々とおつてな」

恭也から随分と離れた路地裏の二画でチンクは、クアットロと呼ばれた女性と向かい合っていた。両サイドで茶色の髪を結び、丸眼鏡をかけた女性——ナンバーズの数字持ちの一人クアットロ。

「それで、なんであんな一般人と仲良くお食事までしてたのお？」

「……一般人？ お前にはアレが一般人に見えたのか？」

「——へ？」

「……いや、わからないならそれでいい」

……一般人、か。

チンクの発言を心の中で鼻で笑う。

成る程確かにその通りだ。あの気配の消し方はあまりにも完璧すぎてそこらの人間となんら変わりはないようにみえるだろう。だが、路地裏であつたときの恭也の気配は

「……ばけもの、だ」

ぶるりと身体が震えた。

思い出すだけで寒気がしてくるほどの、死を体現した化身。これまで戦つてきたアンチナンバーズなど相手にもならぬ人間だつた。そう、人間だつたのだ。あれだけの死を感じさせた相手はただの人間だつたのだ。だというのに久しぶりに、死ぬことを覚悟した。それ故に最初からリアーフィンを全開で発現させ——全力で戦うことを決意したのだ。それでも、勝てる気はしなかつた。あの、暗く、闇く、冥く、漆黒に轟く——完全な闇。

しかし、その後……空腹で倒れたチンクに食事をご馳走するという意味不明な行為をしてきたのが腑に落ちない。しっかりと、コーヒーを顔にぶちまけられるという嫌がらせもされたが。

だが——惹かれる。

まるでそうなることが運命だつたかのように。

まるでそうなることが魂の定めだつたかのように。

チンクは恭也に魅かれていた。どうしようもなく惹かれていた。恐怖など一蹴するほどに――。

「タカマチ……キョーヤ……」

そこに込められた感情は畏怖か親愛か。嫌悪か愛情か。今はまだチンクにもわからない――何かであった。

第6話：運命邂逅

「……あれ？ 恭也ー、頼んでた食材ちよつと足りなくなない？」

「ああ、すまない。どうやら個数を勘違いしていたようだ」

「別にいいけど。珍しいわね、あんたが買い物間違えるなんて」

翠屋に様々な食材が入った買い物袋を届けに来た恭也だったが、桃子にそう突っ込まれて、フュンフに幾つか林檎を渡していたことを思い出す。その後の喫茶店がインパクトが強すぎてすっかり買いなおすのを忘れていた。

手伝おうかと桃子に声をかけようとしたが、店内を見渡すとすでにお客は二組程度。後三十分ほどで閉店時間を迎えるため、オーダーストップということもあり手伝うまでもなかつたようだ。

とりあえずこのまま帰るのは申し訳ないと判断した恭也は、厨房内に入り食器洗いなどの雑用をこなす。菓子の材料等は意外と重いものもあり、そういったものをメインに運ぶ。翠屋は従業員がほぼ、というか全てが女性のため恭也は厨房で大変重宝されてい

るのだ。

本当に人手が足りない場合——急病やなにかで店内の人手が少ない時は恭也も手伝うのだが、年配の女性に受けが良かったりする。それはやはり彼が幼い時から翠屋を手伝っていたのを知っているからだろう。

そうこうするうちに、店内の客もすべて居なくなり、翠屋の扉に臨時休業の看板をかけるとテーブルをある程度固めるように店内の中央に寄せ、すでに準備していた洋菓子や、軽食などを並べ始める。

その間にすでに他の従業員は帰っており、店内にいるのはフィアッセと桃子と恭也の三人になっているが、時計を見ると五時を回ったところだった。どうやら色々と時間をくっていたらしいようで、あまり時間の余裕がない。その原因の一部は恭也が喫茶店で時間を潰していたこともあげられるのだけど。

「えっとー恭也の知り合いでくるのは……二人だけ？」

「ん？ ああ。赤星と月村の二人だな」

フィアッセが確認するように聞いてきたので、恭也も素直にそう答えた。

赤星と月村という名前を聞いて、桃子が首を傾げる。

「月村くん？ 月村さん？ 初めて聞く名前ねー」

「月村さん、のほうだ。そうだな……赤星みたいに家にはきていないが、学校ではそれな

りに話す女性だ」

「女性!?!」

フィアツセと桃子が驚いたようにはもる。

え、なにこの子。何言ってるの?と、二人の物言わぬはずの視線が、言葉よりも雄弁に恭也に突き刺さっている。ガシャーンと翠屋にかん高い音が響き渡る。音の原因はフィアツセが手に持っていたボールを落としたからだ。しかし、二人ともそれが全く気にならないようだ。

「きよ、きよ、恭也!?! お、女の子!?! う、うそだよね!?! そんなこと万が一にもないよね!?!」

「ま、まて……フィアツ、セ……」

フリーズしていたフィアツセが再起動し勢い良く恭也の胸倉を両手で掴み前後に振る。ガクブルと頭をふられつづける恭也だったが、段々気持ち悪くなってきたため、フィアツセの両手を掴むと、優しく外す。恭也を殺して私も死ぬー、と泣き崩れそうなのフィアツセを落ち着かせるように桃子がフィアツセと恭也の間に割ってはいった。

「あんたが女性を呼ぶなんて珍しいわねー? おかげでフィアツセが暴走しちゃったわよ」

「……な、なに? お、俺が悪いのか?」

なんとなく理不尽に責められる恭也が多少面食らったように、桃子と泣きつき始めたフィアッセにどう対処すればいいのか本気で悩む。一体何故こんな事態になったのだろうか、と考え込む恭也に、もう駄目だ、こいつ。早く何とかしないと……と、生暖かい視線を送る桃子。

「で、どこまでいった関係なの?」

「どこまでもなにも、一日何回か話す程度だが」

「……聞き間違いかしら? もう一度聞きたいんだけど」

「だから、一日何回か話す程度だと」

「——まあ、そう、うん。あんたが女性を呼ぶなんて初めての快挙だったから期待したけど……期待した私がアレだったのね」

良かったわねーフィアッセと慰める桃子……その実ちよつとがっかりしていたようだが。フィアッセは暫く呆然としていたが、たつぷりと一分もかかってようやく恭也の言葉を理解したのか、立ち直る。暴走状態になっていた自分が恥ずかしいのか、耳まで赤くしていた。

「も、もう。恭也つてば——あまりおねーさんを驚かせちゃ駄目だよつ」

「あ、ああ……気をつけよう」

昼間にされたように、ちよんつと鼻先に人差し指をあてられる。実際は恭也は何故こ

んなにファイアツセが暴走したのかあまり分かっていなかったが、兎に角落ち着いたファイアツセ含む、桃子と恭也で準備を続ける。ファイアツセと桃子が料理の準備をし、恭也がテーブルや椅子の移動及び飾りつけを行う。意外に思うかもしれないが恭也は手先が器用なためこういったことは得意だったりするので。そうこうするうちに翠屋の扉がカランカランという響きの良い音をたてる。

「あ、申し訳ありません。本日はもう閉店と——」

「手伝いにきたよーかーさん」

「美由希ちゃんと同じです」

「家の方で作った料理を持って来ました!!」

やってきたのは美由希とレンと晶の三人で、その手にはラップに包まれ皿に盛られた料理が持たれていた。レンと晶の二人の合作なのだろう。美味しそうな匂いが恭也の鼻をくすぐる。しかし、そこでふとした不安に襲われた。

「——まさかとは思いますが美由希、お前も料理をしたのか?」

「私も手伝おうと思っただけだね。二人が手伝わしてくれなかったんだよー。疲れてるから座ってて」

心底残念そうな美由希に見えないように、レンと晶に親指をたてて、よくやったとジェスチャーを送る恭也。二人は喜んでいいのか微妙な表情だったが、美由希の料理の

酷さを身を持って知っているため恐らく死ぬ気でとめたのだろう。

「んしょ……んしょ……はい、おいーちゃん、これ」

三人だけかと思ったがその背後にもう一人いたようだ。高町家の末っ子なのは。他の三人と同じように皿を運んでいる。流石に身体に見合った大きさが落とさないように気を使って持ってきたのだろう。時間的に小学校が終わって家についてからすぐ着替えてこちらへきたはずである。大変だったろうと運んできた皿を受け取り、片手でののはの頭を撫でる。

「有難うな、なのは。本当に助かったぞ？ レンと晶も、な」

「えへへ……」

「今日は何時にもまして気合入れて作ったんで、師匠の口に合うと思います!!」

「……お猿の料理は塩分が強めやないか……」

ぼそりとレンが、嬉しそうな晶に突っ込みを入れる。聞こえるか聞こえないか、微妙な声の大きさであったがしつかりと晶は聞き取っていたらしく。

「お、お前だつてわけわからん調味料いれすぎだろ!？」

「鳳家秘伝の調味料は分けわからんことあるかい!!」

二人の言い合いが始まり……ああ、これはまた始まるなど恭也が思った瞬間、皿を持ったまま晶とレンが自由がきく足だけで戦いを始めようとして――。

「……レンちゃんと晶ちゃん、喧嘩しちや駄目です!!」

「う……」

「(ト、ト)めん。なのちゃん」

あつさりとなのはにとめられた。基本的に桃子やファイアツセはレンと晶の諍いを仲の良い二人のじゃれあい程度にしか考えてなく、とめようとはしない。酷い怪我を負ったりするのであれば止めたのであろうが、レンの絶妙な手加減と晶の人間離れた回復力。その二つが相まって微笑ましく見物できるわけだ。その実、二人のじゃれあいはい、一般的に見れば凄まじいハイレベルの内容であり、恭也と美由希は二人の戦いは晶の糧になると考えているため無駄にとめようとはしない。

しかし、なのはだけは別だ。基本的に争いごとを好まない性格なのもあるだろう。姉のような存在である二人が本気ではないにしろ、喧嘩をするのが嫌なのだ。そのため二人の争いを何時しか止めるようになっていた。なのはが居る場合は毎回とめられていたため、レンと晶はなのはに頭が上がりなくなってしまうというわけだ。

なのはに止められた二人は大人しく桃子達の手伝いに入る。美由希も自然に厨房に入ろうとしたが、そんな美由希の裏襟を恭也が引つ張って断固として阻止していた。後ろに引つ張られたため服が喉にひっかかり、ぐえつと蛙がひき殺されたときのような呻き声をあげる美由希。

「お前はこつちだ」

「うう……私もあつちを手伝いたいの……」

「……いつか、な」

美由希を連れて店内の装飾を行おうとした恭也だったが、手持ち無沙汰そうにしていたなのはがちよこちよここと寄ってくる。

「おにーちゃん。私もなにか手伝おうか?」

「そうだな……なのはかーさんの方を頼む」

「はい。行って来るね」

「気をつけるんだぞ」

「なのはでも厨房なのに私は!?!」

魂の叫びで訴えてくる美由希をスルーして、なのはを桃子の手伝いへと向かわせた。流石に少し美由希が可哀相にはなってくるが、今日のパーティは高町家だけではなく、それ以外の者も多く来る。そんな人たちを美由希の料理の餌食にさせるわけにはいかない……高町家の皆を犠牲にするのもごめんだが。

元々恭也がほとんど終わらせてたこともあり、あつさりと店内の装飾は終わり、二人とも手持ち無沙汰になる。厨房に手伝いにいこうかとも思った恭也だったが、どうやら桃子達のほうもほぼ終わっているらしい。それに下手に手伝いについて美由希までつ

いてきたら本末転倒となるため、恭也は美由希を見張りつつ椅子に座っておく。美由希は相当地に厨房が気になるのか、チラチラとそちらの方に視線を向けていた。

「……………」

恭也が感じなれた気配を意識の端で掴み、翠屋の扉まで行き開ける。もちろんその隙に厨房に移動しようとした美由希を視線で牽制しておくことと忘れない。翠屋の外には、丁度扉を開けようとしていたのか——開けようとした体勢のまま固まっていた女性が居た。

美しく伸びたスカイブルーの長髪が、さあつと吹いた風にたなびいている。日本人とは異なる透き通るように白い肌。エメラルドグリーンの瞳が印象的だ。誰もが我を忘れ、息を呑むほどの美しさを放っている女性であった。整いすぎた風貌は、時には冷たい印象を相手に与えるかもしれないが、女性はニカツとそれを覆すような笑顔を浮かべる。

「おおー、恭也。久しぶりー大きくなったねー?」

「先日あつたばかりですよ、アイリーンさん。それと、会う度にそれをいつてませんか?

毎回成長しては、そのうち二メートル突破してしまいますって」

「あははー。私から見たら大きくはなっているよーに見えるんだけどねー」

「それは置いておいて、お仕事の方はよく都合つきましたね?」

「前からわかってたことだしね。けっこー無理矢理予定あけたことは確かだけどね」

「そうまでして来て頂き有難うございます。美由希とレンも喜びます」

「あつれー。恭也は喜んでくれないの?」

いたずら小僧のような厭らしい笑みを浮かべ、ニシシと恭也を窺うアイリーン。アイリーンの不意打ちのような一言に、返す言葉が詰まり、どんな返答をしようか迷う。相変わらず年上の女性——といっても、桃子やファイアッセ、アイリーンくらいしかいないが、恭也は多少苦手意識を持っていた。別に嫌いだとかそういう感情ではないが。

「いえ、きてくれて嬉しいです」

「ほ、ほえ!」

結局、選んだのは素直な感謝であった。そのように率直に礼を言われるとはアイリーンも予想していなかったのだろう。今度は彼女が吃驚したようで、反応に困っているようだ。といつても、困ったのはほんの一瞬で、今度は綺麗な笑みを浮かべ……。

「恭也も成長しておねーさんは嬉しいかな」

アイリーンは笑顔を浮かべたまま両手で軽くギュツと恭也を抱きしめて——最後にポンと背中を叩いて翠屋に入店していく。それはまるで姉が弟にするような親愛のこもった抱擁であった。例え家族のようなアイリーンであっても、抱きしめられた恭也の顔が若干赤くなっている。人に見られていなかったとしても恥ずかしいのは恥ずか

しい。

「ハリー、ファイアツセー。お誘い有難うね、来たよー」

「わあ。アイリーン来てくれたんだ。こっちこそ有難うー」

店内からファイアツセとアイリーンの声が聞こえる。二人は幼いころからの知り合いで、幼馴染——というよりほとんど姉妹のような関係だ。アイリーンのほうが一歳年上のため何かと姉のような振る舞いをしている。見かけと名前の通り、日本人ではない。アイルランド系アメリカ人なのだが、日本語はほとんど完璧に話すことができる。いつても良い。その理由は、ファイアツセと長く付き合っているため、恭也や、その父である土郎と顔を合わせる機会が多かったからだ。そのため、恭也達と会話をするため日本語を必死で勉強したという過去があるのだ。

そしてアイリーンはファイアツセの母親が経営しているクリステラソングスクールの卒業生であり、若き天才と賞賛される現在注目されている新鋭の歌手である。ちなみに喉を痛めているファイアツセを心配して態々活動拠点を日本とし、同居までするという過保護っぷりである。

その後、晶とレンの友達も来たので翠屋へ入るように勧める。

二人の友達は時々高町家にも遊びに来ているので、恭也とも顔見知りとなっているのだ。予定していたメンバーも揃ってきており、残り僅かとなったところで確認してみる

と、来ていないのは二人。

「すまんすまん、高町。遅くなった」

「ごめんね、高町君。準備してたらぎりぎりになっちゃった」

確認した途端くるのは何かの法則だろうか。

赤星と忍が二人揃って姿を現した。赤星は手に寿司桶を、忍は綺麗にラッピングされた箱のようなものを手に持っている。

「いや、まだ時間前だし問題ないさ。良く来てくれた。歓迎する」

「そこで月村さんと会ったんだけど、高町の所にいくつていうから一緒に来たんだ。あ、それとこれは差し入れ。皆で食べようぜ」

「えっと……これ恥ずかしいんだけど私も差し入れを持ってきたんだ」

赤星は実家が寿司家のため何度か食べに行ったことがある。父親が見事な腕前だったため相当美味しかった思い出があるが、それを考えると寿司の差し入れはありがたい。対して忍の差し入れからは甘い良いにおいがしている。どうやら何かのスイーツが入っているのだろう。

恭也としては甘いものは苦手のため一瞬迷うが——折角忍が持ってきてくれたのだし流石に一口くらいは食べようと思いなおす。それに今日来ているメンバーなら必ず誰かが無駄にせず食べるだろうということは簡単に予想できた。

「とりあえず二人とも入ってくれ。そろそろ始まるかもしれない」

「了解。行こうぜ、高町。月村さん」

「うん……宜しくね、高町くん」

二人を翠屋の店内へと案内して、扉を閉める。カランカランとベルの音が暗くなった周囲に響いた。中に入った忍はまず石像のように固まった。目の前に居るのはどう見ても若き天才アイリーン・ノア。天使のソプラノと評判のSEENAと並ぶ大ファンの歌姫が何故か翠屋にいるのか理解できないようだ。

それはレンや晶の友達も一緒にアイリーンを囲むようにして、握手やらサインをねだっていたりする。大げさだと思いかもしれないが、それほどに蒼の^{アイリーン}聖歌は有名な歌手なのだ。アイリーンの騒ぎも収まり、家長である桃子の祝辞から始まり——高町家の入学祝いが静かに幕を開ける。

「いちばーん!! アイリーン・ノア歌いまーす!!」
静かに……。

「あ、お前!! この緑亀!! それ、俺が狙ってたやつだぞ!!」

「ほほー。早いもん勝ちやで? お猿のくせにノロマやなあ」

「ハ、このやろー!!」

静かに……。

「恭也く最近フィアッセとはどうなの？ うまくいつてる〜？」

「ア、アイリーン!?」

「ええ。何時も通りフィアッセは良くしてくれませんが？」

「……この、朴念仁めー!!」

静かに……………。

「へえ……なのはちやんつてゲームそんなに強いんだ」

「そ、それほどでもないんですけど……」

「なのはは凄く強いですよー？ 私とか恭ちゃんいつもぼこぼこにされてますし」

「そうなんだ。それは一度手合わせお願いしたいな」

「あう……恥ずかしいです」

静かに……………。

「うわー!? 晶が泡吹いてるよー!?」

「あー大丈夫大丈夫。晶っちは多分二、三分放置してたら復活するから」

静かに……………幕を開けた。



海鳴内にあるマンションの一室。ツインベッドに丸テーブル。テーブルの周囲には高価そうな椅子が幾つか並べてあった。ベッドと対極の位置には薄型テレビが置かれている。シンプルだが、全体的に質の良い品ばかりのようで、この部屋の持ち主は相当に資金的に余裕があるのだろう。

天井から柔らかい照明が部屋中を照らしていた。その部屋で、ベッドに寝そべるようにして、何か書かかれている用紙を眺めている人物は……山田太郎。色気がある男性とでもいえるのだろうか。ただ書類を寝そべって読んでいるというだけなのに、何か

しらの華がある。

「高町美由希——現在住んでいる家の住所は海鳴市藤見町64-5。母は高町桃子。兄に高町恭也。妹に高町なのは……城島晶と鳳蓮飛は居候？ 父は——死去か。しかし、この御時勢に居候とか珍しいなあ」

今時居候がいる家などそう多くはないだろう。祖父母は同じ海鳴に住んでいるようだが、どうやら一緒には暮らしていないらしい。書かれている美由希の情報を目で追うように確認する。

「海鳴中央を卒業……今年風芽丘学園に入学。一年A組所属。海鳴中央の時に親しい友人はなし、か」

太郎はそこまで確認すると持っていた紙を部屋にぶちまけるように投げ捨てた。寝そべっていた彼だったが、突如としてが起き上がり、ベッドの縁に腰を下ろす。

「二日で調べられる情報は所詮この程度。調べた感じ、ただの学生にしか見えないけど……そんなわけがない」

脳裏に朝に会った美由希を思い描く。圧倒的な気配。一般人ならばわからないかもしれないが、ある程度の力量を持ったものならば分かっただろう。明らかに違った。他の生徒とは一線を駕する、抜き身の刀のような鋭さを持った存在感。

気圧された——誰よりも何よりも。高町美由希が放つ研ぎ澄まされた、オーラとで

もいふべきモノに。突然獅子の目の前に素手で放り出されたかのような恐れを、向かい合ったあの瞬間確かに感じた。美由希が太郎に言いようのない恐れを抱いたのと同じように、彼も美由希の底知れぬ力量に恐怖に似たものを感じていたのだ。

だが、それ以上に——そそられた。

「何か武道でもやってるのかなあ……兄の高町恭也は何も感じなかったんだけど」

ぶつぶつと爪をかみながら昼間に遠くから眺めた恭也を思い出す。物静かな、大人っぽい雰囲気青年だとは思ったが……それだけだった。美由希のような絶大な気配を纏っていたわけでもない。無論美由希が常時その気配を放っていたわけではなく、隠していたようだが、ほんの僅かにその気配が漏れ出していたから太郎は気づくことが出来たのだ。

去年は校舎が違うせいだったからだろう。海鳴中央にあのような少女がいるのがわからなかった。それを悔やむしかない。もっと注意していれば高町美由希の存在に気づけたというのに。

「後悔しても仕方ないか……」

そして太郎は考える。どうすれば、全力の高町美由希と戦えるのか。無論、戦いを挑めば美由希は当然応戦してくるだろう。だが、それでは足りない。血で血を洗うような命と命を賭けた殺し合いを太郎は望んでいる。勘が告げてくるのだ……それで

は高町美由希の本気と戦うことはできない、と。美由希のようなタイプと全力で戦りあうには――。

「……これしかないね。あまり好みじゃないんだけどなあ」

部屋に投げ捨てた紙の一枚を拾い上げ、そこに書かれていた名前を指でなぞる。その名前は高町なのは。太郎は口元を歪めさせ――不気味な笑みを消すことは無かった。



宴が始まり一時間ほど時間がたった頃だろうか。大人組――桃子、ファイアツセ、ア

イリーンはお酒を嗜んでいる。桃子は日本酒。ファイアツセとアイリーンは軽めのチューハイといったかんじだ。子供たちが手を出さないように目を光らせながら、大人の会話に華を咲かせていた。

レンと晶は、それぞれ友達と一緒に料理やスイーツに舌鼓を打っている。晶はレンにのされたのが悔しいのかやけ酒ならぬ、やけジュースで何本もペットボトルをあけているのだが——不思議と酔っぱらっているように見えた。

赤星は美由希と剣の談義をしているのだろうか。こうきたらこう返すなどといった言葉とともに身振り手振りを加えて真面目に話をしているようだ。

忍は、意外なことになのはと交友を深めていた。外見では二人ともそうは見えないだろうが、生粋のゲーマー同士。話が完全に一致し、二人とも楽しそうに盛り上がっている。それを見た恭也は、多少無理にでも誘ってよかったと思えた。

その時、ポケットに入れていた携帯がブルブルと震え、パーティーの間は邪魔にならないようにバイブにしていたのだが、着信があるのを恭也に伝える。店内ででも迷惑になると考え、翠屋から外へと出て携帯を取り出すと着信画面に表示されていた登録者は……リステイ・楨原。即ち、銀髪の小悪魔だ。

うわあ……という微妙な表情になる恭也だったが、先日忍のことを調べてもらうよう頼んだ件もあったためでないわけにはいかない。ここで断っておくことになるが、別に

恭也は電話先の相手のことが嫌いというわけではない。逆に好意を抱ける女性だと思っている……変なからかい癖さえなければの話だが。

「もしもし——俺です」

『やつほー恭也。出るの遅かったけど変なこと考えてなかった?』

「……いえ、別に」

『あれ、おかしーな。ボクの予感が外れちゃったか。んー、まあ、いいか。それより今からちよつと出てこれるか? 昨日頼まれていた月村忍の情報を伝えたいんだけど』

「今からですか?」

昨日の今日で情報を集められたことに驚く。幾ら顔が広いリスティとはいえ、まさかたったの一日で忍のことを調べることができるとは全く予想していなかった。腕時計を見ると、まだ七時になったばかり。おそらくあと二時間程度はパーティーは続くだろうとふんだ恭也は、聞けなら早い方がいいかと判断した。

「ええ。構いません。場所は何時もの場所で構いませんか?」

『うん、実はボクもうそこで一杯やってるんだけどね。ま、話もすぐ終わるだろうし。来てくれたら嬉しいかな』

「わかりました——十分ほどで行けると思います」

『りよーかい。待ってるよー恭也』

携帯を切ると、恭也は翠屋へと戻る。

大人の会話をしている桃子に近づき、他の人間に聞こえないように耳打ちする。

「すまない、かーさん。少しばかり出てくる。すぐに戻れるとは思う」

「んー、早く帰ってきなさいよっ」

流石高町桃子、深くは聞かず恭也を送り出してくれた。アイリーンとファイアツセの追求を適当にかわしつつ、他の人間に気づかれぬように翠屋を出て、夜道を駆ける。恭也と桃子に言われるまでも無く、パーティーに戻りたいという気持ちはある。ましてや、美由希とレンの祝いの席なのだ。長い間席を外しているのがばれたら後で何を言われるか……。

夜道をかかなり本気で走ること数分、恭也の走る速度に驚く人たちを背に目的の場所にあっさりと到着する。『FOLX』という看板が嫌味がない程度で周囲を明るく照らしていた。ここらでは話題の喫茶店兼バーである。入店するとカランカランという音が響き、客の入店を告げる。恭也は店内を見渡すと——直ぐに彼女を発見した。カウソターの一番端の席で若干気だるそうに座っている。

彼女の名前はリステイ・楨原。夕方にあつたフュンフと同じような美しい銀髪。ただし、それほど長くは無く、肩までもない。端正な顔立ちで、見るものを問答無用で惹きつける魅力がある。煙草に火をつけ、一息。口から白い煙が店内に舞う。

「お待たせしました、リステイさん」

「ん、やあ、恭也。大丈夫、ボクもさっき来た所だしね」

挨拶を済ませると恭也はリステイの横の席に座るとすでに馴染みになったFOLXの店長が近寄ってきた。恭也と同じ位の身長で、なかなかの美形だ。この店長を以てやってくる女性客も多いとか。国見隆弘という名前で、リステイの知り合いらしい。そのためこの店で待ち合わせをすることが多いのだ。

「やあ、恭也君。何か飲むかい？」

「そうですね……アイス宇治茶お願いします」

「アイス宇治茶だね？　ちよつとまってる」

そう言つて奥へと消えていく国見。そんな飲み物があることに驚く、隣の席に座つていたカップル。確かに喫茶店も兼用しているとはいへ、バーがメインであるこの店にまさかそのような得体の知れない飲み物があるとは信じれなかつたのだろう。

「相変わらず変なモノをのむね、恭也は。まー、いいけど」

「意外といけるものですね。リステイさんも如何ですか？」

「謹んで遠慮するとするよ。ボクにはこれがあれば十分さ。飲み物じゃないけどね」

リステイは本当に美味しそうに煙草を啜えると——肺までしつかりと満たし、白い煙を吐き出す。ヘビースモーカーなのは、会つた時と変わらず、不思議と懐かしい気が

した。

「さて、恭也から頼まれていたことだけど——大概是調べられたよ」

「……今回は早いです、ね。もつと時間がかかると思っていました」

「ん……正直今回は楽な仕事だったしね。月村つて名前に聞き覚えがあるはずだよ。ボクの旧友の親戚と同じ苗字だったしね。ボクも確か月村忍つて昔何度かあったことがあるはずだよ」

コトンと話の邪魔にならないようにカウンターに置かれたアイス宇治茶……微妙に大盛り。サービスを有難く思いつつ頂く。その渋みが実に恭也の好みにマッチしている。

「世間は狭い、です」

「全くさ。旧友に駄目元で話を聞いてみたらどうやらまだ仲がいいらしくて、お蔭様で大体の情報は判つたよ。狙われている理由とかもね」

「話がうまく行き過ぎてる気もしますが……運がいいで済ませていいんでしょうか」

「いいんじゃない？ 全く判らないより百倍マシじゃないか。つと、詳しくはこの中にまとめておいたから、家でゆっくり読みなよ」

「有難うございます。リステイさんに頼んで正解でした」

「ふふん。そうだろうそうだろう」

立派な二つの果実が実っている胸を得意げに反らし、ニヤリと笑うリスティ。わざと見せ付けてくるようなリスティの行為に、視線をあさつての方向にむけ、A4サイズの茶封筒を受け取った。仮にも個人情報となる書類なのでここで見るわけにも行かない。一体誰が忍を狙っているのか気にはなるが、後で目を通そうと決める。

「さて、忙しいところ呼び出して悪かったよ。今日はもう帰ったほうがいい」

「え、ええ。すみません。とても助かりました、リスティさん」

「いいよいいよ。キミには何時もお世話になつてるしね」

「いえ、こちらこそ。このお礼は今度必ずしますので」

「楽しみにしてるから。それじゃ、バーイ」

リスティはまだ残るつもりなんだろう。煙草を吹かしつつ、頼んでいたお酒を軽くあおる。カランと氷が解けて音をたてた。恭也は国見にリスティから見えないように何かのお札を渡し、FOLXから翠屋へと戻るのであった。

急いで翠屋へと向かう恭也であったが、リスティと会っていたのは精々十分弱。往復の時間も合わせても三十分にも満たない時間であったが、これだけ席を外していたらやはり誰かが気づくものである。

翠屋に戻った恭也は美由希やファイアッセ、アイリーン達に質問攻めにされたが、のりくらりと彼女達の問いをかわす。正直に答えて貰えないと理解した美由希たちは何

時か聞き出してやる、というような表情で各々の語り合いに戻っていった。

時が進むのは早いもので――。

気がついたときには既に太陽が落ち、夜が支配する時間。時間は夜の九時を回っている。街灯と道に沿って建てられている家の灯りのみが標となっていて、道行くものも少ない。翠屋で開催されたパーティも先程終了し、皆が帰宅の流れになっていた。

アイリーンは車できていたのでそのまま帰り、レンと晶の友達はそれぞれが送って帰っていた。例え変質者などと遭遇してもレンと晶ならば余裕で撃退できるだろう。美由希はなのはを高町家へと送り届け、フィアッセと桃子が翠屋で片付けをおこなっている。

赤星は一足先に暇していたので、恭也は忍を海鳴駅まで送っていく途中なのだ。前と同じように迎えの車が海鳴駅まで来ているらしい。幾ら灯りがあるとはいえ暗い夜道を歩くのは心細いものだ。だが、忍は不思議と不安など全く感じていなかった。横に恭也がいるだけで、言葉には出来ない安堵が心を覆っている。

二人ともどちらかといえばおしやべりというわけでもなく、帰り道は沈黙が続いていた。生来より口数が少ない恭也とは違って、忍はとある出来事が起きるまでは明るい性

格だったのだが、幼少の事件のせいと自分自身の出生の秘密により友達を作ろうとせず、人と関わらないように生きてきた。

学校では机を友達とすることで他人と会話をすることを拒絶している忍だが——二人で歩いている以上机に頼るわけにもいかない。何か話さなければ、と外見はクールだが、内面は焦っている忍なのだが、こういうときに限って会話の内容を思いつかない。

「今日は無理に誘って悪かった。月村にも予定があつただらうに」

「え!? ううん、大丈夫だよ。こちらこそ凄く、楽しかったし」

「そうか。そういつてもらえたら気が楽になる」

そんな忍の内心を知らずに恭也が礼を言う。それに驚いたようにビクリと身体を震わせながらも、忍は照れたように返す。忍の楽しかったという感想は別に恭也に気を使つて言つた訳ではない。どれくらいぶりになるかもわからない……只の人間の知り合いと話し、笑う。そんな当たり前のことが——忍は心の底から楽しかった。

本当は駄目だと頭では分かっているのだ。ただの人間と一緒にいるのは……何時か必ず関係の破綻が訪れるのだから。それでも、久方ぶりの大勢との語らいはその決心を鈍らせるほどに、喜びしかなかった。

その時、一台の自動車がライトを二人に向けながら走ってくる。とても住宅街を走る

スピードとは思えない、暴走といつてもいい速度だった。黒塗りの高級そうな車だったが、その速度は落ちることを知らず……不吉な音をたてながら二人を——否、忍めがけて向かってきた。恐ろしい速度だったため、忍の身体が硬直。避ける事は出来なかつただろう——もし、忍が一人だったならば暴走車の餌食になったかもしれない。

だが——忍は今一人ではないのだ。

肩と足に何かが触れたと認識した瞬間……景色が変わった。まるでエレベーターに乗ったときに感じる浮遊感。まさにそれだ。暴走した黒塗りの自動車は、忍の下のゴミ袋をひき、中身を道端に撒き散らしながら、あつという間に去っていった。何故自分が助かったのか改めて見る。それは簡単な理由だった。

忍は恭也に抱かれて——俗に言うお姫様抱っこである——道と家を分け隔てる石垣の上に立っていたのだ。見事なバランス感覚で、恭也は女性一人を抱いているというのに、微塵の揺れもない。

恭也は暴走車が見えなくなり、安全なのを確信すると石垣から飛び降り忍を地面に降ろし、立たせる。そして、ポケットから携帯を取り出すと先程の暴走車と交差した瞬間に記憶したナンバープレートと警察に伝えた。最も果たしてそれがどれだけ意味があるかわからないが……しないよりは全然ましだろうという判断を下したからである。

「あ、ありがとう……高町君」

「いや、危なかったな。危険な運転をするやつもいるようだ……気をつけたほうがいい」
「……うん」

間違いなく今の暴走車は忍を狙ったものだろう。確かに危険な運転をしていたようだし、忍を狙っていたのも確実だ。だが、轢こうとまではしていなかった。以前忍を狙った男性と同じ、命までは奪わない……おそらく脅し目的。

そのことを忍は果たして判っているのだろうか。ちらりと横目で忍を窺う恭也だったが……忍の表情は何時も通りだった。今まさに命の危険に晒されたというのに。ただの暴走車だと思っているのか。それとも、こういった出来事に慣れてしまっているのか。

「月村——」

「……うん、どうしたの？」

「——いや、何でもない」

聞きたくなる気持ちをぐっところらえて、恭也は周囲の気配に注意しつつ海鳴駅まで向かう。その内心に気づいているのか、あえて気づいていない振りをしているのか、ともかく忍も黙って大人しく恭也の後に続く。

住宅街とは違って、海鳴駅までくれば人も多い。暴走車が突っ込んでくることはないだろうと一息つくが、先日のように忍を狙った輩が人混みにまぎれて現れないとも限ら

ない。怪しい気配を放つ人間はないことに安堵しつつ、ロータリーへと視線を向けたら、そこには毎回忍を迎えに来ていたスーツ姿の麗人がいた。

「あ、ノエル。お待たせ」

「いえ。お帰りなさいませ、忍お嬢様」

深々と忍に向かつて一礼をするノエルと呼ばれた女性。恭也も無表情ということに關しては中々のものだと思自負してはいるが、ノエルはさらにもう一步上手だった。人間ではない——まさに人形のような美しき。例えるならそうとしか言いようのない容姿だ。

「随分遅くまで付き合せてしまいまして、申し訳ありません」

恭也がノエルに対して頭を下げる。以前から誘っていたならばまだしも、今日突然誘って、こんな遅い時間まで付き合せてしまったのだ。

「いえ、こちらこそ忍お嬢様に良くして頂き感謝の言葉もありません」

対してノエルは恭也にも礼儀正しい。忍とノエル。果たしてこの二人はどのような関係なのだろう……少しだけ恭也は気になった。ノエルは停めてあつた自動車のドアを開け、忍を招き入れる。自動車に乗り込むと、忍は恭也と視線を合わせ、微笑んだ。それはとても綺麗な微笑だった。今まで見た月村忍のどの笑顔よりも素敵であつた。

「今日は本当に有難う、高町君。また明日——」

「ああ。来てくれて嬉しかった。また明日、な」

ノエルは扉を閉め、運転席へと乗り込むと車を出発させ——夜の街へと消えていった。

それを見送っていた恭也だったが、ため息をつく。

やはり忍は狙われていたのだ。誰が狙っているのか判らないが——リステイから貰った情報を見れば判明するのだろうか。しかも、昨日の男のような一般人に毛がはえたような相手ではどうやら今度はすまないらしい。

ピリピリと皮膚を打つのは強者の気配。遠く離れていても感じるのは、先日出会ったフュンフに比肩する超一級の圧力。忍を観察していたそれらは、ゆつくりと獲物を彼女から恭也へと変更する。恭也の肉体を刺し貫くのは——六つの視線。恭也はそんな不吉漂わせる視線に晒されながらも一切の緊張も恐れもなく、遠く離れた七階建てのビルの上を見上げ、鋭い視線のまま——そこにいた相手に向かって手招いた。



海鳴駅のすぐそばにある七階建てのビルの屋上で七人の男女が眼下にひろがる人波の一面を見下ろしていた。彼らは北斗とよばれる暗殺集団。北斗とはわずか七人『貪狼』『巨門』『禄存』『文曲』『廉貞』『武曲』『破軍』と名乗る七人から構成されている。十年以上前は活発に活動していたため有名だったが、何があつたのかここ十年はさほど精力的な行動はおこしていない。そのため新興勢力に押されはするものの未だその名は十分に轟いている暗殺集団だ。

「あのお嬢ちゃんがクライアントの言つてた相手だネ」

「……」

細目が特徴の片言の日本語を話す男性の廉貞に、口元を隠すように大きなマフラーを巻いている文曲の視線の先——ロータリーに止めてある自動車の横で話しているノエルと忍と恭世の三人がいた。クライアントから依頼されたターゲットは月村忍。厄介な内容として——殺しは厳禁。大きな怪我すらも負わせるな、ということだ。

「腕一本くらいはいいんじゃないの？」

「やれやれ。貴方はその乱暴な性格をまずはどうかしててください」

「仕方あるまい。それが先方の絶対条件なのだから」

条件の厳しさに細身の若い男、貪狼が面倒くさそうに言い捨てる。それに中肉中背のオールバックに髪を固めている神父服の禄存がやれやれと肩をすくめ、腕組みをした二メートルをゆうに超える大男の巨門が貪狼を戒めるように言い放った。

そして彼ら五人より遙かに身長が小さいツインテールの少女——武曲が、屋上から身を乗り出すようにして恭也達を見つめる。

「……あれがノエル・綺堂・エアリヒカイト、か。現在起動している数少ない自動人形。しかもエーデイリヒ式・最後期型だつて？ 夜の一族の王族を守護する機体じゃないか。確かにアレに守られている限り人間では手出しは無理だろうね。遠目で見ただけで分かるよ……なんだよ、あの無茶苦茶な完成度は」

呆気にとられていた武曲は、遠く離れたノエルを呆れたような目で見る。クライアントからはただの自動人形としか聞いていないが、情報はきちんと渡せと怒鳴りたくなつた。それには北斗のメンバーも同感であつた。彼女が言ったように、一目で判る——恐ろしいまでの完成度。

あれほど極まっている存在を知っていて本当にただの自動人形と断じたのか、それと

も敢えてこちらを試すために嘘をいったのか。できれば後者であつてほしい。なぜならば、もしも前者だったならば今回のクライアントは底知れない阿呆としか言いようがないからだ。

「厄介だが、なんとかならないこともないか」

とある依頼を受けこの街についてから早速、ターゲットの月村邸を偵察にいったのだが、生憎居たのはノエルのみ。肝心の忍を見かけなかった。そのため暫く月村邸を窺っていたのだが、ノエルが車で外出。それを必死で追いかけて付いた先がこの海鳴駅。そして、近くのビルの屋上でノエルの行動を見張っていたのだが、それが実を結んだ。

ターゲットの忍がようやく現れたのだ。その友達らしき男性も一緒だったが。ちなみに随分と離れているが皆双眼鏡などをつかわずともしつかり見えている。なにしろ北斗は全員が夜の一族と呼ばれる人外の化け物達。五感や身体能力は人間の比ではない。一応は六人が六人ともターゲットを確認しているというのに一人だけ、ぼけーとしたように屋上に座り込んでいる女性が居た。

明らかにやる気が見られない彼女こそが——北斗が長の破軍。水無月殺音。夜の一族の頂点にもつとも近きモノ。そんな彼女を見かねた武曲が人差し指で顛顛をコンコンと叩く。まるで痛む頭を抑えるように。

「おい、破軍。お前もターゲットを確認しておけ。確かに取るに足らん仕事ではあるが

——依頼は依頼だ」

「はい。はいはいはい」と

気合が一ミリとも入っていない返事をして殺音が立ち上がる。どっこいしょというあたり少し親父臭い。見かけは超弩級の美女だというのにもつたいなさすぎる。ふらふらと酔っ払いのように屋上の端まで歩いていき眼下を見おろす。

海鳴駅のだいぶ少なくなつたとはいえ、まだ大勢居る人達が邪魔でターゲットを見つけることが出来ない。そんな中、武曲がポツリと呟いた。

「……あの男。どこか見覚えがあるが……」

口に出したとおり、どこかで見た覚えがある。あの男性を。遠い昔に。どこかで。

首を捻るがなかなか思い出せない。それでも確かに記憶の片隅に——。

そうこうするうちにノエルが運転した車は忍を乗せて帰宅してしまった。今回のところはターゲットを確認できただけでよしとするか、とする北斗だったが。

その時——。

「なっ!?!」

誰の声だっただろうか。

北斗の誰かが驚く声をあげた。その場に居た全員の身体が強張った。

廉貞は驚きのあまり何時も細い目が大きく見開いた。

文曲はマフラーで隠された口元がぼかんと開いたままだった。

巨門はその巨体が縮こまるようにぶるりと震えた。

貪狼は恐怖に負けたように一歩後ろに引いていた。

禄存は自分の目で見ているモノが幻ではないのかと疑った。

そして、武曲はようやく思い至った。確かに思い出した。あの青年が——遠き昔に殺音と盟約を交わした勇氣ある少年の面影と重なり合うことに。

水無月殺音は——。

直線にして百メートル以上の距離はあろうかというのに、人の目では豆粒のようにしか見えないはずだというのに、確かに恭也は北斗達を見ていたのだ。恐ろしいほどに冷たい目で。恐ろしいほどに殺気のこもった目で、見せ付けるかのごとくそんな彼が手招いた。

言葉にせずとも雄弁に伝わる——圧倒的な殺意。

遠く離れているというのに、恭也の気配は、殺気が迸るように周囲の空間すべてを満たし支配下に置く。今までこれほどの圧迫感を受けたことはあつただろうか。間違いなく経験もなく、覚えもない。

ツケタ見つけたみつけた——恭也!!

世界を凍らせる化身が目覚めた。

世界を恐怖させる化け物が目覚めた。

世界を破壊する超越種が目覚めた。

十余年もの昔——新星が如き眩い輝きに魅せられ、魅入られたが故に交わした盟約により本来の己を眠らせた水無月殺音は、覚醒の咆哮をあげる。殺音の足が屋上のアスファルトをえぐるように蹴りつけると爆発をおこしたかのような破裂音と破壊音を残し、北斗の眼前から姿が消えた。ひたすらに空を駆ける。重力を味方につけるように落下していった。目標は一つに決まっている。それ以外にありはしない。

ただ、自分が求めていた恭也おとしこに向かつて——。

凄まじい勢いで、殺音は地面に激突した。爆撃染みた激突音が周囲に響く。粉塵が舞い、瓦礫が宙を飛ぶ。驚いたような人たちの叫び声が聞こえるが、そんなものはや気になる。耳に入ることはない。

殺音自身当然無傷とはいえない。七階からアスファルトに超速度で飛来したのだ。額から血が流れ出る。だが、これも野次馬の声と同じで一切耳に入らない。二人は向かい合う。十余年の時を越え、この時巡り巡った運命が邂逅した。

「会いたかった!! 会いたかったよ!! 私の——運命!!」
きょうや

第7話：運命交差

「日本の食べ物って凄く美味しいツスよねー」

海鳴商店街の中央に位置する、世界中にあるであろうとある某有名ハンバーガーチェーン店……マックとドナルドの二階の隅つこのテーブルで三人の少女達が座っていた。その内の一人の茶色より赤に近い髪色の少女がハンバーガーを齧りながら天真爛漫な笑顔を浮かべ、残りの二人——チンクとクアットロに語りかけていた。室内の光を反射して、頭につけている髪留めがキラリと光る。

少女の前には今食べている物以外、四つも別の種類のハンバーガーが置かれていた。その細い体のどこにそんなに入るのかと不思議になるくらい少量である。チンクとクアットロの二人の前には対照的に一個のハンバーガーと飲み物とポテトのセットメニューだけだ。

本来ならチンクも目の前の赤髪の少女と同等の食事の量を取るが、エネルギーを消費していなうえに夕方近くに散々食事をとったばかりのためこれだけの量でも充分であった。

「たかがファーストフードと思うなかれツス。他の国に比べたら全然レベルが上ツスから」

「そうねえ。それには同感だわあ。でもねえ、能力も使っていないのにそんなに食べたら太るわよお、ウエンデイちゃん」

嬉しそうにモグモグと頬張る少女——ウエンデイの手が一瞬止まるものの、悩んだ表情を見せるが再び食べることを再開させる。馬の耳に念仏だったようで、忠告したクアットロはハアとため息を吐き、コーラが入った紙コップにささっているストローに口をつけた。

ウエンデイ——彼女もまたと二人と同じナンバーズの数字持ちの一人。遠距離戦においては組織でも上位に位置し、破壊力、という点においてはナンバーズの序列十位の狙撃者ツエーンには劣るが、正確で緻密な射撃能力を誇り、その精度の高さ故に星をも落とすのではないかと噂が広まり何時しか星穿つ射手などと呼ばれるようになった少女である。

「それにしても情報を集めるなら大都市のほーに行つた方がよかつたんじゃないツスカ

ね？」

新たなハンバーガーを齧りながら、ウエンデイは素朴な疑問をクアットロにぶつけるが、返ってきたのは半眼でこちらを見返す姉の視線だった。まるで、できない生徒を見る先生のような呆れたような様子が見て取れた。その視線に耐えられなくなったのかウエンデイは逃げるように次のハンバーガーにとりかかる。そんな妹にため息を一つ。クアットロが人差し指で眼鏡を押し上げ、首を振った。

「来る前に話したのを聞いてなかったのかしらあ？」

「う……ごめんツス、クア姉」

「全く……お前ももっとしつかりと話を聞くべきだぞ、ウエンデイ」

ふふんとなぜか勝ちほこったチンクにじとーとした半眼でウエンデイは見返す。

「チンクは理由覚えてるんツスか？」

「……」

勝ち誇っていた態度が一変。チンクが痛いところをつかれたように、視線をそらす。それに呆れたウエンデイが肩をすくめた。

「やれやれ。チンク姉だつて覚えてないんじゃないんツスかー!!」

「あ、姉は色々忙しかったから聞き逃しただけだ!!」

「理由はどうあれ聞き逃してるじゃないツスか!？」

ギヤーギヤーと互いに罵り合う姉妹二人。

そんな二人に、再度ははあとため息をついて、クアットロがポテトをつまみ口の中に放り入れる。

「もう一度説明するからあ……しつかり聞きなさいよお、二人ともお」

「う……すまん」

「……了解ツス。お願いするツスよ、クア姉」

クアットロが少しばかり機嫌が悪くなった様子で、間延びした口調ながらも強めの語気で言い合いをしていた二人に注意した。二人は罰が悪そうにいがみ合いをやめ、姿勢を正し、クアットロへと身体を向ける。

「はつきり言つてこの日本という国でたった一人を、しかも情報もろくにない輩をさがしだすのはあ、難しいわよねえ？ だからこそ場所を絞つて調べたほうが効率はいいと思うのよお」

「しかし、場所を絞るといつても……」

「そうねえ。彼の——ああ、トーレ姉様曰く彼らしいけどお、関連する場所なんか不明だからあ、日本で強力な化け物が居る場所を重点的に調べようと思つてるのよお。強い力の元には強い力を持つ者が集まりやすいからあ」

「なるほどツス。でも、こんな地方の街に化け物ついていたツスか？」

クアットロの説明にウエンデイがコーラを飲みながら首を傾げる。日本にも確かに人智を逸した化け物が複数いるが、この海鳴に現在そんな存在がいたかどうか思い出せない。

「居たわよお。しかもアンチナンバーズの一桁級かしらねえ」

「ぶはあ!？」

序列一桁。即ちそれ——伝承級という単語に飲んでいたコーラを噴出すウエンデイ。真正面に居たチンクが頭から霧状になったコーラを浴びせられた。最初何が起こったかわからなかった彼女だったが、状況を判断した瞬間、目元がピクピクとひきつらせた。ごぼごほと咽るウエンデイだったが、落ち着いた後に自分が飲んでいたコーラをチンクにぶっつけたことに気づき顔を青くする。

「ご、ごめんなさいッス、チンク姉!! わ、わるぎはなかったんッスよ!!」

「一日に二度も飲み物を頭からかぶせられるとは思ってもいなかったぞ……」

ぶるぶると握った拳を震わせるチンクだったが、何時の間にか移動して被害をさけていたクアットロが、ハンカチでかかったコーラを拭き始める。

「軽く拭いてあげるけどお、ちゃんとお風呂で洗い流しなさいよお? それと、チンクちゃんもこんな場所で騒ぎ起こさないでねえ?」

「く……」

「た、助かったツス。クア姉」

この場所で暴れだされたら適わないとクアットロが先手を取って、チンクを嗜める。機先を制された彼女は後で覚えておけというように、親指で首を搔つ切る仕草をするが、ウエンデイはブンブンと音がなるような勢いで横に振った。そして、誤魔化すようにクアットロに対して質問をぶつけようと口を開く。

「ええつと……さつき言つてたじゃないツスカ、伝承級がこの街にいるつて。そんな情報聞いてないツスよ!?」 だって、アンチナンバーズの序列一位は永久欠番。序列二位の未来視の天眼は確か東欧で確認されたんツスよね? 序列三位の執行者は絶賛行方不明中。序列四位の魔導を極めた王は、数年前に封印されたばつかツス」

「序列五位の鬼王は数百年近く自分の領地から出てきてないしな。序列六位の百鬼夜行は最近北米で確認されたはずだ。序列八位の猫神も自分の住んでいる領域から出てくることはめつたにない。序列九位の魔女は引きこもりだし」

「遭遇の可能性があるのは執行者くらいだとは思ふツスけど……どう考えてもどうしようもない相手だと思ふツスよお」

次々とあげられるアンチナンバーズの一桁台。その中の一人、魔導を極めた王はあまりにも危険すぎた怪物だったため、当時のナンバーズの数字持ちとも幾度と無く激突したという。数十の街を壊滅させ、数十万以上もの人の命を奪った狂った怪人。ナンバー

ズに災害指定までされた曰くもある。余りにも狂気染みた行動を繰り返したため数年前に執行者と魔女。執行者を慕う数人のアンチナンバーズ二桁台の手によって封印されたという。色々と推測する二人だったが、それを尻目にクアットロはチンクの髪を一通りふき終わつたようだ。だが、かけられのがコーラのため髪がベトベトするのが不快感を感じさせる。

「二人ともお、私の話をちゃんと聞きなさいよお。私はこう言つたわよお？
居たわよおつて」

「ええつと……過去形ツスカ？」

「そうよお。三百年ほどまでにこの近くの国守山に封印された怪物。国そのものをその身一つで落とすことも可能ではないかとも言ひ伝えられる人外の中の人外。あらゆる獣達の王。その名を、ざから」

「——聞いたことがないな」

「それはそうよお。だつて、三百年前に封印された化け物よお？ 本部の古い倉庫をあさつてようやく発見した情報なのよねえ。アンチナンバーズの一桁台はナンバーズで指定できないし、当時すでに九人の一桁がいたからナンバーズからは特例でこう呼ばれたらしいわあ。アンチナンバーズの序列零位、国喰らいのざから、つてねえ」

「そんな化け物がこの近くに封印されているんツスカ!？」

「そうらしいわよお。そういう理由で、まずはここを選んだわけよお。ここで暫く様子を見てから、次は鬼王か猫神のところでも偵察に行きましようかしらねえ」

鬼王か猫神のところに行く聞いて頬を引きつらせたのはウエンデイであった。猫神はまだ良い。彼女はどちらかといえば人類寄りだからだ。古い書物によるとかつては人間、夜の一族問わず殺戮を繰り返していたと言うが、ナンバーズにも時には手を貸したりなどいつ頃からか親人類とでもいべき唯一のアンチナンバーズ一桁台の怪物となっていた。

だが、鬼王と呼ばれる存在は決して関わってはならない禁忌であると徹底されている。アンチナンバーズの怪物たちの中でも古参も古参、最古参。時代を遡る限り千年もの昔から歴史にその名を残しているとも言われている。彼だけではなく、その配下もまた化け物ぞろいで、ナンバーズの実質トップの者から絶対に手を出すとまで言い含められている。

そんな化け物のもとまで行かなければならないのか、と気分を重くするウエンデイを尻目に、話も落ち着いた三人は残されたハンバーガーを食べきろうと手を動かそうとした瞬間――。

「……?」

世界全体が地震を起こしたように、揺れた。慌てて周囲を見回すが、それに気づいた

のはチンク達三人だけらしい。だが、確かに揺れたのだ。錯覚であるはずがない。

ここから少しばかり離れた場所——立ち昇るように感じ取れる圧倒的な威圧感。自分達に向けられたわけでもないのに、許しを請いたくなるほどの恐怖が足元からじわじわと這い寄ってくる。

逃げる——三人の戦闘経験からくる直感が同時に三人の頭に響いた。だが、これで逃げる事が出来たらどれだけ楽だろうか。彼女ら三人は人類最後の砦。ナンバーズの数字持ち。異端を狩る異端。この異常な事態の原因を放置して逃亡することは許されない。三人は互いに頷き、絶対的な気配を振りまく存在が居る方向へと、駆けて行った。



両者の対峙は、短くも濃密に凝縮された一瞬であった。逃げ惑う人々の悲鳴をバックコーラスに、数メートルの間合いを取って、二つの人影が対峙する。

一人は短く切られた黒髪。黒尽くめの青年。まだ若く——だが、どこか風格を漂わせる雰囲気醸し出している。自然体でその場にゆったりと立っていた。向かい合う敵を窺う瞳には、喜びと驚きがないまぜになったような感情が渦巻いている。

もう一人は女性。漆黒の腰近くまで伸びた髪を紐で軽く結んでいる。黒い上下のジャージという色気も何もない格好だが、それでも見るものを惹きつける魅力があった。地面に激突した影響で額から赤い雫が零れ落ちる。それを手の甲で拭う。その表

情は嬉々としていながらも、明らかに凶悪で狂悪。ある種の狂喜を漂わせていた。

その光景は時間を止めてしまえば美しい絵画にしか見えなかっただろう。だが、周囲に満ちる殺気だけはどのような画家でも再現は不可能に違いない。二人の身体から放たれる——常人でも視覚できそうなほどの極限にまで高められた圧力。嵐の後の川のように、激しく、濁流となつて、周囲を覆い始める。物理的な力を放つてはないのかと錯覚させさせる、超絶的な二人の気配。その二人を囲うように粉塵はまだ舞つてい

る。溢れんばかりに迸る二人の殺気。これが前哨戦だといわんばかりに、巨大で、強大で、絶対的で、圧倒的。粉塵が舞うその場所は確かにただの駅前広場だったはずだ。だといふのに、その場所は幻想的な世界へと様相をかえた。どくんどくんどくん、と普段では考えられないほどに心臓が高鳴る。緊張したような、期待に胸を膨らませるような、そんな喜びで。

「あの時から十一年。俺のことを覚えているか、水無月殺音」

「覚えているよ、不破恭也。一日たりとも忘れるものか。忘れてやるものか」

「俺もだ、殺音。お前を夢見、幾千の夜を過ごした」

恭也が問いかけ、殺音が答える。

そして、恭也の言葉に殺音の背筋をゾクゾクした快感が駆け巡った。

「これまでの長い人生で一度も感じたことがない。言葉に表現できない陶醉感。
「分かるよ、恭也。キミがどれだけ強くなったか」

「ああ。だからこそ俺も分かる。お前がどれほど桁外れの化け物なのか」

「そうかな？でも、負けるつもりはないんでしよう？」

「無論だ。戦えば勝つ——それが不破恭也の在り方だ」

一言一言が両者に巨石のような重みをのしかけてくる。だが、二人ともお互いのプレッシャーを弾き返すように淀みなく応じていく。二人の間ではそれだけで十分だった。十一年ぶりだというのに、二人は互いの全てを不思議と理解することが出来ていた。だからこそもはや、これ以上語ることは無し。いや、後ほんの僅かだけあった。互いの万感の想いを言葉に乗せ——。

「俺のこれまでの修練は——」

「私のこれまでの人生は——」

「——お前キミのためにあった!!」

何が開幕を告げるファンファーレになったのか分からない。二人は同時にカツと目を大きく見開き、地面を強く蹴りつけた。その衝撃で二人が蹴り付けた地面が抉り削られる。強く踏み込んだ足が、大地を揺らす。

殺音の拳が恭也の顔に放たれた。その速度はまさに雷光。人の認識できるスピード

をゆうに超えていた。その拳を認識した瞬間に避けようとしたら恭也の顔面は打ち抜かれていただろう。恭也はそれよりも早く——それこそ殺音が拳を打ち出す直前に回避に転じていた。その行動を取れたのは、殺音の一挙手一投足を集中し、把握し、理解していたからであろう。見える。見えるのだ。恭也には筋肉の微細な動きまで。極限にまで集中した恭也にはそれこそ血管の動きまで観察できるような別世界の領域に足を踏み入れていた。

だが恭也の見切りをもつてしてもその一撃は間一髪であつた。何千回何万回も戦つたイメージの殺音など相手にもならぬ疾風怒濤。自分が考えられる限りの上限で想定していた殺音のイメージをも置き去りにする殺音に、不思議と感謝の気持ちしかなかつた。

その場で足を止めるようにして、向かい合う。殺音が放つは槍のような鋭い拳の連打。それをひたすらに避け、一撃たりともまともに当てることを許さない。その連打の合間。隙ともいえぬ隙。数十分の一秒の世界にて、死角となる角度から恭也の蹴りが爆ぜる。

恭也の蹴りは鋭く速く、そして死角のためワテンポだけ反応が遅れた。避けれないと判断した殺音は腕を縮め、その蹴りを受け止める。防いだ腕を素通りするように、身体の中を言ひようのない衝撃が浸透し、ぐらりと殺音の身体が泳いだ。カハツと空気が

肺から漏れ出でる。それは本来ならばありえないことだ。ただの人間の蹴り一撃がここまでインパクトを与えるはずがない。少なくとも自分以外ならばこの蹴りだけでも戦闘不能になってもおかしくはないほどの威力だ。あまりの破壊力に身を震わせながらもそれでも彼女の嬉々とした表情に変化はない。

追撃をかけようとする恭也を嘲笑うかの如く、身体が泳ぎ不安定な状態から高々と振り上げられた拳が、恭也が追撃するよりも早く振り下ろされた。圧倒的な破壊力だけ求めた拳が振りおとされるのと、恭也が全力で回避を試みるのとは、ほぼ同時のことであつた。間一髪で、殺音の拳が無人となつた地面を打ち砕く。轟音とともに、打ち砕かれたアスファルトの破片と粉塵が再度舞いとぶ。ただ殴りつけただけでありながら、道路に巨大な風穴を波状に作り出す。あまりに馬鹿げた威力、破壊力。

難を逃れた恭也は、相変わらず感じる殺音の気配を全身に浴びながら地面を転がり、体勢をたてなおす。間合いをあげ、身構えなおした。その時、さらに深く鋭くなつた殺音が周囲に満ち始めた。猛烈な危機感が全身を襲う。

殺音の瞳が赤く怪しく光つた。足の爪先が地面に深くめり込むほどに、両脚に力を込める。どれだけの力をこめているのかわからない。想像もつかないほどの踏み切りで、殺音はその身を翻す。人を遙かに超越した、圧倒的な人外の挙動。生物がたてたとは思えない、破裂音とも聞き間違えるような、地面を蹴りつけた音だつた。

恭也が反応する。だが、僅かに襲い。その一瞬の差が殺音にとっては十分だった。左腕が閃光のように繰り出される。風を引き裂き、殺音の姿が稲光のような一筋の光となった。光拳一閃。彼女の拳が恭也の顔に直撃する刹那、無理には避けようとせず、恭也は殺音の迫ってくる拳を防ぐように片手の掌を受け止めようとした。誰がどう見てもそれは愚行でしかなかった。圧倒的な破壊力を秘めた拳をたかが人間の力で受け止められるはずがない。

殺音の拳が恭也の掌に着弾。その手ごと恭也を吹き飛ばす——はずだった。柔らかない羽毛のような触感を拳に残し、殺音の視界は反転する。グルリと一回転したのだから。視界には星々が煌く夜天が見える。強かに打ち据える背中。痛みよりも、驚いたことは自分の爆発的な破壊力と突進力の拳を完全に殺されて、投げられたことだ。

だが、それも当然のことだと思えてしまう自分に苦笑しかできない。驚きもすぐに消え、殺音の視界一杯に迫る恭也の踵。殺人的な凶悪さを示しながら落とされた。無理矢理に横に転がり、その踵落としをやり過ぎ、掴んでいた恭也の手を力で切ると、後方へと飛びさがりながら殺音は、恭也との間合いを取った。

再び対峙する二人。今度はそう易々とお互いの間合いに侵入することができない。力任せに攻撃してくる殺音だったが、それを鼻で笑うことはできない。正確で緻密な攻撃の方が恭也にとっては読みやすいからだ。殺音は、圧倒的な力と絶対的な速度で敵を

圧殺する。故に恐ろしい。どの状態からでも殺音の一撃は必殺と成り得る。

——高揚している？

こんな場所で戦っているというのに。何時人目についても可笑しくはないというのに。たった一撃で殺されるかもしれないというのに。確かに、恭也は殺音と戦うことに高揚感を抱いている。幼い時の恭也では、殺音の渴き理解できなかつた。だが——今ならばできる。

両者の戦闘意欲はとどまるところを知らずに、逆に膨れ上がっていく。特に殺音の様子は顕著であつた。爛々と瞳を輝かせ、獰猛に口角が上がっている。ただただ、戦える喜びで表情は狂気で染まっていた。正気ではない。歡喜、悦樂、快樂、愉悅、もはや喜のみの感情で全身を高ぶらせている殺音は、十年という年月を待ち望んでいた彼女は、ただただ暴走していた。ズンつと音をあげて地を駆けるだした化け物が恭也へと襲い掛かろうとしたその時、彼女の背後から三人の男性が飛び出してきた。

貪狼が殺音の右腕と肩を、廉貞が左腕と肩を、巨門が背中を捕まえると大地へと勢いよく叩きつけるようにして押さえつけた。三人が三人とも全力で抑えているのは明らかで、それぞれが齒を食いしぱり顔つきは険しい。

「落ち着いてくれよ、姐さん!!」

「正気をとりもどすネ」

「冷静に、冷静になつて下さい、破軍!!」

三人の必死の呼びかけに、ぶるりつと身体を震わせる殺音。

そして、首を曲げ真紅に染まった獣の眼光を向けてくる。

じゃ、ま、だ。

口から吐き出されたのは、数多の死地を乗り越えてきた北斗のメンバーすらも凍えさせる絶対零度の憤怒。全力で抑えつけているというのに、殺音はまるで幼児を振りほどくかのように軽々と身体を捻つて勢いよく起き上がる。衝撃で吹き飛ばされた巨門めがけて腕に取り付いている貪狼と廉貞の二人を投げ飛ばした。空中で体勢を整える間もなく、二人は巨門に激突し転がっていった。

三人には目もくれず、恭也へと視線を戻した殺音の眼前に突きつけられていた小剣と槍。文曲と禄存がそれぞれの得物の切っ先を向けていた。

「お許しください、破軍。しかし、今の貴女を止めることこそ本来の貴女の望みであると判断します」

「……」

尊敬すべき人物に刃を向けることに心を痛めつつ、油断なく殺音の行動を見逃すまいと意識を尖らせ——気がついたときには、それぞれの武器の間合いを突破され二人の身体は地面に叩き伏せられていた。文曲と禄存が認識するよりもなお早いその動き、あ

まりの衝撃に呼吸が止まる。その刹那激しい打撃音を響かせて、冥が何の手加減もせず
に刀の峰で殺音の後頭部を殴りつけた。そのあまりの威力に破軍の身体はこの場から
数メートルも弾き飛ばされる、が——吹き飛びながらも即座に立ち上がり臨戦態勢と
なる。後頭部を金属の塊で強打されたというのに平然としている姉の姿を視界に留め
ながら、長く深い呼吸を一度。

「静まれ、破軍。高ぶるのも、喜ぶのもわかる。だが、今はこれ以上は駄目だ。こんな目
立つ場所で暴れるな」

自分の愛刀を正眼に構えながら、言葉を紡ぐ。

なれど、殺音の戦意は微塵も揺らぐことはない。決して引かぬ、退かぬ、という強烈
な想いのみが迸っていた。彼女の気配、重圧を一心に浴びる冥。自分を見る目が仲間で
もなく、妹でもないことに声が震えそうになるのを必死に堪える。だが、絶対にこちら
こそ絶対に引いてやるものかという強固な意志を柱に目の前の化け物の前に立ち塞が
り続ける。

「もう一度言う。こんな人目のつくところではこれ以上は許さない。これ以上は日と場所
を改めろ」

「……」

「なあ、破軍。お前……全力を出せないこの青年を倒して嬉しいのか？ 満たされるの

か？」

ちらりと後ろを振り返り、恭也を確認する冥。対して恭也は突然始まった仲間内の大喧嘩にどう対処すればいいかわからず、沈黙を保っている。

「この少年は……青年は、御神流の使い手だろうか？ 二刀の小太刀を持って初めてその真価を発揮するという」

十年以上前に裏の世界で散々名がとおっていた御神流。

それを習得しているであろう、したであろう恭也の気配を背中で感じながら冥は続ける。

「これは死合だ。お前とあの青年とのね。十年前から決まっていたことだ。約束であり、盟約だ。だから私が茶々をいれるのはお門違いだろうさ。でもね、全力をだせない青年を倒して——お前の渴きは癒えるのか？」

「っ……」

あれほど表情に変化一つなかった殺音の顔色が僅かに動いた。

それに可能性を見た冥は、淡々と——だが、心と身体を熱く燃やしながら訴えかけていく。

「もし、それでも……それでも続けるといふのなら、僕が相手をしよう」

ズズズッと何かが音を立てる。いや、聞こえたのは幻聴だ。それでも確かに悲鳴をあ

げたのだ、空気が、世界が、次元そのものが。ばさりつと揺れるのは、水無月冥の臀部から生えゆらゆらと左右に靡く猫の尻尾。ピョコつと自己主張をする頭の左右から生える猫の耳。

「僕はこの青年に、不破恭也に尊敬の念を抱いている。あの幼かった彼が、弱かった彼が、死んだと思っていた彼が——これほどの高みに昇ったんだ。ああ、なんと素晴らしいことだ。見事というしかない。どれだけの死地を、修練を、死線を超えてきたのか。僕では予想もできないよ。そんな彼が、全力でお前と戦えないなどあつてたまるものか。認めてやるものか」

小さな肉體。それは十年以上前に見たときと一切変わっていないかった。

だが、その身体は殺音を前にしても堂々としている。破軍の圧力を浴びつつも一切気後れしていない。そして幼い頃を感じた自分の直感の間違っていないかった。この少女もまた、人外にして人外を外れたモノ。

「戦闘を続行するというならば、もはや僕も自分を抑えない。全力全身、全てを賭けてお前を止める。さあ、水無月殺音——僕の屍を越えて行け」

正眼だった構えを変化。体勢を低く、低く、さらに低く。

地面に張り付きそうなほどに低く、刃は己の背中に隠し、奇妙な構えを取った武曲が宣言どおり一步も引くものかという気概を持って破軍の前に立ち塞がる。

十秒、二十秒、三十秒……息詰まる静寂と緊張。姉妹の対峙した時間は、それこそ永遠にも感じられた。それでもその対峙には終わりがやってくる。

「……しよぼーん」

心底がつかりしたと言わんばかりに肩を落とし、その場にうずくまると荒れ果てた道路にのの字を書き始めた。殺音の瞳は赤から普段の色へともどつており、あれほど荒ぶっていた気配は、別人を思わせるほどにおさまっていた。そんな姉の姿に安堵の息を漏らした冥もまた、抜き身の刀を鞘に納める。

御飯を前に待てをされた犬のように、目に見えて落ち込む殺音には先程までの暴走状態の名残はもはやない。それを見て安心した冥はとりあえず殺音を落ちつかせることが出来たと胸を撫で下ろす。例え全力を出したとしても、言葉に出したとおり自分では絶対に姉に勝つことは出来なかっただろう。

周囲を見渡せば粉塵も治まりつつあり、いくら野次馬も今は居ないとはいえ、恐らくそのうち怖いもの見たさで戻ってくるのは簡単に予想できる。早めに撤収せねば、と心に決めた冥は未だ落ち込んでいる姉の元へと歩み寄っていった。

「……一旦帰るぞ、破軍。なに、あの青年はこの街に住んでいるようだし。また日を改め

てやりあえばいいだろう？」

「っ!!」

キュピーンと目を光らせて、立ち上がった殺音が恭也に視線を向ける。

期待に胸を膨らませ、恭也を窺っているが……コクリと頷いたのを確認すると、両手をグツと握り締めガッツポーズを取った。

「次逢うときは——全力のキミを見せてよ、恭也」

「ああ、見せよう。お前に俺の全てを。なあ、殺音……お前は俺を——」

いや、と途中で口を閉ざすと恭也は首を振った。最後まで恭也は述べることなく、首を縦に振ることによって肯定とする。そんな姿に多少の疑問を残しつつも本当に嬉しそうな笑顔で、殺音はその場から霞むように姿を消した。

殺音が姿を消したのは武曲に説得されたのが大きいだろうが、それ以外にもう一つある。武曲に止められるまで殺音の精神状態は大炎状態にあったと聞いていい。極限にまで燃え上がった獄炎。されど武曲に止められたことよって心の炎は通常状態にまで鎮火されてしまった。恭也が全力をだせないと気づいたのもそれに拍車をかけていただろう。再び先程までの域に精神状態をもっていくのは至難。それ故に、殺音は今回は身を引いたのだろう。残りの北斗五人も、姿を消した殺音を追っていった。その際に全員が全員恭也の方を見ており、何か言いた気にしていたが、猶予がないのかそのまま

去って行った。残ったのは武曲——水無月冥ただ一人。

「……キミは覚えていないかもしれないが、僕とキミは一度会っている」

「覚えている。あの時、水無月殺音と一緒にいた——北斗の一員」

「そう、良く覚えていたね。たいしたものだ。まだ幼かったあの時の少年が立派になった……本当にね」

武曲は恭也を遠い目で見る。遙か昔のあの日。十一年前。運命の日を思い出す。あの時の少年が今はこれほど大きく、強くなって眼の前に立っていることが信じられない。

「強くなった。本当に、本当に強くなった。向かい合っただけで理解できるよ——あの殺音と渡り合えるほどにキミは強い。僕を含む北斗のメンバーでは相手にもならないほどの世界にキミは辿り着いた」

「……」

「人はこれほどまでに強くなれるのか。正直にそう思った。キミならばあいつの——
飢えを満たすことが出来るかもしれないね」

武曲は恭也に背を向けると、正反対の方向へと足を進める。殺音たちが姿を消した方向へと、彼女もまた足を進めていく。

「僕の名前は水無月冥。北斗が一員。武曲」

顔だけを僅かに後方の恭也に向けて——憂いをおびた表情で口元をかすかに緩めた。

「殺音との約束を守ったキミに——最大限の称賛と尊敬をこめて。それを持って感謝とする」

殺音に続くように冥もまた、その場から離脱する。

これ以上ここに留まって、警察のご厄介になるのも困るので、恭也も海鳴駅から離れようと動き出した。すでに粉塵はおさまっており、周囲の視界は開けてしまっていたが、幸運なことに野次馬は殺音と恭也の爆発的な殺気に自然と恐れをなして周辺から逃げだしていたようで、あたりには人っ子一人いない。後先考えずに突っ走るものではないと少しだけ反省する恭也だった。

その場から恭也と北斗が姿を消し、やがて人が何が起こったのか確認しようと集まってくる。夜も遅くなっているというのに集まってくる人の数はとどまるところを知らない。怖いものみたさという奴だろう。夜の世界にパトカーの音が響き渡る。誰かが警察に連絡したのか、直ぐに何台ものパトカーが現れて、現場を封鎖していく。

その光景を遠くから見ていた三つの人影があった。クアットロとチンク、そしてウエンデイだ。三人の体勢はそれぞれだった。クアットロは何かを考えるように顎に手をあてている。チンクは恭也の消えていった方向を静かに見つめていた。対してウエン

デイは、現場から背を向けるようにして体育座りをしている。

「やべーッスよ。なんであんな化け物があるんッスか。報告書で散々見たことがある、超大物じゃないッスか」

「……ここ十年は碌な動きをしていなかったのにどうしたのかしらねえ、突然」

「水無月姉妹含む北斗のフルメンバーッスよ、間違いない。北斗五人だけなら何とか出来るかも知れないッスけど、水無月姉妹のほうは無理ゲーッス。私たち三人じゃどうしようもないッスよ。トーレ姉あたり連れてこないと勝負の土俵にもあがれないッス」

「そうねえ。ドゥーエ姉様とトーレ姉様に連絡を取ってから動いたほうが懸命ねえ」

ぶつぶつと両者は独り言のように呟くが、きつちり二人ともそれが返答となっていない。はあつと深い深い絶望のため息をつくウエンデイだったが、全く反応をしないチンクに首を傾げた。

「チンク姉どうかしたッスか?」

「……いや、なんでもない」

ウエンデイに気にするなど返し、首を振る。実を言うと三人が到着したのは今さっきであり、恭也と殺音の戦いを見ていたわけではない。丁度冥と殺音が対峙していた時に到着したのだ。だからこそ、チンクを除く二人は恭也に対してそれほどの注意を払わなかった。水無月姉妹にばかり注意を取られてしまっていたのだ。しかし、チンクだけは

違った。昼に恭也に一度会っていた故に、その異常性に気づけた。

——平然としている？ あの水無月殺音と対峙して？

ごくりと唾を飲み込んだ。その音がやけに大きく響いたように聞こえた。ぼろぼろになった駅前広場を見る限り、恐らくは戦いがあつたはずだ。恭也と殺音の。あの水無月殺音と戦い、怪我一つ負っていない。そんな馬鹿なことがあるのだろうか。ナンバーズの数字持ちでさえ、一騎打ちなら勝算など皆無に等しいあの化け物を相手にして。アンチナンバーズの序列十四位——猫神の後継者。ここ十年殆ど動きがないに
関わらず序列十四位に座する絶対強者。その実力はかの頂点に比肩するとも言われている日ノ本でも五指に入る夜の一族。それを、その化け物を相手取って、無傷で済ませる。それは人の為せる所業をこえている。

「……お前は一体、何者なんだ……」

呆然と呟いたチンクの言葉は——夜の闇へと消えていった。

「はあ……」

自然とため息をつく美由希。晶が作ってくれたお弁当に入っていたウインナーに箸をプツリと刺し、口に運ぶ。子供も大喜びのタコさんウインナーだが、残念なことに美由希はもう喜ぶような年ではないのだ。

入学式からすでに一週間が経過していた。ある程度仲の良いグループというものが

出来上がってしまった、美由希はそのどれにも入ることは無く、一人寂しく昼食を取っていたところであった。現在は昼休みで、机で食べても良かったのだがなんとなく居づらいため態々屋上まできてお弁当を食べていたのだ。

別に恭也や晶、レンと一緒に学食で食べてもよかったのだが———とか普段はそうしているのだけど———珍しく本日は皆の都合が悪く屋上で一人ぼっちという状況である。

ほかほかとした陽気がやけに気持ちいい。それが一人ぼっちなことに拍車をかける。屋上を見回してみるが、カツプルらしき男女が何人かいるくらいだ。わざわざ屋上にまで昼御飯を食べに来る生徒も珍しいだろう。元々この学校には立派な食堂があるわけなのだから。

昼休みが終わりに近づくとつれて、屋上から人が減っていく。美由希もお弁当を仕舞うと、屋上と校舎を繋ぐ扉へと向かおうとするが、その途中で綺麗な刺繍がされたハンカチが落ちているのに気づいた。

「落し物かな?」

ハンカチを拾うと拾得物として職員室に持っていこうと決めた美由希が今度こそ階下へ戻ろうと扉を開けた瞬間。

「あいたつ!」

ゴンという音と短い悲鳴が聞こえ、押した扉に軽い衝撃が伝わった。扉の向こうには、一人の少女がおでこをおさえながら蹲っている。どうやら美由希が扉をあけたタイミングで近づいていたためドアにぶつけてしまったのだろう。

「す、すみません。大丈夫ですか？」

「い、いえ。こちらこそ前方不注意でござ迷惑を……」

額を赤くさせながらも人の良い笑顔で答える少女。胸元には赤いリボン。どうやら美由希より一個上の風芽丘学園の二年なのだろう。自然な茶色が入った長い髪。どことなく人を安心させるような柔和な雰囲気を持った少女だった。

「お手数をおかけいたしました……」

少女は一礼すると扉から屋上にでると、何かを探し回るように視線をあちらこちらに向ける。暫く探していたが見つからなかつたのか、しよんぼりという様子が相応しい感じで屋上からでてきた。

「あの——何かお探ですか？」

「え、あ、はい。こんな形のハンカチを探しているんですけど……」

美由希に声をかけられると思っていなかつたのか少女は驚き、空中に両手でハンカチのような絵をかく。ちなみにこれでは形しか分からないが。

「あ、もしかしてこれですか？」

それに思い当たった美由希が先程拾ったばかりにハンカチを少女に見せると、それにはあつと表情を明るくする少女。どうやらこのハンカチが探していたものようで、少女は美由希から受け取ると何度も頭を下げた。

「本当に有難うございます。おかげさまで助かりました」

「いえ、こちらこそ。おでこ大丈夫ですか？」

「大丈夫です。私おつちよこちよいなところがあつて……よく転んで打つてしまうので、慣れてるんです」

恥ずかしそうに俯く少女に、どことなく親近感がわく美由希だった。基本的に戦闘に關しては美由希は突出しているが、日常生活ではドジなところがあり、よく恭也に呆れられることがあるためだ。彼女の気持ちは痛いほどよくわかる。その時校舎に鐘の音が鳴り響く。授業が始まる五分前になる予鈴だ。慌てて二人揃って階下へとおりる。美由希は一年のため三階だが、少女は二年なのでもう一階下になる。そこで別れることになるのだが、そのまま別れを告げるのは何故か憚れた。

「あ、あのー私……神咲那美といいます。今度時間があるときに改めて御礼をさせてください」

少女の名前は神咲那美。高町美由希の生涯の友となる少女との——運命の出会いであった。



「あれが、御神か……」

「ん……御神美由希。上の情報によると間違いないみたい」

神咲那美と美由希が互いに自己紹介などしている階段前の廊下。その廊下には教室に戻ろうとする生徒で混雑しており、屋上からも残っていた生徒たちが降りてきていた。そんな中、まるでその二人の男女のことは誰も気がついていないかの様子であった。不思議であつた。おかしくもあつた。何故ならば、屋上から降りていく階段の途中の壁に背を預けて二人の少年少女はいたのだから。ただの生徒ならばある意味気づか

ないのは当然だ。だが、あの美由希すら二人の前の階段を降りたというのに——その存在に気づかなかった。それは神咲那美と話していたからか？ ……そんなわけはない。その程度で気づかない筈がない。

「たいしたもんだな、ありや。俺たちとほぼ年代で、あそこまでの高みに昇ってやがるか。永全不動八門の黄金世代にも比肩するんじゃないやねーのか？」

「それは言いすぎ。確かに強い。強いけど……精々が自分達程度でしょ？ 一対一でやりあっても多分負けない」

野性味あふれる獣。しかも肉食獣を思わせる短髪赤髪の少年の評価に、茶髪のサイドテールにしている少女が若干厳しめの返答をする。彼女の表情に変化はなく、本心から言っていることが自ずとわかった。それなりに長い付き合いである少年にとって、彼女の言葉は美由希を過小評価しているわけでもなく、過大評価でもない。本当に公平な目で見て、自分とほぼ同等——いや、わずかに下であると評価を下したのだと知っていた。

「そうか？ 多分だけど、アイツは強えぜ。感じられる力量のもう一個上あたりを予想しといたほうがいいと思うけどな」

だが、赤髪の少年の評価は少女とは異なっていた。

違和感がある。異質感がある。どこが、と問われれば言葉にすることはできない。あ

やふやなのだ、美由希の存在感が。掴める様でいまいち彼女の芯を把握することができない。

「なに？ 葛葉はさあ……やけに御神美由希のこと買ってるよね。なんで？」

訝しげな少女の問い掛けに、葛葉と呼ばれた赤髪の少年はしばらく考え込むように目を瞑るが、それも数秒だ。

「なんとなく、なんとなくとしか言えねえんだよなあ。直感、第六感、本能……そんなアレが反応してんだよ、小金井」

「ふーん。まあ、どうでもいいけどね」

自分から話題を振っておきながら、どうでもいいと言い切った小金井は眠たげに、くはあと欠伸をかみ殺す。教室に戻った美由希達を確認すると、そろそろ自分たちも戻らなければ、と壁際から離れる二人。

「おおっと。あんたたちー。早く戻らないと怒られちゃうぞい」

そのタイミングを狙ってか、一人の小さな少女——否、風芽丘学園教師であるスーツ姿の鬼頭水面がピシッと二人に向かって指を指しながら近づいてくる。

「わーってるって。今から戻るところだったのー」

「……すみません」

対照的な二人の返事に気を悪くすることもなく、満面の笑顔を向けたまま——。

「で、あんたたち二人から見て御神美由希ってどーなのさ？」

早くもどれ、と言ったわりに話を繋げて来る鬼頭に若干の面倒くささを感じつつ先程二人で話していた内容をそのまま告げる。うんうん、と頷きながら聞いていた鬼頭だったが、なるほどねえ、と短く呟いた。

「わたし的には葛葉の意見寄りかねえ。なんていうか、底が見えるようで、見えないって感じがするんだよね。凄い嫌な、感じ。あーいう相手って、必ずこっちの思惑を超えてくるところがあるんさー」

まあ、でも……と前置きを置いて。

「それでも、今の段階なら葛葉と小金井には勝てないと踏むけどねー。まあ、知らんけど」

鬼頭水面は、己が感じたままを口に出す。

内容的に軽く聞こえるかもしれないが、この女がそういうのならばきつと彼女の予想通りの結果に辿り着くのだろうと二人ともがそう思った。

「ああ、そういえばアイツってどーすんだ？ ほれ、御神にやけに熱い視線を送ってた奴
いただろ？」

「アイツ？ ……ああ、山田なんちゃらってやつー？」

「……山田太郎。それくらい覚えたら、鬼頭先生」

「わっはっはっはー。いやあーごめんねごめんねー」

小金井の軽い嫌味にも、鬼頭は平然と笑って流す。山田太郎かー、と腕を組みながらウンウンと唸り始めるも数秒。

「放置、でいいんじゃない?」

「まあ、そうだな。別に俺たちは御神の味方ってわけでもねーし。好きにさせておけばいいだろ」

「……そうだね。アレに負けるようなら所詮そこまですりゃあったというところで」

三人ともがあつさりと山田太郎を放置することに決めると同時に、チャイムの音が校舎に鳴り響いた。それに今度こそ慌てて三人ともが各教室へと向かっていったのだった。



高町美由希の帰宅は他の高町家の住人に比べ随分と早い。

晶は実はクラス委員のため、その仕事上意外と帰宅が遅くなる場合も多い。レンは授業が終わった後に夕食の買出しに行くことが多く、帰りが遅い。もしくは、一旦家に帰った後にいく場合もあるため結局美由希が家に着くころには居ないことが多々ある。

桃子とフィアッセはいわずもがな。恭也も盆栽の本や刀剣専門店の井関に寄つて帰ることもあり、美由希よりも遅い。そういうこともあり、本日は高町家には美由希となのはの二人しかいなかった。

ソファーに美由希が座り、その横にちよこんと置きもののようになのはが座っている。テレビを二人で見えていたが、時間も時間のため、あまり興味のひかれる番組もやってはいなかった。どのチャンネルでもニュース番組ばかりで、美由希はともかくなのはの興味をひくような番組とはいえない。

「ね、なのは。公園にちよつと遊びに行こうか?」

「え? おねーちゃん、剣の練習はしなくてもいいの?」

「うーん。どうせ夜に死ぬほどしごかれるだろうし、それまではゆっくりしておこうかなーってね」

「おねーちゃんが迷惑じゃなかったら……行きたいです」

もじもじと美由希に気を使ったようななのはの様子に苦笑しかできない。

なのはは基本的に我侷をいわない。小学二年生だというのにあまりにも物分りが良すぎ。家族である美由希や恭也にでも気を使ってしまう。性格といえればそれまでだが、そんななのはにもつと甘えて欲しい姉心を持つ美由希であった。

家の戸締りをするとなのはと美由希は手をつないで海鳴臨海公園へと散歩に向かう。なのはのペースにあわせてゆつくりと。なのはは美由希と外出できるのが嬉しいのか、一目でわかるほどの上機嫌だ。そんななのはの機嫌にひかれるように、美由希の気分もよくなる一方である。

海鳴臨海公園とは、旅行ガイド曰く、海鳴に來たカップルは一度でいいから通うべき場所らしい。お勧め度は星三つレベルというのを昔雑誌で見た記憶が美由希にはあった。公園に足を踏み入れると潮の香りが美由希となのはの鼻をくすぐった。海鳴臨海公園はその名の通り、海に面している。随分と長い柵と段差が海と公園を分け隔てていた。

夜になるとライトアップされて、観光するカップルは良い雰囲気になるとか。美由希とて何度か夜間にきたことはあるが、思わず感心するほど素晴らしい景色であったのは間違いない。生憎恭也と一緒に鍛錬の途中に寄っただけなので色気のある話では

ない。二人は連れ立って公園の中を突っ切るように歩いていく。途中幾度か、カップルらしき男女とすれ違う。楽しそうに語らいながら腕を組んでる。

そんなカップルを自分と恭也に置き換えて想像してみる美由希だったが、自分で妄想しておいて恥ずかしくなったのか、赤くなつた顔を片手でおさえながら、もう一方の片手で想像を消すようにぶんぶんと中空を振りまわす。

大人のデートスポットではあるが、全体がそうかといわれればそうではない。そこまで広いというわけではないが、公園の一面にはきちんと子供が遊ぶための遊具がおかれた空間も存在する。ブランコや滑り台といった懐かしい気持ちにさせる遊具が沢山あるが、なのははまだしも美由希が使用するには恥ずかしいので、なのはが遊ぶ傍らベンチに座つてその様子を見ることにした。

ベンチに座つてなのはが楽しそうに遊ぶ光景を見るだけで心が暖かくなってくる。なのははどちらかというところインドアの遊びを好む。ゲームなどは美由希では百戦百敗レベルの強者だが、やはりこういつた外で子供らしく遊ぶのも楽しそうである。微笑ましい光景を見ていた美由希だったが、くうとお腹が鳴つた。幸いなことに誰にも聞かれなかつたのが良かったが、もし恭也に聞かれていたら散々からかわれただろう。

「なのはー。鯛焼き買ってくるけど餡子がクリームかどっちがいいー?」

「んーと……」

どちらにするか悩むのは。どちらにするか決めきれないようで、考え込む。

「それじゃあ、餡子とクリームを一個ずつ買ってくるから私と半分個ずつにしようか？」
満面の笑顔で頷いたのは置いて、鯛焼きを買いにベンチから腰をあげる。なのは一人にするのは気が引けるが、まだ夕陽が差し込む時間帯なので危険は無いだろうと判断して、屋台へと向かう。それほど遠くない場所に屋台を開いており、海鳴公園のちよつとした名物となっている。

屋台にはメニューが書かれた看板が吊り下げられており、餡子、クリームは百二十円。それ以外にもカレーとピザ、チーズなども注文すればでくるといふ怪しい店として別の意味で有名だ。ちなみに売り上げの九十九パーセントが餡子とクリームで、残りの一パーセントが変わり物の具材だという。その一パーセントの購入者が恭也を含んでいたりする。

「おお、お嬢ちゃん。毎度。今日は何にするんだい？」

「こんにちは、おじさん。えつとですね……餡子とクリームを一つずつでもいいですか？」

「ちよつと買ってな」

何度も何度も購入しているうちに常連さんとなつてしまった美由希。今では顔を覚えて貰つており、世間話までする仲になつていた。丁度出来上がったばかりの鯛焼きを

合計二個入れてもらった袋と引き換えに小銭を渡す。お礼を告げて屋台から踵をかえす。離れる背に、屋台のおじさんの有難うという声がかげられた。

遊具が置いてある一画まで戻ってきた美由希だったが、そこになのはの姿は無かった。不思議に思い、なのはーと大きな声で呼びかけてみるも返事はない。もしかしてトイレかと考え、少し離れた場所にある公衆トイレの中を窺ってみるも使用している人が居るようには見えない。悪戯で隠れているのかとも思ったが、なのははそういうことをする性格でもない。ドクンと嫌な予感が全身を襲い、心臓が高鳴る。

「なのはー!? なのはー!! どこにいるのー!?」

焦りを隠せずに、美由希はなのはの名前を叫びながら走り回る。そのうちに、屋台に買いに行く前に美由希が座っていたベンチに手紙が置いてあるのに気づいた。行く前まではなかった。それは確信できる。買いに行つて戻つてくるまでに手紙は置かれたのだろう。その手紙を震える手で開き、中に書かれていた文を読む。

内容は簡単なものだった。僅か一文と書いた人物の名前しか、書かれていなかったのだから。手紙の文を理解した美由希は、グシャリとその紙を握りつぶすと、公園から全力で駆け出していった。

『君の妹は預からせていただきました。つきましては街外れの廃墟ビルまできていただければ幸いです。山田太郎』

危険な男なのは分かっていた。だというのにこの一週間は特にちよつかいをかけてくるわけでもなかったたので、油断していなかったと問われれば質問に窮するだろう。美由希本人を狙うのならばまだ良い。恭也やレン、晶ならば戦う者の覚悟とやらも持ち合わせている。

だが、なのはと桃子は完全な一般人だ。覚悟もなにもない、ただ日々を笑って過ごすだけの——。ボウツと美由希の心の中に火が灯った気がした。ただの赤い炎ではない。それは、どこまでも黒い、漆黒の灯火。ガリつと唇を強く噛み、ポケットにいれていた携帯電話を取り出すと恭也へと電話をかける。

『どうした？こんな時間に何かあったか』

二、三度のコール音の後に恭也がでてくれたことに安堵しつつ、状況を伝える。最初は普段通りの恭也だったが、なのはが浚われたという件になると、凄まじいまでの声の冷たさになっていた。美由希に怒気をぶつけているわけでもないというのに、電話越しでさえ、押しつぶされそうになる。

『俺も今すぐにする。今どれだけの武器を所有している？』

「飛針と鋼糸を少し。小太刀は持ってないよ」

『分かった。無理はするな、俺が行くまで時間を稼ぐだけでも良い。だが——なのはは必ず助けるぞ』

「——うん、わかった」

電話を切ると美由希は速度を一段階あげる。普段の鍛錬のときと同等以上の速度で、疾風の如き一陣の風となつて駆け抜ける。今さつきまでは綺麗に見えた夕陽が憎らしく見えた。

すれ違った人々が何事かと振り返るが、その時にはすでに美由希は人々の視界から消えている。駆けて、駆けて、駆けて——すれ違う人も減り、家も減り、海鳴でも人気の無い一画に辿りつく。元々でかいマンションを建てる予定だったらしいが、数年前からある事情で開発が中断している地域らしい。残されているのは、崩れかかったビルや、多くの建物。一般の人間ならば間違いなく近づかない場所だ。

廃墟ビルといつてもこの地域は広く、相手が指定してきたビルは正確にはどこかわからない。それに舌打ちをする美由希望だったが、それは杞憂に終わったようだ。どうやら隠れる気は無いらしく、不吉な気配を漂わせ、自分はここにいると美由希を挑発していたのだから。

山田太郎が居るビルの前まで到着すると足をとめ上を見上げる。ざっと見た感じでは五階建て。何時崩れても可笑しくは無いほどにぼろぼろである。あれだけ長い間全力疾走したというのに美由希の息に乱れは無い。休むことよりもなのは安全を優先して、何の恐れも躊躇いもなく、ビルへと足を踏み入れた。

一階には誰も居ないことは気配でわかるので二階へ。三階、四階と階段を上がつていき……ついに五階へのぼりついた。扉一枚を隔てて感じる異様な存在。確かに居る。この先に、なのはを浚った男が。山田太郎が。覚悟を決め、扉をあける。鍵はかかっておらず、あつさりと開いたことに若干拍子抜けした。

扉をあけた先——巨大な部屋の窓際に太郎は居た。古臭いベッドに腰掛けて、太郎は文庫本をよんでいる。夕陽が沈みつつあり、電気も通っていないビルのため、字が読みにくいのか目を細めて本を読んでいた。そのベッドにはなのはが身動き一つとらず、仰向けに寝かされている。部屋をあけた美由希に気づいた太郎は、にこりと人懐っこい笑みを浮かべて、文庫本をおくと立ち上がった。

「ようこそ、高町美由希さん。一日千秋の思いでまつてたよ」
緊迫したこの場に相応しくない、太陽のような笑みだった。

それだけに、不気味だ。何を考えているのか分からない。嫌な悪寒が全身を包む。
「なのはは、無事なんですか?」

「うん? ああ、勿論さ。ちよつと眠って貰ってるだけだから。怪我は無いかから安心してよ」

「……そう」

本当かどうかはわからないが、遠目で見えた感じたしかに怪我は無いようだ。

胸の上下が確認できるため、呼吸はしている。これで心配事の一つは減った。

「一つ聞きたいのですけど……」

「うん、なんだい？なんでも答えちゃうよ。今日の僕は機嫌がいいしね」

「何故、なのはを浚ったのですか？」

率直な質問を太郎にぶつける。

それに対して、太郎は頬を人差し指でかきながら答える。

「いやー実はさ、僕は君と潰しあいたかつたんだけど……どうすれば本気の君と戦えるのかな、て思ったわけなんだよ。君みたいなタイプは自分が狙われるより、周囲の人間に危機が迫った時の方が力を発揮できそうだしー」

けらけらと笑いながら理由を述べる太郎に氷点下の視線を向ける。

下らない。下らなさすぎる。そんなどうでもいい理由でなのはを浚ったのか。

凍えていく。美由希の心が。固まっていく。美由希の覚悟が。

「もう、いいです。これ以上貴方の下らない話は聞きたくないですから」

「え、いやいや。まだこれか——」

太郎の台詞は途中で切れた。いや、強制的にそれ以上の台詞を発することが出来なくなってしまったのだ。得意げに話をしていた太郎の眼前に、美由希が踏み込んでいたのだから。たまりにたまったダムの水門を取り払ったような、桁違いの圧力。爆発的に膨

れ上がる気配。質量を持つているのではないかと勘違いするほどの威圧感。表情を引き攣らせ、踏み込んだ美由希に蹴りを放とうとした瞬間——。

「がああ!」

その蹴りを遥かに上回る速度で左拳が太郎の右脇腹を打ち抜く。

脇腹から波状に広がっていく衝撃。未だかつて受けたことの無い一撃に、衝撃以上に、驚愕を全身が襲った。右脇腹を抑えて、崩れ落ちそうになる太郎だったが、それを美由希が許すはずも無い。

「貴方の敗因は一つだけ——」

美由希の囁きが太郎の耳を打つ。そして、閃光のように蹴り上げられた美由希の爪先が、太郎の顎を弾き上げた。脳が揺れる。太郎は後方の壁へと叩きつけられ、ドスンと床に倒れ付す。

「——なのはを浚うという愚行を犯した。ただ、それだけです」

高町美由希。現在風芽丘学園の一年生。弱冠十五歳の女子高生。なれどその力ほどまるところを知らず——。

——あらゆる敵を一蹴する。

第8話：永全不動八門

山田太郎。

彼は平凡な名前と同様に平凡な人生を歩んでは——いかなかった。太郎が歩いてきたのは栄光の道といっても良い。自分の異常性に気づいたのは何時頃だったろうか。物心ついたころには気づいていたのかもしれない。人並み外れた身体能力。同年代を遙か後方に置き去りにする桁違いの運動能力を所有していた。

そして、もう一つ。自分のイメージしたとおりに身体が動いてくれるのだ。僅かな狂いも無く。特に戦いという場においては絶大な効果を発揮する。中空に描く想像の軌跡をなぞるように腕を振るえば如何なる相手も地に沈んだ。太郎は凄かった。圧倒的なほどに強かった。これまでの人生で戦ってきた相手で、太郎を苦戦させるような敵はいなかった。それはどんなスポーツに置いてもそうだったのだ。

努力をせずとも、他を圧倒できる純粋な才能。それだけで、太郎は最強という称号を

欲しい俣にしていた。だからこそ、つまらなかつたのだ。どんな相手も敵となりえる存在が居なかつた故に。太郎は己と対等に渡りえる敵を誰よりも求めていた。

そして、ようやく出会えた。高町美由希という雌獅子に。

一目で心を奪われた。勝てるかどうかわからない。本気でそう思える存在にようやく出会えたのだ。歓喜しか太郎にはなかつた。そこでひたすらに考えた。どうすれば高町美由希の全力を引き出せるのか。考えた末の方法。妹の高町なのはを餌にするという碌でもない手段だつたが、しつかりと高町美由希をおびき寄せることが出来た。ようやく戦えるのだ。ようやく本気で潰しあえるのだ。産まれて初めて自分は本気を出すことが許されるのだ。

ああ——ああ。ああ。ああ、ああ、ああ……愉しみだ。



倒れ伏した太郎には目もくれず、美由希はベッドに寝かされているのはに駆け寄ろうとして足を止めた。壁に激突して地面に寝転がっていた太郎がゆらりと立ち上がったからだ。足取りは多少は覚束ないようではあったが、それでも立ち上がったことに驚きは隠せない。脇腹を殴られ、顎を蹴り上げられたというのに、太郎の表情は普段と変わらない笑顔を見せている。いや、逆に普段より笑みが深いような気がした。

「いやはは。素晴らしいね。僕の反応よりさらに早く……これほどとは思わなかったよ」

全く堪えていないような様子の太郎に、美由希の眉がピクンと跳ねる。たった二発とはいえ、全力の拳と蹴りを叩き込んだのだ。だというのに平然とする様子は予想外ではある。赤くなった顎を手でさすりながら、壁際から美由希に一步ずつ近づいてきた。

「……っ!？」

出し抜けに、背筋を悪寒が突き抜けた。幾千と繰り返してきた戦いの経験が反応し、流れるように身体が動く。咄嗟に顔の前で組み合わせた腕に激しい重みと痛みがはしった。崩れかけたビルに山彦が響くように肉と肉がぶつかり合った音が木霊する。

その衝撃に美由希の重いとはいえない身体が後方へと流された。そのまま仰向けに倒れそうになるのを堪えながら、太郎の行動を見逃さぬよう体勢を整える。太郎は追撃を仕掛けるでもなく、右手を前にした半身の構えを取り呼吸を短く吐いた。それに美由希は首を傾げたくなる。確かに見事な構えだとは思ったが、何かがおかしい。

足は大地に根を生やしたかのようにどっしりと踏みしめられ、背筋は鉄棒がはいっているのではないかと疑いたくなるほどに伸び、構えに隙が無い。まさにお手本のような姿勢。一種の理想ともいえるが——あまりにもそれが完璧すぎた。外側だけが一分の隙も無いのだが、肝心の中身が——。

地面を叩きつける音が聞こえ、太郎の身体が空を跳ぶ。数歩の間合いは、一瞬で消え去り、左右の拳が美由希へと襲い掛かった。先程のお返しと言わんばかりの右拳が美由希の左脇腹を狙うが、一步後ろに引くことによつてかわす。続いて、左拳が美由希の側頭部に放たれた。

その左拳が美由希に着弾すると思われた瞬間、太郎の下半身から地面への感覚が突如消えうせる。太郎の死角となる位置から足払いをかけられた。遠くから見ている者がいたならばはつきりとそう分かつただろう。だが、太郎は足を払われたと理解できることとはなく——視界が反転するなか、美由希の肉薄を許していた。

必死の思いで、体勢も定まらぬまま、苦し紛れの拳を振るう。そんな攻撃が美由希に

通じるわけも無く、救い上げるような美由希の左拳が太郎の腹部に喰らいつく。先程と同様に身体を突き抜ける、衝撃。か弱い少女の拳だというのに、その一撃は鉄槌で殴られたと錯覚するほどに重い。

「ぐっはっ!!」

拳の衝撃に口から唾液が撒き散らされる。透明なものだけでなく、赤い血が混じった唾もあった。この前にくらった顎への蹴りで口の中を切っていたらしい。唾液を吐き出しながらも、美由希が左足で踏み込んだのが見えた。そして——右足がぶれる。

脇腹への衝撃で頭が下がったため、太郎の頭は美由希の蹴りで狙える絶好の位置へと落ちていた。放たれる右足。霞むような速度で跳ね上げられた右足は太郎の側頭部めがけて蹴り上げられた。

どれだけ速くても、来る場所が分かれば防御することは容易い。左手をあげることによって、直撃だけは避けようとしたが……太郎の左腕に防がれる瞬間、右足がさらにぶれた。蹴りの角度が突如変化。隙だらけとなった脇腹へと叩きつけられる。

「——あああっ!?!」

想像もしていなかった一撃に、太郎の喉からは言葉にならない悲鳴しか上がらない。腹部を襲う激痛を必死で無視しながら、美由希から逃げるように距離を取る。太郎の頬を汗が滴り落ちた。太郎が攻撃に転じた一瞬を美由希は悔しくなるほど完璧に見切っ

ていたのだ。

恐ろしいほどに上手い。完全な死角からの掬うような足払い。そこからの回し蹴りも驚くしかない。頭を狙った蹴りを、太郎が防御したのを見た途端、腹部へと変化させた。単純な力では太郎の方が上だろう。だが、動きの速度は美由希の方が遙かに速い。さらに技術に関しては太郎とは桁が違っているといつてもいい。

それを認識した太郎が慎重に間合いを測りつつ、口元を汚す唾液を拭う。戦う前まで喜びに満ちていた太郎の心は、動揺に襲われ平常心を保つことさえも難しい状態であった。そんな心を無理矢理に押さえつけるように、深呼吸を繰り返し、冷静に美由希の全身を視界にいれる。

対する美由希は息を全く乱すことも無く、軽くりズムを取るように身体を上下させていた。美由希の攻撃は変幻自在。後手に回ったならば防ぎきるのは難しいと判断した太郎が、放たれた矢の如き勢いで飛び出す。息もつかせぬ連続攻撃。右拳。左拳。時には左右の蹴りを混ぜ合わせながら、美由希の防御を貫こうと我武者羅な連撃。

だが、それは届かない。美由希は、その攻撃すべてに反応し、あっさりとした防ぎ、払う。十数発は打ち込んだ打撃は一撃たりとも、美由希を捉えることは出来なかった。それでも太郎は、美由希に反撃の機会を与えまいと攻め続ける。

美由希の真似をするように、死角からの地を這うような足払い。しかし、それは美由

希にとって死角からとはなり得ない。その足払いを足の裏で受け止め、足払いの威力を利用して後方へと跳躍。結局太郎の連撃は、美由希の防御を穿つことはできなかつた。

「は、はははは……想像以上だよ。この僕がここまで子ども扱いされるとはね」

「……一つ質問しても良いですか？」

「うん、なんだい？」

「貴方はこれまで何か武術を極めようと努力したことはありませんか？」

平坦な美由希の質問に太郎は首を横に振った。

「いいや。僕にはそんなもの必要ない。神から与えられた才能。天に愛された武。それだけで十分さ。僕には、努力そんなものなど必要ない」

「そうですか……。それが本当なら貴方は凄い」

「——え？」

まさか褒められるとは思ってもいなかったのだろう。予想外の美由希の返答に、気の抜けた返事を返す。美由希は深く息を吐くと、首を振った。少しだけ羨ましそうに。そして、心底残念そうに。

「それほどの才を持ちながら——このまま地に埋もれるのは本当に残念です。貴方の才は確かに群を抜いている。まさに天才という言葉が相応しい」

拳を太郎に向けながら、寂しそうな瞳が全身を射抜く。才能だけで防戦一方とはいえ

美由希の攻撃に耐え、ここまで渡り合える。それは美由希自身で驚くしかない。太郎は強い。これまでの人生で負け知らずだったのにも納得はいく。それでも才能だけではないとかなるほど——美由希達がいる世界は甘くはない。

太郎の構えは確かに完璧だった。だが、それはあくまでも模倣。中身のない薄っぺらな武。いざというときに頼るものがない、惨めな孤高。

「できれば貴方には正々堂々とぶつかってきて欲しかった。そして——兄と戦って欲しかった。そうすれば、きっと貴方は理解できたはず。本当の強さを。真の強者とはどんな境地なのかを」

「なに、を——」

返答は返さず、美由希の姿が残像を残す程の動きで太郎へと迫った。彼女の動きは今までよりもさらに速く、まさしく飛燕が如し。それが美由希の全速だということを認識する暇もなく、左右の掌打が顎と鳩尾を同時に打ち抜いた。反撃を考える隙も与えず、美由希の膝が喰る。止めをさすような二連続の鳩尾への打撃。

耐え切れず、さらに前のめりとなった顎を打ち上げた。のけぞりながらも、無意識のうちに拳を美由希にふりまわすようにして放った太郎は賞賛されるべきだろう。だが、その苦し紛れな一撃が美由希に当たるはずもない。

その攻撃を払いのけつつ、左回し蹴り。メシリという嫌な音が太郎の右足から響く。

ガクンと崩れ落ちそうになった太郎の後頭部に、蹴り足が直撃。弾き飛ばされるように太郎の全身が泳ぐが——最後の一撃。廃ビル全体が揺れるほどの強い震脚。地震が起きると錯覚するほどの。そつと美由希は太郎の腹に手を当て……。

「——這い上がってきてください。貴方は、強かった」

それが太郎がこの日最後に聞いた、高町美由希の声だった。

山田太郎の意識を呼び起こしたのは——意外なことに顔にかかる水滴であった。ピチャン。ピチャン。と、一定感覚で顔に落ちてくる冷たい水滴が、太郎の意識を浮上させた。先日降った雨がどこかに溜まっていたのか、ぼろぼろになっている天井から漏れ出しているようだ。

激しく痛む全身を押し、近くにあったベッドに手をかけて何とか立ち上がる。我に返り、辺りを見回すがそこは意識を刈り取られる前に、美由希と戦っていた場所であった。口の中に感じるのは生臭い鉄の味。それ以外にも何か硬いモノと、生暖かい液体がある。床にそれを吐き出すと、ベチャリと吐いた場所を赤く染めた。それと一緒に床に転がる白い歯。顎を何度も殴られたせいだろう。折れにくい奥歯をやられてしまったらしい。

気を失ってどれくらい経ったのだろうか。生憎時計は持っていないので正確な時間はわからない。未だ下半身に痺れが残っているのを考えると何時間も気を失っていたとは考えにくい。当たり前のことだが、ベッドにはすでに高町なのはの姿は影も形もなかった。

「なんて、無様な……」

気がついて最初に口から飛び出したのは、そんな台詞だった。全てが予想外の出来

事。そう、今夜起きたことは太郎の想像を遥かに超えることしかおきていなかった。その最も大きな誤算は、高町美由希の実力。

自分と同等に戦える雌獅子。そう考えていた自分が愚かしい。強かった。あまりにも強すぎた。手も足も出ずに、子ども扱いどころではない戦いの結果。高町美由希が雌獅子ならば——太郎は鼠に過ぎなかった。

美由希の実力を測れなかったこと以上に、許せないこともあった。戦いの最中、太郎は途中から焦燥に駆られていた。力の差に絶望を感じ、勝ち目がないと諦めてしまった瞬間が、あの短い戦いの中で確かにあったのだ。勝てるどうかわからない相手との潰しあい。その結果例え死ぬことになったとしても受け入れる。

それを誰よりも望んでいたはずの山田太郎は——美由希に恐怖し、戦えなくなっていた。勝てないのではない。戦わないのでもない。戦えない、という唾棄すべき結果を残したことを、山田太郎は許せなかった。

今まで得てきた勝利など。今まで得てきた栄光など。そんなものを一笑に付すほどの敗北感。絶望感。そして、虚無感。太郎は手を握り締め、ベッドを力いっぱい殴りつける。歯を食いしばり、ぶつりと歯で噛み千切った唇から血が滴り落ち、ベッドを汚す。

山田太郎の心に残されたのは——己に對する目も眩むような憤怒だけであった。幽鬼のようにふらふらと、廃ビルを降りていく。途中何度も、座り込みそうになりなが

らも壁に手をつけてゆっくりと降り続ける。廃ビルから外に出ると、月光が静かにあたりを照らしていた。普段だったら好むその光が憎らしい。

ざつざと砂を踏みしめる音をたてて太郎は歩く——そして、足を止めた。

そこに、いた。何かが、いた。人の形をしただけの怪物が、いた。

壁に背をもたれさせ、両腕を組んだ状態で高町美由希の兄である——高町恭也が悠然と立っている。何をするでもなく、壁にもたれているだけ。だというのに、その空間は捻じ曲がったような歪みを発生させていた。人はその気配を肌で感じなんと称するのだろうか。殺気。鬨気。戦気。鬼気。そういつた気配とはまた一線を画した——この空間は一種の究極。

「高町……きよう、や？」

どこからどう見てもそこにいたのは高町恭也だった。高町恭也以外のはずがなかった。しかし、別人だと言われなければ分からない。別の存在だと言われなければ理解できない。以前見た恭也は武の気配など感じさせない、一般人にしか見えなかったというのに——今は、一般人に見ろという方が無茶な話だった。

「き、キミは……一体、なんだ？」

声が震えている。詰まりながらしか音を紡ぐことができなかつた。太郎の耳にガチガチという不快な音が聞こえる。それが自分の歯が噛み合わさりたてている音だとい

うことに気づくまでしばしの時を要した。目の前にいるのが人だということに納得がいかない。

——おかしいじゃないか。なんで、こんな、こんな、こんな——。

「ばけ、もの」

全てを忘れて気を失いたい。意識を手放したい。

そう願つても、恭也の圧力は逃げることを許さなかった。

「妹が世話になつたようだ」

沈黙を保つていた恭也が口を開く。初めて聞いた声だったが、考えていたよりもずつと人間味溢れる声ではあつた。例え機械のような抑揚のない平坦な声だつたとしても納得できてしまう。そんな圧迫感が恭也にはあつたのだから。轟と恭也の身体から、火柱が立ち昇つたかに思われた。人の姿だというのに人智を逸した重圧は、恭也の姿を一種の幻想の生物にも幻視させた。

果たして恭也の台詞の中にあつた妹という単語の意味指すものは、美由希かなのか。一体どちらのことを指しているのだろうか。それとも両方を含んだ言葉だつたのかもしれない。少なくとも今の太郎にその真意まではわからなかつた。

「……………あ……………」

太郎の舌は上手く回らず、意味をなさないただの文字の羅列となる。あまりにも、桁

が違いすぎた。いや、違う。そんなレベルではない。高町美由希でさえも桁が違ったが、高町恭也は——次元が違う。鼠と獅子。いや、蟻と獅子。それほどの距離が二人にはあった。同じ土俵に立つことすらできない。本当に人間なのかと疑ってしまうほどの存在。

「美由希を狙うのは、良い。だが、お前は——なのはに手を出した」

恭也が腕組みをやめ、一歩ずつ太郎に近づいてくる。近づくにつれ、その圧迫感が凶悪になっていく。土下座をしてでも許しを請いたい。そんな逃避の思考が思い浮かぶ。だが、そんなことはできない。すりきり、削られた太郎のプライドが辛うじて、そんな思考を弾き返した。残り数歩。そんな間合いで恭也は足を止める。今にも地面にへたり込みそうな太郎の顔には何時もの笑顔はすでになく、泣き笑い。それが相応しい表情となっていた。

「戦いたいのならば、小細工抜きで美由希と向かい合え。次は——無い」

言葉を理解する暇もなく、太郎の体が跳ねた。瞬きするよりも速く、認識するよりも速く、一秒を遥かに短くした刹那の瞬間——その挙動はまさしく紫電雷光。美由希のスピードが鈍く見えるほどの超速度。恭也はすでに太郎の目と鼻の先にいた。そして、一撃。無造作に、たいした力も込めずに、虫を振り払うように掌打を太郎の顛顛に放った。それだけで、太郎は自動車にぶつかっただかのような勢いで、その場で一回転。地面

へと激しい音をたてて倒れこんだ。

「山田太郎。この領域にまで登ってきて見せろ。なのはのことは許すことはできないが——美由希の良きライバルであってくれ」

なのはに傷一つでもつけていたらこの程度では済まされなかつただろう。ほんの少し前に、美由希が気を失っているなのはを抱いて廃ビルを出てきたときは心の底から胸をなでおろした。無論、言葉通り太郎を許す気持ちなど一片たりともない。

そして、太郎の心に僅かでも美由希を憎悪や恨む気持ちがあつたならば、この場で負の連鎖となるそれを断絶していただろう。だが恭也から見た太郎の心には不思議とそういう感情は見受けられなかつた。

憎悪はあつた。怨恨もあつた。でもそれは、自分の無力さに対するものであり——美由希に対して一切それは向けられていなかつたのだ。故に恭也は太郎に一撃だけ入れることによつて自分の気持ちに折り合いをつけた。

山田太郎は確かに才あるものである。他を圧倒する選ばれた人間。天才を凌駕する天才であつた。だからこそ、惜しいと思つた。このままここで朽ち果てるのはまだ早いと何かが囁いた。

恭也は意識を失つた太郎を肩に担ぐ。

身長は恭也と同じ位であるが、体重はそうでもないらしい。確かに見た感じ細身では

あつた。軽々と男一人を担ぐと、魔ビル群から離れようと歩き出そうとした瞬間――

「それ、消さなくてもいいんですか？」

「ああ。別にそんなつもりは一切ない」

無機質な声が響く。感情が一切こもっていない、機械のような声。先程の恭也よりもよほど声色に人間味がなかった。その問い掛けに驚くこともなく平然と返答をして振り返つた。一つの気配が忍び寄ってきたことを理解していたからだ。

先には悠然と恭也を見据える少女の姿。海鳴にいれば注目を集めるであろう容姿と服装だ。それもそのはず、巫女服に朱の帯。その帯には日本刀が差してあつた。それが夜だというのに異彩をはなっている。純粋な黒で塗りつぶしたような真つ黒な長い髪。声と同じ、深い黒の瞳は月の光を拒絶するような冷たい光を放っている。日本人形を思わせる少女だが、身長も年齢も美由希と同じくらいだろうか。美由希とはまた異なる怖気を見るものを感じさせた。

「貴方の家族に牙を剥いたというのに命を奪わないとは……噂とは違い甘いんですね」

太郎を視線だけで射抜き、それ扱ひする少女。人を物と見ている発言に恭也とてそう気がいいものではない。

「……………キミは誰？」

「申し遅れました。不破恭也殿。永全不動八門が一。御神の閨——不破が最終血統」

懐かしき旧姓を言い当てられて、恭也の眉尻が僅かに上がる。不破の名を知っている者。恭也が不破であることを知っている者。そんな者などすでに数えるほど。ましてや、恭也たちの戸籍は父である土郎があり得ないほどに弄くり、もはやそこからたどり着くことは不可能のほずである。だが、少女の挿している刀。雰囲気、身体の創り、そして所作。それら全てを組み合わせれば彼女が一体何者なのか推測はつく。

「天守の一族のものか」

恭也の予想に、機械のように見えた少女はビクリつと一度身体を震わせた。無表情だった顔色にも僅かな驚きが見え隠れしている。

「……仰る通り。わたくしは永全不動八門の一。天守家の次期当主。あまのかみかける天守翔と申しませす」

「聞いたことはある。才氣溢れる天守宗家の娘。永全不動八門の黄金世代を担う一角だと」

「お褒めに預かり光栄です。天守宗家の次女。今年で十六を迎える若輩者ではありませんが、宜しくお願い致します」

自己紹介を続ける少女——翔だったが、その最中にも先程まで出ていた感情の色は既に消え失せていた。恭也は翔の全身を確認するように眺める。といつても別に下心

がある視線ではなく、本当に確認をするためだけであった。

「成る程。最近風芽丘で感じていた違和感。妙な気配を幾つか感じていたが——そのうちの一人は君か」

「……っ!?!」

感情を顔に出さないように心がけていた翔が、再び驚いたように目を僅かに見開く。確かに最近——というか、入学式から翔は新入生として風芽丘学園に潜伏していたが気づかれていたとは思っていないなかったのだろう。その動揺を消すように、翔の雰囲気さらに冷たく、深くなる。

「気づかれていますか……その通りです」

「それで、今更永全不動八門が何用だ？」

翔の賞賛を突き放すように恭也が問い掛ける。言葉に組み込まれた威圧感。それが、波動となって翔を襲う。それに僅かに気圧されたように一歩後ろへ下がった。無意識のうちだったのだろう。自分が一歩下がっていたことを恥じるように、今度は恭也へと一歩足を踏み込む。

「不破恭也殿にお願いしたいことがございます」

「願ひ、とほつ。」

「——御神美由希との戦いを認めていただききたい」

翔が口に出した途端、空気が変わった。その場に居た誰も彼もの心臓を止めんと、凍て付いた空気を呼び起こした。三度翔の表情に感情の色が乗る——それは明確なまでの恐れが感情が、浮かび上がってきている。だが、口は止まらない。

「わたくしは次期当主と言いましたが、あくまでも次期当主候補。精々が二番手程度の資格しかありません。だからこそ、永全不動八門の長老会が畏れる御神宗家の剣士と戦い破った——その証明が欲しいのです。御神宗家を倒したという事実はどんなことよりも評価される筈です。わたくしの魂に誓います。決して卑怯な手等使わず、正々堂々と戦うことを」

恐れているながら、翔は一気に言い切った。恭也のプレッシャーに襲われながらも、退くような事はせず、真摯な瞳で訴えかける。己に出来る精一杯の想いを言葉に乗せ、翔はさらに一步恭也へと歩み寄った。先程までは機械のような少女だったはずが、今は決してそうは見えない。感情がないというわけではないようだ。考え込むような恭也の様子に、どのような返答をしてくるのか不安なのか、自身のごくりと喉が鳴るのが聞こえた。

「そういう理由ならば好きにするといいい」

「——へ？」

翔を襲っていた重圧は気がついたら消えていて、周囲は平穩そのものの空気が流れて

いた。至極あつさりとそう返答した恭也の台詞が信じられなくて、気の抜けた返事をしてしまう翔。さらには疑問系。まさかこんな簡単に了承を得られるとは思つてもいなかったのだ。

「あ、あの——本当に宜しいの？」

「ああ。俺の家族に手を出さなければ、美由希とは好きに戦えばいい」

ある意味冷たいとも取れる恭也の答えだったが、翔はその言葉の裏を読み取つていた。美由希は強い。その美由希と真正面から戦つて勝利を掴めるのと思うのなら、挑んで見せろ、と。込められていたのは絶対の信頼。自分が手塩にかけて育てた高町美由希の力。どのような状況でも、どのような相手でも、必ず打ち倒し、勝利する。

「あいつは、強いぞ?」

自信に満ちた恭也の台詞に、翔は言い返すことが出来なかった。圧倒された。高町恭也の想いに。高町恭也の心に。高町恭也の言葉に。話は終わりだな、と短く確認した恭也に頷く翔。それを最後に山田太郎を抱えて踵を返す。その背中に反射的に声をかけようとして、翔は言葉に詰まった。拒絶している。話は終わりだと。恭也の雰囲気、壁を作つていた。姿が消えてから数秒、十数秒、一分が経ち——ざしゃつと砂を踏み締める音がこの場に響いた。発生源は天守翔であり、その場に膝から崩れ落ち、地面に倒れそうになるのを両腕を突いて支えとした。

「う……はああ……はああ……げっほ……」

呼吸が落ち着かない。身体が酸素を必要として暴れまわる。カチカチと歯が鳴るのをとめられない。全身を這いずるのは、氷点下を遥かに上回る纏わりつくような悪寒。

「なに、なにになになになになになになに、なにになに何なの、ですか……あれは!!」

永全不動八門。それは日ノ本の古い時代から裏で暗躍してきた一族。

無手の如月。針の鬼頭。槍の葛葉。棍の小金井。弓の風的。糸の秋草。

刀の天守と小太刀の御神をあわせて人はそれらを——永全不動八門と呼ぶ。

その中でも最強を誇ったのが御神の一族だ。分家の不破とともに決して敵に回してはならない相手として知られていた。その両家と立ち並んだのが、天守家。かつては双壁とまで呼ばれた一族で、御神家が終焉を迎えた今現在、八門の中でも間違いなく頭一つ抜けた実力者ぞろい。その天守家の中でも歴史に名を残すほどの才を持つと謳われているのが、天守翔である。各永全不動八門に存在する絶対強者の才能を持つ者達——所謂黄金世代の一員として褒め称えられている自分が、その天守翔が——。

「わから、ない……底が見えない。深すぎる……あれが、あれが……関わってはならない禁忌。御神の深淵……不破の魔刃、不破恭也」

自分よりも強い者は少ないが知っている。手も足も出ない化け物染みた剣士も悔し

いが存在している。それでも、その高みは理解できていた。何時か必ず手を届かせるといふ想いのみで修練を積んできた。そんな想いが木つ端微塵に打ち砕かれた。しかも戦ったわけでもなく、彼の力を見せられたわけでもなく……身体から滲み出る圧力のみで、格の違いを理解させられた。

「姉様の……天守翼の遙か上をいつているじゃないですか……」

本来の目的である御神美由希は確かに強い。あの歳でどれだけの鍛錬を費やしたのか、どれだけの才能を必要としたのか。少なくとも自分と同程度の鍛錬を積んできたのは間違いない。流星は不破恭也の弟子である。それは尊敬すべきことだとわかっている。そんな自分たちの修練が、努力が、鍛錬が、子供だましにしか見えない極地を見た。恭也が放つ気配は太陽の光が届かない深海の底。否、否、否——あれは奈落だ。一切の光が到達しない、存在しない真なる深遠。

「天守、御神、不破……？ 永全不動八門？ あははっ……アレはそんな世界に住んでいて良い存在じゃないですよ……」

自身の全てを打ち砕かれた彼女は未だ震えが治まらず、恭也が去った後この場でただ呆然と脅えていた。

▼

永全不動八門との邂逅でさらに時間をくってしまった恭也は内心焦りながら帰宅を急ぐ。流石に連絡もいれずこれだけ遅くなってしまったのは予想外で、何を言われるかわからない。廃ビル地帯を横断する恭也だったが、ふと足を止める。

「——私の妹はどうだったかしら？」

この場に相応しくない、鈴が鳴るような声が聞こえた。どこか楽しげで親愛の情を感じさせる声の発生源は恭也の右斜め前方。数メートル先の崩れかけた建物の丁度影に

なつた場所だ。暗くて人影が誰なのかはつきりとは見えないが、恭也にはその声の主が誰かはつきりとわかつた。

「強いな。美由希でも勝てるかわからんほどに。凄まじい使い手だ」

「あら、有難う。そんなに褒めて貰えるなんてあの娘も喜ぶわ」

凜としたその声でくすくすと笑つて続ける。

「でも少し精神的に脆いところがあるのよ。そこが心配なの」

「姉妹でそこは一緒だな」

「も、もう……。わたしだつてあの時のことは反省しているのよ」

恭也の台詞に今度は若干怒りながらも照れた様子を見せる声の主。

「つまりはそれを乗り越えたとき……尋常ではない進化が見れるわけだ」

「そうね。私もそれを期待してたのだけど——私では難しいわね」

「お前の親は何か手をうっていないのか？」

「残念ながら、父はこういつたことに慣れていないようで全く頼りにならないもの」

打てば返す響きで恭也と少女は会話を続ける。

二人とも互いに全く遠慮がなく、相当に親しさを感じさせていた。

「まあ、高町美由希に期待しましょうか。彼女の存在は——果たしてあの娘の凍てついた心を溶かしてくれるかしら」

「そればかりはわからんが。世の中なるようにしかならんさ」

「それもそうね。あ、そうそう。私がここにきたことは秘密にしておいてくれるかしら？　また変に、翔がいじけたら困るし」

「ん、ああ。わかった」

ありがとう、と声で感謝を述べると気配が恭也から遠ざかるように歩き去っていくものの、途中で何かを思い出して一旦足を止める。

「あ、そうそう。今度御飯でも一緒にどうかしら？」

「そうだな。久しぶりの再会だ。ご馳走しよう」

「あら、優しいのね。お言葉に甘えちやおうかしら」

何と言うこともない返事。されどそこには本当に嬉しそうな響きがあった。

それを最後に少女はその場から姿を消す。それに合わせるように恭也もまた――。



授業全てを終える鐘の音が敷地中に響き渡った。

風芽丘学園県外県内問わずかなり名の知れた名門校で同じ敷地に私立海鳴中央という中学もあるマンモス学園。運動部が強く、そのなかでも護身道部や剣道部、バスケットは全国レベルの強さを誇る。そのため部活が割と活発に活動しているようで、放課後は多くの生徒が部活動に励んでいた。もともと、風芽丘学園はあくまで活発なだけであり、部活動に対する強制はない。そのため結構な人数が帰宅部がある程度楽にできる部に所属している。そんな中学園から敷地を通って帰宅する生徒の波を三階のある教室から見下ろしている男女がいた。

風芽丘学園のグラウンド側にある一室。授業以外は使われることのないその教室に六人の男女がいた。それほど広くない部屋のなかで中央に固めた机を囲んで座っている生徒達が居た。特に話をしようとせず各々やりたいことをやっているような印象を受けた。

一人は、葛葉弘之。

面倒くせえ、と呟きながらも本日学んだ授業についての復習でもしているのだろうか。教科書とノートを見比べながら問題を解いていつている。

一人は、小金井夏樹。

机に倒れ掛かるようにして、身体を休めている。寝ているのだろうか、目は瞑っており、時折寝息も聞こえてきた。

一人は、如月、紅葉。

美由希と話していたときの雰囲気そのままに、どこかぼやぼやとした様子で読書に励んでいる。

一人は、女性を思わせる容姿の少年。

長い黒髪で、顔つきも柔らか。男子の生服を着ていなければ女性と間違えても不思議ではない。そんな彼は小さな鏡を見ながら自分の姿形のチェックを行っている。

一人は、坊主頭の少年。

目を閉じ腕を組んで瞑想にふけている。少年と称したが、纏っている雰囲気、大人びた風貌と合わさって制服を着ていなければとても高校生には見えはしない。

各々が好き勝手に過ごしているように見えるが、全員が全員、ある方向を気にしている。誰かがその話題に触れてくれないか、とそれぞれが視線で合図を送っていたもの

の、誰もが二の足を踏んでいた。すると教室にいる五人の視線が扉のほうへと移動する。すると数秒遅れて静寂を破るように勢いよくドアが開いた。勢いが良すぎて横にスライドしたドアがガンつという音を立てる。

「おいゝす!! あんた達、揃ってる? お、優秀優秀」

扉を開けて教室へと飛び込んできたのは鬼頭水面だ。その両手には何故か山のような菓子パンを抱えている。

「あんたが来いって言ったんだから来てるんじゃないか」

「……昨日の今日で何かあった? まあ……あったんだろうけどね」

口調は乱暴なもの、この場の空気を変えてくれる人物がきたことに内心で感謝する葛葉。そして、机から身体を起ここして追従する小金井。

「突然で悪かったわねー。ま、ちよつと色々あつてさ。ああつと……三時のおやつにあらんたたちにこれあげるわ」

もう三時はとつくの昔に過ぎてはいるが、全く気にしない鬼頭水面は平然と両手で抱えていた菓子パンを宙へと投げ浮かすと、それを瞬時に判別してそれぞれ五人の元へと放り投げた。

「サンキュー」

「……ありがとう」

受け取った菓子パンの袋をあけてムシヤムシヤと葛葉は食べ始める。細身ながらも結構な大食漢の地味に有り難い差し入れだ。逆に小金井は受け取ったものの礼は言つたが食べることさえ面倒くさがつて封も開けずに机と置いた。

「それで、今日は何用でしょうか、鬼頭殿？」

「あんたは礼儀ただしいわねー、風の!! ご褒美にそれをあげちゃう」

「間食はしないようにしております故に、お気持ちだけ受け取っておきます」

「んじや、家に帰つてから食べなよ。年上からの厚意は黙つてうけとつちやいなー」

坊主頭の少年が読んでいた本から視線をあげて答え、飛んできたパンを取ると渋々といった様子で鞆につめる。そしてもうすぐ本題が始まると察したのかその本もついでに閉まっていた。

「如月に秋草もそれでいいー?」

「はい。後で頂きますね」

「ありがとうございます、鬼頭先生。メロンパン大好きなんですよね、うち」

秋草と呼ばれた中性の少年の軽い返事に比べて、如月紅葉は目をキラキラとさせて水面に感謝の念を送る。その姿に、癒やされるわーと思ひながら水面は近場にあつた椅子を引き腰をおろす。

「んじや、さつそくですけど皆様に報告がありまーす!!」

細かい話し合いをすつ飛ばして、いきなり本題に入ろうとする水面に、全員が気を引き締めなおす。全員が一堂に集まる機会など滅多にない。それなのに緊急として収集をかけた謎がようやく解けるのだ。

いや、まあ……実を言うと五人は殆どその内容を悟っていたのだが。

「昨日、そこにいる天守翔が不破恭也に接触を試みました。うん、まあ……それはいいんだけどね。そして見事にバツキバキに心を折られて帰ってきました。以上!!」

そういう理由だったのか、と五人の視線が教室の片隅の椅子に体育座りをして自身の太腿に顔をうずめている天守翔へと向かった。あの天守翔が、何時だつて平常心を保っていた少女が、ずば抜けた実力を持つ彼女が、完璧に打ちひしがれている。苛烈な意志も、気力も、何もかも、全てが失意の底に沈んでいた。

「いやいや、話聞き出すの苦労したんだよ？ 要領を得なくてさあ……話が全くまとまってないの。あんだだけ冷静沈着ぶつてたくせに、もうなんだよーって感じだね」

「……心を折られた？ その割には身体に怪我は見当たらないんだけど……」

「ああ。うん、戦つてないんだって」

「戦つてはいない？ しかし、ならば何故心を折られるような状況に？ 話術のみでそれを為したとでも?」

秋草と風の指摘に、違う違うと水面は首を振る。

「氣^き当たり^りにやられただけだつてさー。いやはや、信じられないよね」

「……マジか、よ」

「笑えないね、それ」

驚愕を浮かべた葛葉と、氣だるげな様子を消した小金井。

實際、そんなことは有り得るのだろうか。有り得るはずがない。何故ならば、天守翔とは、この場にいる六人の中でも恐らくはまともにやり合えば最強。かの黄金世代の一角を担う人物。それはつまり、永全不動八門にてそれぞれの一族でも最強へと至る化け物達と同等の存在と言う訳だ。それほどの者が、ただ向かい合っただけで心を折られるなど理解の範疇を超えている。だが、体育座りして遂にウフフと笑い出した彼女の姿は既にその面影は微塵も残っておらず、ただただ不気味なだけであった。

「……ちよつと、葛葉。あんたなんとかして」

「はあ!? いや、何で俺が……」

「天守と仲良かったでしょ?」

「仲良くねーよ!! むしろ、不仲だと思つてたけどな、俺!!」

流石にこのまま放置するのもマズイと思つたのか小金井が、隣の葛葉へと囁きかける。その内容に拒否するが、他のメンバーからの視線が痛い。お前が何とかしろ、という期待の眼差しを受けて、溜息一つ。仕方なし、と教室の隅っこにいる天守翔へと近づ

いていった。

「あー、その。なんだ。うん」

何と言うか迷っているのだろう。葛葉が自身の頭をガシガシと搔きながら、しばらくしてかけるべき言葉が見つかったのか息を一度大きく吸った。

「お前がよ、そんな落ち込んでと……怪談に出てくる日本人形みたいでこえーんだよ。早く立ち直れよ。お前はそんな性質じゃねーだろ」

パンパンと翔の肩を叩いて他の五人がいるところまで戻ってくる。言ってやったぜ、どうだ——と何故か満足気になっている葛葉に全員が失望の嘆息を漏らす。最悪だ。というか、今のは慰めていたのか。とにかく、こいつはもう駄目だ。全員の意見がこの時ばかりは一致して——。

「う、うーん。でも、幾らなんでも流石に信じられないけどね……」

「そ、そうだな。しかし、鬼頭殿が天守殿と一緒に我らは謀る理由などあるまい」「うんうん。風の君の言うとおりなのは分かるよ？　でもさあ、不破恭也さんって、実際どうなの？　皆の意見聞いてみたいんだけど」

結局無理矢理に話の先を続けることにした秋草と風の会話に、恭也の名前が出た瞬間、ビクリつとわかりやすく肩を震わせる翔に、こりや重傷だなと誰しもが悟った。

「……正直なところ、よくわからねえ」

「……葛葉に同意」

「右に同じだねえ」

葛葉と小金井の率直な感想に、水面も躊躇うことなく頷いた。彼ら彼女らは永全不動八門でもまだ年若いとはいえそれなりに名前が通った人物だ。黄金世代にあと一步のところまで割つて入れるだけの実力の持ち主。そんな葛葉達の、わからない——それは簡単に済ませられる内容ではない。

「……自分も生憎と読みきれん」

「あー、やつぱり皆もそんな感じかー。いや、本当にさ、わかんないじゃん？

あの不破恭也だよ？ 僕たちの上が、一族の当主が、長老会が、絶対に関わるなつて通達してきている相手だよ？」

風的にもまた同様の意見で、それらを聞いた秋草が形の良い眉を顰めて話を続ける。そんな化け物級の相手の力が見れない。いや、一般人レベルの気配しか感じられない。そのようなことがあるのだろうか。

「ちよつとした間ならまだわかるよ。でも監視を始めてから結構経つけど、気配が揺らぐことが一度もないってのはおかしくないかな？」

「んだ？ じゃあ、お前はあいつが不破恭也の偽者つて考えてるわけか？」

「そつちのほうはまだ納得がいくつていうか……。むしろ僕としてはその考えの方に意

見が傾いて——」

「あ、それはないです」

秋草の台詞を遮つて、相変わらずニコニコと笑顔を振りまいていた如月紅葉が言い切つた。なんだよ、と自身の意見を完全に言い終わる前に途切れさせられた秋草は不機嫌そうに紅葉に顔を向けて——ゾツとした。

紅葉は普段のままだ。優しく穏やかで人当たりの良い笑顔。それを直視した秋草は何故か分からないが、この場から逃げなければならぬという直感に襲われた。まるで大型の肉食獣を前にしたかのような緊張感が、痛いほど肌をピリピリと打ってくる。その圧力、その気配、今の今まで見ていた如月紅葉という人間の全てを否定せんと言わんばかりの狂暴性。なんだこの少女は、と思つた瞬間、スパンッと大きな音をたてて水面が持つていたバインダーの一撃が紅葉の頭頂部を直撃した。それで、彼女が放つ危険な気配は霧散する。まるで先程までの圧は蜃気楼であつたかのように。

「はいはい。仲間内では喧嘩はご法度だよ」

「あいたたた……す、すみません、秋草さん、鬼頭先生」

涙目になつて頭を押さえる紅葉に、自然と出てくる安堵の呼吸。穏やかで優しい少女という今までの印象はどうやら変更しなければならぬ、とこの場にいた皆が感じていた。

「それで、それはないとはどういう意味なんだ？」

空気を読まずに風的が紅葉へと話の続きを促す。それに、頭を摩りながら日常会話を
するかのごとく、爆弾発言を投じた。

「だってウチは不破恭也さんに三年前に会ってますから」

「……ちよつと待て。三年前だと？ それってまさか、お前——」

「はい。三年前に行われた血の永全不動八門会談。その三十二名の生存者の一人ですもん、ウチ」

ガタンつと全員がその場から立ち上がる音がした。翔を除いて、全員表情に隠しよ
うのない驚愕が浮かび上がっていた。

「ちなみにあの会談で何があつたかは話す事ができません。長老会に口止めされてますし……それを除いても、あの時のことはウチの心の中に留めておきたいですから」

自身の胸に両手をあてて、ほうつとやけに熱い吐息を漏らす。

そんな彼女に、何があつたか聞くものはいなかった。聞けるものはいなかった。不破
恭也が初めて表舞台に現れたのが三年前の史上最悪の永全不動八門会談、そこに現れた
のが御神宗家の代理——不破家当主不破恭也。永全不動八門全ての当主とそれに近
しい者達による会談に現れた彼は、自分が不破の当主だという証明をしたわけでもな
い。既に滅びを迎えた一族ゆえにできるわけでもなかった。だが、当主達は恭也を不破

家当主として認め——御神宗家の代理として会談に参加させた。それが何故かは分からない。何か裏の取引があったのではないかと勘ぐるものも居た。そして、その会談である事件が起こったらしい。百名以上の死亡者が出た——使用人も含むとはいえ、会談に出ていた達人レベルの使い手達もことごとくが皆殺し。生き残ったのは各一族の当主と幾人か、そして長老会の者達。その会談の後に徹底されたのが、御神と不破に關しては不可侵を保て、という絶対遵守の命令であった。何が起きたかは不明だが、旧時代の爺達が、自分たち以外を駒扱いにしかしていない老害達が、如何なる手段を持ってしても敵対だけは避けようと徹底させた。それほどの存在が不破恭也という化け物であった。

「そのウチが断言します。あの人は恭也さんです。不破恭也さんに間違いありません」
紅葉の発言に、秋草は反論しようと思えばできた。だが、本能が警告してくる。この少女にはあまり関わらない方がよい、と。それに従って大人しく自身の意見は飲み込むこととなった。

「皆さんが不破さんの力を感じられない理由は簡単です。不破さんの気殺の技術が桁外れなだけです。ウチらレベルでは感じ取れない。単純にそれだけですよ？」
自分達程度ではどうしようもない。

平然と言い切る紅葉に葛葉の眉尻が僅かに上がった。

「言い切ったな、おい。まあ、実際感じられない以上、そうなんだろうけどよ。あまり納得はいかねえけどな」

「葛葉は自分で見たものしか信じないタイプだしねえー。ま、私もそーなんだけど」

葛葉と水面は意外にも紅葉の意見に反発しなかった。元々が自身の第六感を重視する二人だ。それ故に、どこかで恭也の実力を無意識にでも嗅ぎ取っていたのかもしれない。

「じゃあ、不破の力を知っている如月に聞く。不破恭也……どれほどのもの？」

「そう、ですね……ウチではあの人の力を読み切れるわけありませんが、多分これくらいでしょうか」

小金井の問いに、紅葉は可愛らしく頷に人差し指をあて暫く考えた後に——パツと手を開いて五本の指を皆に見えるように開いて見せた。その五本の指を見て、難しい顔をするのは翔を除く全員だ。

「ここにいる連中のうちで五人がかりでつてことか。そりや、とんでもねえな」

「やつばいねー。そりや、黄金世代なんて話じゃないじゃん」

「……あんまり実感わかないな、その強さ」

「え？ なにそれ。ヤバイなんてレベルじゃないでしょ？」

「……我らとそう変わらぬ年齢でそこまでの高みに達しているか」

葛葉が、水面が、小金井が、秋草が、風的一驚するさなか、ふつと空気が震えた。発主は、顔を上げた天守翔だ。どこか濁った目で、五人を馬鹿にするかのような視線を送る。

「馬鹿ですね。大馬鹿ですよ……いいえ、わたくしも昨日までなら貴方達と同じ反応をしたのでしょうけど」

突然の発言に、自身に皆の注目が集まるのも気にせず言葉紡いでいく。

「如月は、本当はこう言いたいのです。貴方達に気を使ってかどうか分からないですけど。でも、その正しい意味を教えてください。実際に体験したわたくしの口から」

口元に浮かぶのは自嘲の笑み。

思いつくのはかつてない深淵。至高の極地。

三千大千世界において、人類の極点に達した男の姿。

「彼はですね、不破恭也はこの場にいる七人同時に相手して——五秒で皆殺しに出来る、と如月は言っているのですよ」

力ない翔の無情の台詞は教室の空気を歪ませて消えていった。